

---

# 灼熱の氷

凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灼熱の氷

### 【Zコード】

Z8069Q

### 【作者名】

凪

### 【あらすじ】

社交界きつての美男子ラザフォード伯爵は新しい妻を探しているらしい。

伯爵の義妹の家で家庭教師をしているエミリアは、メイド達の噂話を遠巻きに聞いていた。初めて伯爵に会った時、冷たいグレーの瞳で見下ろされたことを鮮明に覚えているエミリアは、氷のように冷たい伯爵様の一体どこがいいのかと不思議に思っていた。

名のある貴族の令嬢を呼んだ婚約者を決めるパーティーで、最後に

「ラザフォード伯はある女性の手に口づけてこう言った。

「エミリア・アンダーソン嬢。どうか私の妻になつてください」

19世紀イギリスが舞台のヒストリカルロマンを題指して書いていく  
きたいと思います。

## プロローグ

「何か不都合はなかつたか」

5日ぶりに屋敷へ戻つたマグナスは執事のネルソンに外套を渡しながら尋ねた。

暗い色の髪は雨の所為で湿り氣を帯びており、彫刻のように整つた顔には僅かな疲れが滲んでいた。

ロンドンからの帰路は決して快適なものではなかつた。イングランド特有のどんよりとした雲は、相も変わらず気紛れに雨を降らせる。ぬかるんだ道に馬車の車輪が嵌り、その為予定よりも帰りが遅くなつてしまつた。

マグナスが何度も懐中時計を開くのを、御者の男が情けないほどに怯えていたのも苛立ちの原因だった。

ラザフォードの邸を留守にすることは珍しくない。爵位を継いでからもう幾度となくロンドンと領地を行つたり来たりしている。

ロンドン滞在中は気紛れに口説き文句を使つてみたり、友人たちと夜通し酒やカード遊びに熱中するのが常であった。

留守を任せるにあたり、マグナスはネルソン以上に適任者はいないと思つている。

マグナスが幼い頃からこの邸に仕えている穏やかな執事はあの頭の固い父親でさえも一目を置いていたし、友人であるキングスリー侯は度々彼を冗談交じりにスカウトしていた。

寸分の隙もなく整えられた服装に、後ろに撫でつけられた髪。それはマグナスが彼を知つてから全く変わっていないことだった。

「いいえ、旦那様」

礼儀正しく帰ってきた言葉ではあつたが、返答までの僅かな時間で何かしら不都合があつたことを悟る。

それには思い当たるただ一つの理由も。

「…ダニエルか」

僅かな溜め息と共に紡いだ息子の名前。今のマグナスにとつて唯一の頭痛の種であつた。

妻はダニエルを生んでもすぐに亡くなつた為、ダニエルは母を知らない。

しかし、貴婦人の多くは子供を乳母に預け、自分は連日パーティー やオペラの鑑賞に勤しむのが普通である。子供が年齢を重ねれば、その仕事は乳母に代わり家庭教師が担うこととなる。

彼女たちは母親であることよりも貴族の夫人である方が大事なのだ。その為サリアナを失くしてから数年、後妻の必要性を感じてはいなかつた。

今年3歳になる息子は普段は大人しいものの、ふとした瞬間に酷く癪癩を起こす。誰が宥めようともすぐには治まらず、屋敷中の使用人を悩ませていた。

初めは乳母が大袈裟に言つているだけだと取り合わなかつたが、最近では子供には母親というものが例え飾りであつても必要なのかもしれないと思うようになつっていた。

少なくともマグナス自身幼い頃にそう感じたことは一度も無かつたが。

結婚という一文字は決してマグナスを樂しませるものではなかつた。亡くなつた妻、サリアナも親同士が決めた結婚であつたため、愛どころか情すらも移ることはなかつた。

ただ未来の妻だと言われた女に会い、結婚し、グランヴェル家の後

継ぎを儲ける。ダニエルが生まれた時、これでもう伯爵としての役目は果たしたと安堵したのに、だ。

まったくもつてサリアナがお産と共に亡くなってしまったのは計算外であった。

それでも勝手を知る乳母や執事に息子を任せ、どうにか3年はやってこられたのにまたもや予想外の出来事だ。せめてあと4、5年経つていれば寄宿学校にでも入れられたのに。

考えただけで胃が重くなる。あの忌々しい結婚とやらをもう一度繰り返さなくてはいけなくなるとは。

しかし、このまま放つておくわけにもいかないだろう。

暫く考えを巡らせた末、思いついたのはベッドフォードシャーに住んでいる義母のことだった。マグナスの実母が亡くなつた後父の後妻に入った女だが、父が亡くなると同時に実家のあるベッドフォードに生まれたばかりの娘と一緒に帰つていった。

尤も、マグナスの父と彼女が婚姻関係にあつたのはほんの数年のことでその間マグナスはグランドツアーバーに出かけていた為、殆ど義母と言葉を交わした記憶も無いが。

彼女も社交界の華だった一人だ。勿論顔も広い。

少々面倒ではあるが、手紙を出し結婚相手を決めるように取り計らつてもらうことになった。

何かと世話を焼きたがる義母は喜んでその申し出を受け入れてくれるだろうから。

マグナスは自身が愛情を持った人間でないことを知っていた。

彼の両親がそうであつたように、彼もまた愛というものをまるで信じていなかつた。マグナスにとって愛を語るのは一夜の駆け引きに使う言葉で充分であつた。

生きしていく上で不要だと感じても必要だと思ったことはない。

妻に求めるのはダニエルの母親になる資格だけだ。

伯爵家の家名を汚すような女では困るし、愛など求められても応えるつもりはない。

甘い言葉を求めない従順で大人しい女、ダニエルはサリアナの髪の色を受け継いでいるから金髪がいい この国に一人ぐらいはいるだろう。

「義母上に手紙を出す。用意を頼む」

「畏まりました旦那様」

階段を上り、真っ直ぐ自室へ向かう。

慣れ親しんだこの部屋だけが唯一マグナスの心を穏やかにさせた。一流職人の手で作られた芸術品のような椅子に疲れた体を沈ませ、首元を締めていたクラバットを緩める。

考えなければならぬことがあり過ぎて痛み出したこめかみをゆつくりと揉むが、痛みが和らぐことはなかつた。

マグナスにはその胸の奥に幾重にも錠を掛けた秘密があつた。決して誰にも知られてはならぬ秘密が。

その秘密の為にも後妻など向かる気は更々なかつたのに。

まったくもつて、何もかもが計算外だ。

苦々しげな溜め息は誰もいない書斎に重苦しく響いた。

エミリア・アンダーソンがベッドフォードにあるヒー、チザースハウスに来てもうすぐ一年になる。

両親を亡くしてから一体どうやって生活していくかと悩んだが、知り合いの牧師が紹介状を書いてくれたおかげで名門と名高いラザフォード伯爵の別邸に勤めることが出来た。

気のいい女主人と、天使のように愛らしい令嬢。ロンドンのような喧騒はなく、ひたすら静かで穏やかな日々であった。

使用人でもない家庭教師という立場は時としてとても居心地が悪いものだが、ここに仕えているメイド達はみなエミリアによくしてくれた。女主人は必要以上の使用人を雇わない為、使用人同士の絆は強く良好な関係を築いていた。

そのことをエミリアはとても幸せに思っていた。持参金も持たない自分は恐らく一生独身のままだろう。だから生徒であるレティシアが立派な淑女レディになるまでは全力を尽くすつもりであった。

いつものように襟が詰まっているモスグリーンのドレスを身に着け、長い金髪を後ろ手に編み込む。ここ一年ほど同じ動作を毎日繰り返している為か、支度をする手際はよく、無駄がない。

童顔の上に身長もあまり高くないエミリアはよく実年齢よりも下に見られるが、解くときに痛いほどきつちりと髪を結えばそれもある程度は隠せることを知っていた。

割り当てられた部屋は丁当たりも良く、そこそこの広さがある。尤も、その広さを有効に使えるだけの荷物を持たないエミリアにとっては、些か居心地が悪いようにも思つたが。

クローゼットの半分にも満たない衣服と父の形見である数冊の本、

それから母から受け継いだカメオのブローチだけだ。

母が結婚するときに父から貰つたと囁つそれは、決して貴族が付けるように纖細なものではないがどこか温かみがあるものだった。

母は時折引き出しの奥からそれを出しては暫く嬉しそうに眺め、そしてエミリアに父との出会いを話す。どこか口マンスめいたその話は聞く度に父親像が変化していくので、父は顔を赤くして母を止めていたが、エミリアにはどのお伽噺よりも素晴らしいと思えた。

今でも両親のことを思つと胸が痛む。それは生涯変わらないであろう。

「でも今は両親のことを思い出している時ではないわ」

言い聞かせるように、鏡に映る自分にそう言った。

そつ、今やるべきことは自分を雇つてくれた主人に報いることだけだ。

\*

廊下に出た瞬間、屋敷全体が何やら浮足立つてゐるのをエミリアは感じた。

人のいい女主人が切り盛りしている為、普段から重苦しい雰囲気はないがそれでも今日はいつも以上だ。

（何か、あつたのかしら…）

レティシアの誕生日はまだ先だし、大きなパーティの予定も入つていなかつた筈だ。

そんなことを考えていると、丁度向こうから馴染みのメイドが走つ

てくるのが見えた。両手に何やら抱えてとても忙しそうであったの  
で一瞬声をかけるのを躊躇つたが、向こうもエミリアに気付き興奮  
したよつて近寄ってきた。

「エミリアさん、おはよひります」

「ええ、おはよひります。それより随分と忙しそうですね」

さりげなくそういう切りだせば、メイドのリーザはええ、といふらか頬  
を紅潮させながら言つた。

「つい先ほど旦那さまからお手紙があつたのです」

「旦那様…？」といふと、ラザフォード伯爵様から？

それ以外旦那様という人物に心当たりはないのだが、エミリアは思  
わず聞き返していた。

何しろラザフォード伯はエミリアが覚えている限り、一度もチエザ  
ースハウスに宛てて手紙を寄こしたことなどなかつたのだ。

例え義理ではあっても血の繋がつた妹や母は気にならないのかとい  
つも不思議に、そして時には不満にも思つていたのだが、一介の家  
庭教師が進言する権限などない。

義母であるこここの女主人も、妹であるレティシアも大して気にして  
いる様子もないところから上流階級に属する貴族はそういうものな  
のだと己を納得させていた。

そのラザフォード伯爵がこけらに手紙を寄こしたのは新鮮な驚きで  
あつた。

「ええ。なんでも新しい奥さまを探していらっしゃるそいつですわ。  
それでこけらで婚約者を決めるパーティが出来ないかと」

新しい奥さま？

楽しそうなリーザとは正反対に、エミリアの類は完全に引き攣つていた。

ラザフォード伯爵、マグナス・グランヴェルが先妻をお産の際に亡くしたというのはエミリアも知っていた。

その話を初めて聞いた時は伯爵に深く同情した。きっと愛する奥さまを亡くされても落ち込んでいらっしゃるだろうと。

お産で命を落とす女性は少くない。きっとこれから先、どんなに医療が発達したとしても100パーセント安全な出産などないだろう。

ラザフォード伯爵が後妻を娶ることになんら問題はない。

しかし、しかしだ。先妻が亡くなつてまだ3年も経つていいだろうと記憶しているエミリアには、到底理解出来るものではなかつた。

ふと、始めて伯爵と会つた時のことがエミリアの脳裏に浮かんだ。ここで雇われるにあたり、主人である伯爵に先ずお面通りをとことで伯爵領であるラザフォードまで行つたことがあつた。

城と見紛うばかりの立派な屋敷を見た途端、エミリアはおもわず帰りたくなつた。名門のグラントウェル家に仕えることが出来るのはとても名誉なことだったが、想像していたよりも豪奢な邸は家庭教師になりたてのエミリアを威嚇しているようにも思えたからだ。

それでも何とか物腰の柔らかそうな執事に連れられ、伯爵の書斎へと通された。

あまりに緊張していた為、自分の名前すらきちんと言えたかどうかも疑問だつたがあの瞬間のことは今でも鮮明に覚えている。

伯爵は窓辺に立つていた。庭園が一望できるような大きな窓と深紅の生地に金の刺繡が施されている豪華ではあるが落ち着いたカーテ

ン。

一流の仕立てによる服を着たその後姿は、こちらが恥ずかしくなるほど真っ直ぐであった。

執事がエミリアが到着したことを見出されると、伯爵はやつとひやりを振り返った。今まで見たことのない美貌にはっと息を飲む。硬質そうな黒い髪、ギリシア彫刻のように整った容姿、背はすらりと高くそれでいて貧弱な感じは少しもしない。寸分の隙もないほど完璧な服装は、仕立屋が大いに喜んだらうと思つほど彼に似合っていた。

エミリアはその時おもわず、着てゐる流行遅れの野暮つたいドレスが今だけ最新の美しいドレスに変わらないかと願つた。

「お、お田にかかるて光栄に思います伯爵様。レティシア様の家庭教師となりましたエミリア・アンダーソンと申します」

おずおずと名前を言い、精一杯勉学を教えることを伝えたが伯爵から返事が返つてくることはなかつた。

緊張のあまりそんなことを気にする余裕も無かつたが、退出する為顔を上げたエミリアは伯爵のあまりに冷たい瞳に足が竦んだ。

グレーの瞳は何の感情も宿さずにエミリアを見下ろしていた。しかしそれも一瞬のことと、すぐに視線は外される。

ピンと張つた背中をエミリアは呆然と見ることしかできなかつた。ただ、仮にも一番近くで自分の妹を見るであらう家庭教師に、伯爵は何の興味も湧かなかつたことだけは分かつた。  
遂にそのたつた一度の機会ですら、伯爵と言葉を交わすことはなかつた。

まるで氷のように冷たいお方なのだわ。

あの時と同じ感情でエミリアはそう思つ。そしてまだ見ぬ後妻とな

る夫人にほんの少しの憐みを感じていた。

それに、3つになるかならないかのご子息様は新しい母親の事を一  
体どう思うのだろうか。

貴族にとつて当たり前だと言わればそれまでだが、エミリアは未  
だに幼い我が子を乳母に預けて夜会に繰り出す貴夫人たちを理解で  
きずに入た。

自分が子供の頃を思い出すと、両親が不在な時はとても寂しく不安  
だつたからだ。両親を見ていると尚更そう感じる。

（あんなに立派なお屋敷に住んで毎日の生活にも困らない人たちな  
のだろうけれど、もしかしたら家族の愛を知らないのかも知れない  
わね……）

エミリアがそんなことを考へている間にもリーザのお喋りは止まら  
なかつた。

「さつとイギリス中の未婚女性がここに集まりますわよ  
」

だと、

「こうしてはいられないわ！普段使つていらない客間を綺麗に掃除し  
なくては！伯爵様の恥になるようでは困りますから…」

だと。

次から次へと可愛らしい口から飛び出す言葉に、苦笑いが零れる。  
メイド頭であるアンナの怒号が屋敷中に響くのも時間の問題だらう。

嵐のように去つていつたリーザの後姿を見ながら、恐らく今日の勉  
強の時間は大分削られるのだろうなと予想する。

何しろ今玄関から入つてくるのは、女主人とレティシア嬢の新しい  
ドレスを作る為の仕立屋だからだ。

エミリアもレティシアの家庭教師としてその素晴らしいパーティー

に出席するだろつ。

その時自分が着る服は一体何にすればいいのかと、途方に暮れた。クローゼットに入っているのは紺色と若草色、それと褪せた黄色の、それもとっくに流行など過ぎてしまつた型のドレスだからだ。家庭教師としては問題ないが、夜会に出るにはあまりに粗末過ぎる。伯爵家には恩がある分、来客に笑われるような恰好をしてはいけないのだと分かっているがそれも難しいだろつ。

( こゝセリー ザ達と同じようこメイド服に身を包もつかしら )

やがて来るであひつその口を黙つと、 ハリコトは腹の辺りがとても重くなるのを感じた。

伯爵から手紙が届いてから数日、エミリアが伯爵の名前を聞かなかつたことはなかつた。

どこへ行つても話題は伯爵へ移りその容貌の美しさから、彼の華麗なる女性遍歴までエミリアは聞かされる羽目になつた。

メイド頭にお客様の噂話をするのを慎めと嗜まれても、彼女たちはまるで示し合せていくかのように集まつては色々な噂話に華を咲かせていた。

メイドたちがまるで英雄物語でも語る様な口ぶりで話す伯爵の立派な経験は、エミリアの伯爵に対する意識を更に悪くするのに最適であつた。

一方、妹であるレティシアは何年も手紙一つ書かなかつた伯爵を責めるどころか、彼がいかに素晴らしい、知性に溢れているかを熱弁しエミリアに軽い眩暈を覚えさせた。

一体伯爵のどこをどう見たらそういう結論に達するのかと心配する程、エミリアの知る伯爵とレティシアの語る伯爵とでは差があつたのだ。

エミリアが知る限り、レティシアが生まれた時伯爵はグランドツィアーノの真っ最中であつたし、彼が帰つて来る頃には前伯爵が亡くなりレティシアは母と一緒にこちらに来ていた筈だ。

きっと心の中で理想の兄の姿を描いているのだろうと思うと、深くレティシアに同情し、それと同時に一度も会いに来なかつた伯爵に強い怒りを覚えた。

だからエミリアは、レティシアが伯爵の話を始めた時は勉強を一時中断して耳を傾けることにしたのだ。

尤も、主人たちのドレスの新調や客室の掃除に駆り出されたお陰でもともと勉強がはかどるような環境ではなかつたのだが。

レティシアの空色の瞳が何かを思い出しかのように嬉しげに細まり、ペンを持つ手が止まるのを確認してエミリアも持っていた本を置く。今日のフランス語の授業はここで終わりだろう。伯爵から手紙が来てからたつた数ページしか進んでいないことに気付き、エミリアはそっと溜め息をついた。

これが伯爵に知られ、職務怠慢として減給されなればいいが。減給ならばいい方だ、最悪なのは職を失うことだ。

紹介状も持たない家庭教師が新しい勤め先を探すのは決して容易ではない。そうでなくとも家庭教師という職業は中流階級の女性が唯一レディとしての対面を保てるものの為、数が多くぎるぐりいなのだ。

「ねえ、先生、聞いてくださいる？」

そんなエミリアの心配を余所におおよそ子供らしからぬ大人びた口調でレティシアは始める。

「なにかしら」

「お兄様の新しい奥様ってどんな方がなるのかしら」

きっと傲慢で、舞踏会や夜会が大好きで、子供の世話など死んでもしたくないと思ってる人よ。

心の中でそう思つたが、まさか口に出すことは出来ず、「ビックしらね」と曖昧な返事を返した。

「素敵なお兄様だといいわ。お兄様の前の奥様とはお知り合いになれなかつたけれど…私きっと、新しいお義姉様を好きになれると思うの」

きっと、おそらくレティシアの淡い願いは叶うことないだろう。

けれどわざわざそれを教えて落ち込ませることはしない。エミリアはそつとレティシアの左手に自分の右手を重ねた。

そして話題を逸らす為に極めて明るい声でこう切り出した。

「さあ、レティシア。窓の外を御覧なさい。あなたの新しいドレスを作りうと、今日も仕立屋がやつてきたわ」

その一言にレティシアは喜びの悲鳴を上げ、窓の傍に近づいて行った。

丁度、この数日間ですっかり馴染みとなつた仕立屋が真鍮で造られたドアノックを叩いているところであった。

\*

ラザフォード伯マグナスが招待客より一足早くチエザースハウスに着いたのは、夜もそろそろ更けて来た時であった。

馬車から下り、長旅であちこち体が軋むのが分かつたがいつものことだ。馬丁に手綱を渡すと、半ばうんざりとした目で田の前の邸を見た。

まさかここに来ることになるなうとは。しかしそれも花嫁を見つける為のほんの数日のことにすぎない。

出来るだけ早くダニエルの母となるべき人物を見つけ出し、ラザフォードの屋敷に戻るだけだ。

マグナスは玄関へ通じる階段を踏みしめるように上った。

エミリアはその時、レティシアを寝かしつける為に子供部屋にいた。今日はいつもよりも時間がかかってしまった。レティシアは兄に会

うのが嬉しくて堪らないらしく、いつもよりも長くエミリアに伯爵の素晴らしい話を語っていたのだ。

初めは律儀に相槌を返していたのだが、いつまでたっても終わりが見えないと悟ると、ティシアの髪を優しく撫で、一刻も早く眠りについてくれることを願った。

その願いが通じたのか、数分後に安らかな寝息が聞こえた時は心の底から安堵し、いつも以上の疲れを感じている体を引きずつて自室に戻る前の事であった。

玄関ホールが騒がしくなったかと思うとバタバタと人の足音が聞こえ、それから女主人であり、マグナスの義母でもあるメリッサの明るい声が響く。あくまで、楽しそうな声を出しているのはメリッサだけなのだが。

そのまま階段を下りるのも躊躇われ、エミリアは無礼だとも思ったがその場に立ち去りしそうと様子を窺つた。

僅かに見えた伯爵の顔は、覚えているよりもずっと美しかった。彼の少し憂いを含んだ横顔は、メイドたちが噂するようにイギリス中の女性たちを虜にするだろう。それこそ既婚者も未婚者も関係なく。

「ああ、マグナスー待っていたのよー何年ぶりかしら? 変わりはなくて?」

親しげに腕を伸ばし抱擁しようとするメリッサをマグナスは冷たく一瞥し、まるでお手本のような礼を取つた。

「お久しぶりです義母上。このような時間になってしまい申し訳ありません」

「いえ…いいのよ。長旅で疲れたでしょ? すぐに部屋まで案内させるわ」

メリッサとマグナスの間には、まるで幾重にも壁が掛かっているよ

うにエミリアは感じた。それも、彼の方が一方的に立てている。

それはメリッサも感じたことなのか、先ほどの嬉しそうな顔から一転し、今は何とか笑みを作つていて見えた。

女主人に呼ばれてポールという名の執事がマグナスに頭を下げる。ポールは結構な歳ではあつたが優しく、この邸に来たばかりのエミリアに親切にしてくれた使用人の一人であつた。

エミリアはポールの朗らかな人柄が大好きなのだが、一瞬彼の眉が顰められたのをエミリアは見逃さなかつた。

どうやら伯爵様はポールの決して素早いとは言い難い動作がお気に召さなかつたようだ。

まったく、なんて人かしら。

誰も見ていないのをいいことに、エミリアは内心の苦々しい思いをおもいつきり顔に出した。

メリッサに対する態度も、執事への視線もなんて冷たいのか。

そもそも自分の出した手紙一つで、こここの屋敷中の使用人がどれほど大変な思いをしているのかも彼には全く関係のないことだろう。パーティに呼ぶ客　つまり、未婚の女性たちのことだが　すらメリッサが決め、招待状を出したのだ。

伯爵がすべきことと言えばこのパーティの為に惜しみも無く費用を出し、呼ばれた女性たちの中から相応しい姫君を見つけることだけ。

義母と妹の気持ちなど、きっと微塵も汲みとつていらないに違いないのだ。

と、エミリアがそこまで思つた時、マグナスが急に視線を上げ階段の上にいるエミリアをその視界に捉えた。

エミリアが慌てて頭を下げるのと同時に、マグナスがメリッサに「誰だ」と聞いているのが聞こえた。

「レティシアの家庭教師をなさっているミス・エミコア・アンダーソンよ。去年お会いになつたのではなかつたかしら? もう一度紹介しましようか?」

マグナスはメリッサの申し出を断りほんやりと記憶を辿つたが、メリッサの言つ往年に彼女を見た覚えはなかつた。

幼い顔に御世辞にも似合つているとは言い難い、きつく束ねられた金色の髪。薄茶色の瞳はマグナスへの興味を隠そうとせず、瞬きをする度それが増していくようにも思えた。

しかしそれは社交界の多くの女性が自分に向けてくる何かを含んだようなものではなく、どこか嫌悪されているような視線であつた。だいぶ流行遅れの深い藍色のドレスは彼女の襟や袖まですっぽりと隠しており、余計に野暮つたく見える。

自分が知る女性が見たら馬鹿にしたように笑うか、悲鳴を上げるな。そう思つて初めて、マグナスはエミリアを注意深く観察していたことに気付いた。

「部屋へ案内してもらおうか、ポール」

さつとエミリアから視線を外し、マグナスは執事へと向き直つた。その硬い声に、ポールは今までにないくらい俊敏に動いた。マグナスの為に用意された客室の中でも一番上等な間は廊下の奥にある。

「それでは失礼する。義母上、ミス・アンダーソン」

先ほど探る様な不羨な視線を向けられたエミリアは暫く言葉を失つていたが、現実に返つた時には既にマグナスの後姿は小さくなつていた。

シーズン外で、しかもロンドンではないにも関わらずハウスパーティーと銘打つその場には結構な人数の男女が集まつた。

別邸ながらなかなかの広さを持つホールにはメイドが始終忙しそうに給仕に走り、招待客は噂話や自慢話に花を咲かせる。

会場にはゆつたりとした音楽が流れ、幾人かは手を取り合い音楽に合わせて踊り始めた。

その中心で未来の花嫁になるうかという女性たちに囲まれながら、マグナスの怒りは静かに、そして確実に頂点へ向かおうとしていた。余計なことを口走らない為に飲んでいた大して美味でもないワインは既に4杯目に差し掛かろうとしている。

何しろ女性たちの話題を言えば、流行のドレスはどこぞの仕立屋が一流だとか、身につけている宝石の値段や貴族の噂話ばかりで少しも興味をそそらない。

その上、事あるごとにマグナスに向けられる意味深な笑みや押しつけられる豊満な体にもうんざりであった。

マグナスは早くも自分の失態に気付くこととなつた。

確かに義母には結婚相手を探す手伝いをして欲しいと手紙に書いたが、ダニエルの母親を探す手伝いをして欲しいとは書かなかつたのだ。

集まつた令嬢たちは確かに名のある貴族ばかりであつたし、美しさも充分であつた。しかし欲しいのは子供への愛情だ。

マグナスが持つ広大な領地、それから莫大な財産に、所有する全ての邸を賭けてもいい この中にダニエルの母親に相応しい令嬢は誰一人としていない。

美貌も持参金も、家格もいらない。必要なのはしっかりと子供を育

てられる女だ！ マグナスは胸中で悪態をつきながらグラスに残ったワインを飲みほした。

この苦みと酸味が全ての苛立ちを消してくれることないと知つても。

しかしそんなマグナスの心中とは裏腹に、女性たちは次々と話題を変えていきマグナスと少しでも話そうと躍起になつていた。

「ラザフォード卿の庭は素晴らしいと聞きましたわ」

リッチチモンド侯爵令嬢 名は紹介された氣がしたが、既に記憶にはない が演技がかつた口調でそう切り出すと、周りにいた他の女性も一斉にマグナスの方へ視線を向ける。

その媚を売る様な目にマグナスは笑みを返しながら、内心で嘲笑つていた。

実際、ラザフォード伯爵の庭はイギリス中でも5本の指に入るほど素晴らしいものであつたが、例えこの場で庭が薦と雑草に覆われたみすぼらしいものだと言つたとしても、彼女たちは日々に賞賛の言葉を浴びせるだろう。

庭の様子など未来の伯爵夫人にとつては何の問題でもない。マグナスの持つ財力の方がはるかに魅力的だからだ。

「そうですね。私が妻を娶つた際には是非とも我が屋敷へ。妻の話し相手にでもなつてくださいと嬉しいのですが」

暗にこの中にはいるどの女性とも結婚する気はないとほのめかし、マグナスは果然としている令嬢たちから新しいグラスをとつてくると言ひ離れた。

それまで遠目にマグナスと令嬢を見ていたメリッサの眉が彎り上がりつたが、マグナスの関知するところではなかつた。ただ一つ言えることは、あと一分であつてもこの場にいることは耐えられそうにな

いといふことだけだ。

できる限り早足でテラスへと向かう。噎せ返るような香水の匂いばかりを嗅いでいた所為か、ひどく新鮮な空気が欲しかった。  
マグナスの気迫に押されていたのか誰もマグナスを呼び止めようとはしなかつた為、案外すんなりとテラスまで出られたのは幸いであった。

大きく息を吐くと、しばらく感じたことのなかつた疲れが体中に圧し掛かる。

背中越しにぼんやりと聞こえるワルツと、男女の笑い声。それがたつた一枚のガラスの扉によつて遮断されるのは、とても不思議な気持ちだ。

マグナスはほんの10分ほど休んでからホールに戻るつもりだった。ひどいパーティではあつたが、マグナスはダニエルの母親を探すことを諦めてはいなかつた。

まだ数名、きちんと会話をしていない令嬢がいたはずだ。もつとも、その数人の中に花嫁となるべき人物がいるとも思えないが万が一といつ場合もある。

なるべく早く花嫁はみつけたい。この際母親に相応しいかの基準は少し下げ、いかに夫に従順であるかを優先すべきか。

夫に従順であれば、ラザフォードの領地にダニエルと一緒に住むことに強くは反対しないだろう。大切なのは「ダニエル母親」という肩書きなのだ。

金輪際、婚約者を探すためのパーティを開くのはまっぴらだ。女性たちの質問に対してもう答えを考えるのも、思つてもい世辞を言つのも。

それらを使えば、今会場にいる軽薄な娘たちが従順で素晴らしい母親になるのならあちらがうんざりするほど並べ立ててやつてもいい

が、残念ながらマグナスの鬱積が溜まるだけで少しの利益も見込めそうにない。

そんなことを何度も繰り返さなくてはいけないと思つだけでもぞつとする。

だから何としてでも今日、このパーティで花嫁を探す必要があった。

森の奥から吹く風がアルコールを含んだ体を心地よく通り過ぎていく。光も何もない空間ではあつたが、心が落ち着くような気がした。丁寧に刈られた芝生の向こうにはひたすら森が続き、夜の静寂を時おり鳥の鳴き声が破る。

おもわず感嘆のため息が零れた。

「ねえ、先生。お兄様は喜んでくださるかしら」

「どうかしら。けれども立派な花束が出来上がったわね」

ふと下から聞こえた声に視線を落とすと、暗闇の中にぼんやりと浮かぶ光があった。

蝋燭の燭台を持つた女が一人と 子供が一人。

それが妹であるレティシアだと気づくのに随分と時間がかかった。すると先生というのは、あの家庭教師のことか。

マグナスは妹の家庭教師だと紹介された娘を思い出した。確か名前はエミリア・アンダーソンといった。

彼女がパーティに出席するとは聞いていない。今夜招待された客は女性のが多かつた為、これ以上の女性客は不要だつたのだ。

マグナスが見ているとも知らず、2人は楽しそうに笑っていた。

薄暗い為にはつきりとは確認できなかつたが、レティシアのドレスは土で汚れお世辞にも淑女らしいとは言えない。それを教えるべき家庭教師もそんなことは構わずに、レティシアと視線を合わせるか

のよつに腰を下していた。

きっと彼女のドレスの裾も汚れているに違いない。その事実を想像し、マグナスは顔を顰めた。少なくともマグナスの知る家庭教師たちは、今の彼と同じような反応をするだろう。

しかし、エミリアだけは違つたようだ。レティシアが彼女に向つて伸ばした泥のついた手ですら、笑顔で握りしめる。イギリス中の貴婦人なら悲鳴を上げて叱り飛ばすだろう行動を、だ。レティにはあるまじき行為なかもしれない。しかし不思議と嫌悪感は湧かなかつた。

### 「ミス・アンダーソン」

気づいたらそう声を掛けていた。マグナスは自身の行動に驚いたが、エミリアはそれ以上だつた。

短い悲鳴を上げ、視線を向けた先にマグナスの姿を確認するとまるで叱られる前の子供のようにバツの悪そうな顔をした。既にレティシアがいるのも知られているのにも拘らず、彼女はそつとレティシアを背中に隠すことも忘れない。

だが次の瞬間には ドレスに泥が付いていること以外 完璧なレティのように軽く膝を折り、マグナスに笑顔で挨拶をしていたのにはさすがに感心した。

「こちらにおいでだとは存じ上げませんでした。このような恰好で… その、申し訳ございません」

「一体何をしていたのだ？」

途端にエミリアは口を噤まざるを得なかつた。

パーティにレティシアは招待されていない。エミリアはメリッサにパーティに出てもいいと言っていたが、着るドレスがなかつた為に適当な言い訳をつけて断つた。

いつもようにレティシアを寝かしつけようと部屋に入った時、レティシアにお願いをされてしまったのだ。

お兄様のお嫁さんになる方に、花束を作つて差し上げたい。マグナスが屋敷に来てからというもの、レティシアは必死に兄と仲良くなろうと努力をしていた。食事のたびにドレスを変える姿や、いつ兄が部屋に入つてきてもいいようにいつも以上に勉強を頑張る姿は抱きしめたくなるほど愛らしかった。

しかし兄であるラザフォード伯爵は妹と親しくなるつもりは微塵もなかつたようだ。

食事の時以外は仕事と称して部屋にこもつているか、馬に乗つて森へ狩りに行つてしまつ。その為レティシアが招待した午後のお茶会に、マグナスは2度とも欠席した。

エミリアは呆れてものが言えなかつたが、レティシアは諦めなかつた。

少しでも兄を喜ばせたい。その一心があの言葉を言わせたのだとエミリアは知つている。

今夜はお忍びで庭に出るには絶好の機会であった。エミリアと他数名のメイドたち以外は全員パーティに出払つてゐるし、そのパーティが終わるのは日付が変わつた後だろう。

レティシアの期待に満ちた瞳の前で無碍に断ることもできず、2人はこつそりと部屋を抜け出し庭に降りてきたのだ。

夜に咲いている花などほとんどないが、切り花にして生けておけば明日の朝にはまた花を咲かせる。そうしたら花束にして伯爵に渡せばいい。

あの無表情な顔も少しばかりは変化するのかと思つと少しだけ興味が湧いたし、花を摘むぐらいだったらそれほど時間はかかるないと高を括つていたのがいけなかつたのか。

「私の記憶が正しければ妹はとっくに寝ている時間だと思つたが、」

「私の記憶が正しければ妹はとっくに寝ている時間だと思つたが、」

何も答えないエミリアにマグナスは続けた。

妙な威圧感にじぐりと喉が鳴る。レティシアが不安げにエミリアのドレスの裾を掴んだが、大丈夫だと言つよつてエミリアは優しくレティシアの背中を叩いた。

「よ、夜の授業をしていたのです。伯爵様」

Hミコアの返答にマグナスの眉が上がる。

「授業？」

その声色には呆れたようなものも含まれていた。

エミリア自身も苦しい言い訳だとは思つたが、一旦口に出してしまつたものを撤回するわけにもいかない。

なるべく冷静に、いかにも有り得そうな風を装つことが一番だと思った。

「ええ。夜にしか教えられないことはたくさんあります。もちろん、本から知識を得ることはとても大切なことです、やはり実際の体験とは大きく違いますから」

マグナスは家庭教師の行動をじつくりと見つめた。

動搖している様子はない。寧ろこちらが驚くほど口調は冷静だ。相も変わらずみすぼらしいドレスは、彼女の肌を隠していたがレティシアを撫でる指先とほんの少しだけ襟元から覗く首筋は月明かりに照らされ、まるで真珠のように輝いている。

先日きつちりと結われていた金髪は今は少しほつれ、柔らかなウエーブを作っていた。

一見、華奢な体に見えるがレティシアを後ろ手に庇う姿は凛としていて隙がない。あの薄茶色の瞳は真っ直ぐマグナスを見据え視線を逸らそうとしなかった。

それはマグナスにとって初めてのことだった。

大抵の女はマグナスを見ると頬を染めさつと視線を逸らすか、上目づかにこちらの反応を窺うかのどちらかであった。

これは大いに興味をそそる。

恐らく夜の授業というのはこの家庭教師が咄嗟に作り上げた嘘だ。だが、彼女はレティシアを守る為に嘘をつく。

ある一つの考えがマグナスの頭を過る。確信に近い勘であった。

「それは素晴らしい。教育熱心な家庭教師を妹につけることができて私も嬉しく思う」

またもやHミリアは言葉を失った。てっきり何を馬鹿げたことを、と言われるのを覚悟していたのだが。

しかし伯爵は少しも怒った様子はなく、先ほどにはなかつた笑みすらその顔に浮かべているような気がした。

何かとてつもなく嫌な予感が背中を駆け上がり、Hミリアは思わずレティシアを抱きしめていた手に力を込めた。

マグナスは庭に出る為に作つてある石造りの階段をゆっくりと下りた。

その姿はまるで一国の王子をながらのより優雅で、絵になる光景であった。驚くべきことに伯爵はこちらに向かつて歩いている。

そう気づいたHミリアは一步後ろに下がりたくなつたがレティシアの手前、なんとか踏みどじまつた。

ちょうどエミリアがいる場所まであと数歩、というところで突然テラスの扉が開き今日の為に新調したドレスを着たメリッサが現れた。

「マグナス！」

静寂が一気に破られ、近くの木に止まっていた鳥たちが一斉にばさばさと羽を羽ばたかせ暗闇に消える。

「一体どういうつもりなの？ 今夜はあなたの為のパーティなのに、主役がいないだなんて…」

苛々とした口調でマグナスの姿をとらえたメリッサは、庭にエミリアとレティシアがいるのを見てさらに眉間に皺を寄せた。

大きく胸の開いた流行のモスリンのドレスはメリッサの魅力を最大限に引き出していた。同じような色を着ているのにも拘らず、エミリアとのドレスとは大違いである。

家庭教師であることに流行のドレスは必要ないが、ほんの少しだけ憧れを持っているのも事実だ。

メリッサはマグナス、エミリア、そしてレティシアと順に視線を辿らせていき、言葉では言い表せないような奇妙な表情をした。レティシアとエミリアはとっくに寝ているものだと思っていたし、マグナスに至つてはどうして庭に下りているのかすら分からぬ。しかしメリッサが理由を問うよりも早く、マグナスの口が開いた。

「義母上、結婚相手を決めました」

その場にいた誰もが言葉を発せずにただ呆然とマグナスを見た。あまりに突然であり、予想もできなかつた言葉だ。

「それは…その、素晴らしいわ。ええ、とても

長い沈黙の後、ようやくメリッサは口を開いたが大きく戸惑つていいのがエミリアには分かつていて。

伯爵がこんなに早く結婚相手を決めたことには驚きだが、はつきり言つて何の関係もない。伯爵が新しい奥方を娶つたところでエミリアの生活が何か変わるわけではないのだ。

ただレティシアとこの場にいるのはとてもまずい気がしたので、さりげなくレティシアを急かして屋敷の中に戻ろうとした。  
可哀想な花嫁の名前は明日にでも屋敷中を駆け巡るだらう。それから花束を作つても遅くない。

しかしエミリアは前に進めなかつた。その手を誰かが強く引いたからだ。

「あの…伯爵様？何かご用でしようか」

レティシアと一緒に花を摘んでいた所為でエミリアの手は土で汚れていた。

その手を伯爵がじつと見てゐるという事実に、かつと頬が熱くなる。レディがこんな手をしてゐることにきっと呆れていらつしやるのだが、マグナスが取つた行動は全くの逆であった。

マグナスは暫くエミリアの手を見ていたが、不意に胸元からハンカチを取り出し丁寧に彼女の手に付いた土を払い落した。

そして軽く指先を取るとあわてことかエミリアの手に口づけをしたのだ。

エミリアもメリッサも呆気にとられる中で、マグナスはエミリアと視線を合わせたまま芝生の上に片膝を立てた。

「伯爵様！」

「マグナス！」

ラザフォード伯爵ともあろう人物が一介の家庭教師に膝を折るなど  
という信じ難い光景に、エミリアとメリッサはほぼ同時に声を荒げ  
た。

しかしそんな2人の声を無視して、マグナスは言葉を続ける。

それこそ、思つてもみなかつた言葉を。

「エミリア・アンダーソン嬢。どうか私の妻になつてください」

Hミリア・アンダーソン嬢。どうか私の妻になつてください。

年頃の娘がそうなように、Hミリアにも結婚に対する憧れはあった。どこかの貴公子が自分を見初めて、愛を囁いてくれるのを想像したこともある。

もともと、両親が亡くなり、家庭教師という職に就いた時にはそんなのは夢物語に過ぎないと諦めてはいたが。

しかしまさにその夢物語が現実になつてしまふことを、一体誰が想像したというのだろう。

昨夜あまりの出来事にHミリアはろくに睡眠もとることができなかつた。寝ようと思い目を瞑ると、伯爵の言葉が何度も繰り返し頭の中に響くからだ。

あの時テラスにいたのはたつたの4人。暫く口も聞けなかつた女主人は、さすがに状況を飲みこむのは早かつた。

傍にいたレティシアに今聞いたことは誰にも話すなと念を押し、未だ伯爵の婚約者候補たちが残つてゐるホールへマグナスを連れて戻つていつた。

もちろんHミリアに鋭い一瞥をくれることを彼女は忘れなかつた。Hミリアは何一つ分からないままテラスに取り残され、一体いつどうやつて自分が部屋に帰つたのかも曖昧であつた。

メリッサは完全に誤解している。きっとHミリアが何らかの方法で伯爵を誘惑したに違ひないと思つてゐる。

だが、よくよく考えてほしいのはHミリアのように身寄りも持参金もない娘がどんなに誘惑したところで名家の伯爵様がそう簡単になびくのかということだ。

遊び程度ならともかく、伯爵は結婚相手を探している。Hミリアを

妻にしても何の得にもならないことを、早々にメリッサは気付いてくれるだろうか。

そんな淡い期待は朝食の席で見事に打ち砕かれた。

メイドから今日は自室で朝食を摂るようにと言わされて初めて、メリッサはどうしようもないほどエミリアに怒りを覚えているのだと知つた。普段ならエミリアも一緒にと誘いが来るのに。

朝食もそぞろに、エミリアはマグナスの部屋へと足を急がせた。早くに昨日の言葉を撤回してもらい、メリッサにも納得してもらわなくてはいけない。

幸い、婚約者を決めるパーティは今夜もある。その中からラザフォード卿に相応しい奥方を見つけて頂かなくては。

伯爵にしてみればほんの気まぐれだつたはずだ。美しく着飾つたご夫人方を見た後で、みすぼらしい服に身を包んだエミリアを見たのが新鮮に感じてしまつただけ。

それかものすゞくお酒に酔つていたか。  
兎にも角にも一晩を置いた伯爵は冗談だとは言え、エミリアに求婚したことを後悔していることだらう。

一言あれば嘘だと言つてくれれば謝罪などいらない。気のいい女主人と気まづくなりたくはなかつたし、これが原因で家庭教師をクビになつてしまつ方がよっぽど問題だ。

伯爵の部屋の前に来ると一度、執事のポールが出てくるところであつた。ポールはエミリアを見て一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに軽く頭を下げ自分の仕事へと戻つていつた。

今さらだが、伯爵の部屋に入るのは初めてのことだ。そもそも入る理由もないし、エミリアがまともにマグナスと言葉を交わしたのは昨晩が初めてなのだ。

それまではマグナスの姿を見て頭を下げるることはあっても、一切マグナスから話しかけてくることはなかつたし、さらに言つてしまえ

ばHミリアの存在自体マグナスは関知していなかつた。

まつたく貴族の考えはよく分からぬけれど、人を巻き込まないで欲しい。

沸々と湧きあがる怒りを抑え、ドアをノックする。

「誰だ」

「伯爵様、Hミリア・アンダーソンです。お話があるのでよろしいでしょうか」

「…入れ」

静かにドアを開けると紅茶のいい香りが辺りを漂つっていた。

伯爵は窓際の椅子に座り、一人でチェスを打つていた。戦略でも考えているのだろうか、白と黒の駒がチェス盤の上を交互に動く。その近くの小さなテーブルの上にはティーセットが置かれ、カップからは温かそうに白い湯気が立ち上っていた。

「何か用だらうか」

Hミリアの方は見ずに、マグナスはそう言った。ナイトを動かすか否かで迷っていたからだ。

「昨晩のことなのですけど……」

言いにくそうに切り出され、ああ、とマグナスは興味なさげに返事を返す。きっと式の日取りやドレス、婚約指輪のことなどを聞かれるのだと思つた。

実はとつぐに女性が喜ぶようなダイヤの指輪は用意していたし、ドレスに関してはマグナスは全くの無知である為に義母に任せることにしている。

その義母は昨日のマグナスの言動が大層お気に召さなかつたら

しく、今朝は一言も口を利いていないが。

だが今さらどうしようもない。マグナスはエミリアと結婚することに決めたのだし、彼女以上にダニエルの母親に相応しい女性が今夜のパーティに現れるとも思わなかつた。

聞いたところによると、エミリアは両親を亡くしているらしい。持参金などマグナスには不要であるし、義母などこれ以上増えても煩わしいだけだ。いないに越したことはない。

結局ナイトを動かすことに決めた。

「分からぬことがあるたら、なんでも義母上に聞くといい。式はなるべく早く執り行いたいが…」

「待ってください伯爵！私はあなたと結婚するとは言つていません！…」

半ば悲鳴のよつて言われた言葉に、マグナスは耳を疑つた。

「なに？」

そこで初めてエミリアと視線が合つ。襟の詰まつたドレスは度重なる洗濯で色が褪せていたし、古めかしいレースに縁取られた袖は幾分エミリアには短いような気がした。

時間がなかつたのか、ずっとときつちり結わえてあつた髪は緩く後ろに流されマグナスはその長さを初めて目にすることとなつた。

胸の前で固く握りしめられた両手に、蒼白になつた顔。唇は微かに震え、何度か物言いたげに開いてはまた閉じた。

どうやら昨日の言葉は決して冗談ではなかつたらしい。エミリアは崩れそうになる足を必死に奮い立たせる。冗談でないのなら更に問題だ。

エミリアは一度大きく息を吸い、自分自身を励ました。部屋を訪ねた時は目も合わせない伯爵の傲慢さに怒りを覚えたが、真っ直ぐ見つめられる居心地の悪さを思えば百万倍マシだつた。

仕立てのいい服を厭味なく着こなしている姿はまさに理想の王子様のようだし、この国でも有名な整つた顔立ちは確かにメイドや令嬢たちが騒ぐのに充分だろう。

その上、名門と名高い伯爵様だ。その彼に見つめられていると思つだけで恥ずかしくて仕方がない。

マグナスはエミリアの頬にさつと紅が走るのを見て、あまりの初心さに驚いた。マグナスの知る婦人たちは彼と目が合つが否やにつっこりと笑うか、誘うような笑みを浮かべるかのどちらかであったからだ。

いや、それは今問題ではない。マグナスは思った。問題なのは

「ミス・アンダーソン。聞き間違いでなければ、君は私と結婚する気がないと？」

エミリアははつとしたように顔を上げマグナスを見てから、戸惑つたように頷いた。

マグナスは呆れ果てていた。一体どういうつもりで私の求婚を断るというのだろう。私と結婚すれば欲しいだけのドレスや宝石を買うことができるし、社交界でもラザフォード伯爵夫人と言ひ名は充分に羨望を集める筈だ。

マグナスが求めているのはダニエルにとつて母親という存在になつてくれることだけ。しかもダニエルが寄宿学校に入るほんの数年間だ。その後は妻がどういう暮らしをしようと、マグナスは大目に見るつもりでいたのに。

それにこのとき家庭教師を続けても結婚できるとは限らない。そん

な中で私の申し出を断るとは、なんと浅はかな女なのだ！

そう怒鳴つてやりたかったが、紳士としてマグナスは口を噤んだ。

しかし、微妙な雰囲気を感じ取ったエミリアは恐る恐る切り出した。

「伯爵様、この度のその、申し出は大変光栄に思います。しかし私は家庭教師の身。今なら伯爵様が私に求婚したことは誰も知りません。ですから」

かつん、とマグナスの手から離れたナイトの駒が固い盤に当たつて音を立てる。

マグナスは内心怒り狂っていた。何に、ではなく全てにだ。金色の髪をした家庭教師が結婚を拒む」とも、おどおどとその理由を説明することにも。

そして、こんな状況下にあってもマグナスがダニエルの母を娶らねばならないという現実にも。

彼女は何一つ分かってはいない。マグナスだって出来れば一度と結婚はしたくないが、それでもしなくてはならないのだ。

代々続く名門の伯爵家として後継ぎを立派に育てることも義務の一つ。それを途絶えさせる気は更々ない。

「さて、ミス・アンダーソン」

穏やかに彼女の名前を呼んだつもりであつたが、マグナスの声は予想以上に低かつたらしい。エミリアの肩が小さく跳ねた。

「私の申し出を受けることで君に益はあつても損は生じないと思うが、一体何が不満なのか教えて頂けないだろ？」

エミリアは息を飲んだ。伯爵の口から紡がれた言葉がまるで信じられない。

傲慢にも程がある。彼は私に断る権利すら与えてはくれないのだ。それに神聖な結婚を損得で考える人を夫として見ることなど一生できないだろう。

「もし、それでも君が私と結婚するのが嫌ならば」

マグナスはエミリアの口が開く前に続けた。これは最後通告だ、と心の中で言いながら。

「一時間以内に荷物を纏めてこの屋敷から出て行きなさい」「えつ……？」

随分冷めてしまった紅茶を飲み、マグナスはゆっくりと立ち上がった。メリッサがイギリス中から買い集めているという中国趣味の茶器は美しいがマグナスの趣味ではなかった。

重い雲の隙間からところどころ漏れる光のカーテンは、屋敷の外に広がる芝生を照らしている。

これでもエミリアが結婚を断るのであれば、もう引き留めないつもりであった。しかし同時に断れるわけがないこともマグナスは知っていた。

一度職を失えば、紹介状なしに新しい働き口を探すのは容易ではない。二度と貴族の家庭教師は出来ないだろうし、生活の保障はなくなってしまう。

そんな馬鹿な選択をする人間がどこにいるというのだろう。少なくともエミリアはそこまで浅慮な考えの持ち主ではないはずだ。

「どうして……そこまでしてまで私を妻に望む理由はなんですか？」

先ほどの勢いはすっかり無くなり、エミリアの声は呟くように小さくなっていた。

結婚を拒んだら働き口を失う。だからと言つて、エミリアを愛してもいな男の許へ嫁ぐことを簡単に決めることは出来ない。そう、伯爵はエミリアのことなど少しも愛してなどいないのだ。ただ何らかの目的があつて、エミリアでなくてはならないだけで。もう選択肢は残されていないに等しい。だつたらせめて理由が欲しかつた。

「一つ言えることは、私は君と結婚しても愛や恋を求めたりはしないといふことだ」

「それはどういう意味でしょ？…？」

「私が欲しいのは息子の母親であつて、妻となつた女性と色恋をするつもりはないのだ」

氷のような瞳で、氷のような冷たい声でマグナスは言つた。  
後ろを振り返りエミリアが呆然としているのを見て、優越感に似た感情が湧きあがる。  
もう彼女の答えは決まつたも同然だ。

「さて。答えを聞かせて頂けないだらうか… エミリア」

マグナスの言葉にエミリアは絶望的な気持ちを抱えながら頷いた。  
それしか残された道はなかつたからだ。

「なんですか！」

予想していたとは言え、メリッサのあまりの驚きようにマグナスは眉を顰め、エミリアは身を縮めた。

あの脅迫とも取れる奇妙な求婚にエミリアが頷くが否や、マグナスは早速彼女を義母の部屋まで連れてきた。言つまでも無く、結婚の報告をする為に。

数人のメイドに囲まれて紅茶を飲んでいた女主人は、突然の来訪にあまり歓迎的ではなかつた。

マグナスがドアから入つてくるときに見えた微かな笑みは、エミリアが続いた時にはすっかりなくなつていたからだ。

「マグナス…」

右手を額に当て、疲れたように首を振つたメリッサにもマグナスは動じる様子はない。真っ直ぐに義母を見つめ、次にどんな言葉が来るのか待ち構えているようにも見えた。

その重苦しい沈黙に耐えられなかつたのはエミリアの方だった。息は詰まり、今すぐ部屋から飛び出していきたい衝動をピンと伸びたマグナスの背中を見ることで何とか抑えようと努力するのに必死だつた。

まだそんな冗談を言つているの？

聞こえる筈のないメリッサの心の声が、溜め息に重なり耳の奥で不協和音を奏である。

メリッサの視線はマグナスを辿り、彼の背に隠れるようにして立つエミリアを見据える。その顔にははつきりとした嫌悪が見て取れた。

やはり受けたのではなかつた。エミリアはマグナスの後ろで気が付かれないようにそつと、溜め息を吐く。

仕方がなかつたとは言え、よくしてくれた女主人の信頼を失うのはあまりに辛いことだつた。

しかし、例えエミリアがこの場所でマグナスに脅されたのだと訴えたところで、ますますエミリアへの不信感が増す以外は状況は何も変わらないだらう。結局のところどんなに関係を深めたところで、エミリアは一文無しの家庭教師に過ぎないので。

貴族の言葉とエミリアのような中流階級者の言葉、人々がどちらを信じ支持するのかは目に見えている。それを知つていてるエミリアはメリッサの視線を避け、口を噤むしかなかつた。

「あなた一体自分が何を言つていいか分かつていいの? エミリアは家庭教師で、おまけに持参金すら持つていないのよ?」

口調は落ち着いていたが、メリッサの激しい感情ははじから今まで伝わつてくる。侮辱ともどれる発言にエミリアはじつと耐えた。

「ええ

対するマグナスは義母の苛立つた様子をものともせず、冷静にその怒りを受け止めていた。

マグナスにとつて義母の都合などまったく気にするといひでもない。歳を感じさせない美貌に現れる怒りは、ただただ煩わしいだけであつた。

貴族として最初の結婚で美しく身分のある女との結婚は果たした。だが今度ばかりは別だ。義母が求めているような娘と結婚する気は更々ない。

ちらりと後ろに控えているエミリアを見れば顔を真つ青にして、今

にも倒れそうであった。マグナスはさりげなくエミリアの腰を支えるようにして手を伸ばしたが、エミリアの腰は軽々とマグナスの腕が回ってしまうほど細く、その瞬間弾かれたようにマグナスを見る瞳は頼りなくどこか幼い。

そういうえばエミリアはまだ18なのだとこいつことを思い出し、マグナスは自分の放った言葉に少しだけ後悔を覚えた。  
もつと誠意を込めて事情を話せばよかつたのだろうか。しかし、誠意や優しさの術を彼は知らなかつた。

せめてエミリアには結婚後何一つ不自由はさせないつもりでいる。  
彼女はただダニエルの母親といつ役割を担つてくれればそれでよかつた。

マグナスが軽くエミリアを自分の方へ引き寄せたことに、メリッサはますます眉間に寄せた皺を深めた。

「マグナス！」

メリッサの金切り声には流石にマグナスも黙つてはいなかつた。  
確かに法律上ではメリッサはマグナスの母親かもしれない。しかし実際は血の繋がりのない赤の他人だ。

家督あつた父が生きていた頃ならまだしも、伯爵の称号は既にマグナスのものであり、そのマグナスが全てを決定する権利を持つている事を義母は忘れている。

人間としての道理はわきまえているが、生憎マグナスには家族にすら分け与えるような優しさも慈悲も持ち合はせてはいなかつた。  
冷やかに義母を見下ろしたマグナスの視線は一瞬にして彼女を黙らせるのに充分な威力を持ち合わせていた。マグナスの横で腰に回された手にばかり意識が向いているエミリアには分からなかつたのが唯一の救いだ。

「義母上。私は口論をしにきたのではありません」

「え、ええ。そ、…私もあなたと言い争いなどしたくはないわ」

先ほどまで興奮で頬を上氣させていたのにも拘わらず、メリッサは指先から氷水の中に入れられたような冷たさを肌で感じていた。気を紛らわそうとカップに手を伸ばしたが、指先が取つ手の部分に軽く当たっただけで断念せざるを得なかつた。情けないほどに震えている。

「義母上が私の結婚に心を碎いてくださつてのことにはとても感謝しています。しかし、私はもうミス・アンダーソンを妻にすると決めたのです」

「でも」

「これ以上の話し合いは必要ない。式は一か月後。必要な経費はすべて私が出します。義母上はどうか彼女の力になつてください」

尚も言い募らうとするメリッサの声を片手で遮り、マグナスはそのままエミリアの手を引き彼女の部屋を後にした。

ドアが静かながらも重々しく閉まる音が後ろ手に聞こえ、くぐもつた声でメリッサが何か叫んでいるのを搔き消した。マグナスは歩く速度を落とそうはしなかつた。長い脚の一歩は女性 それもあまり背の高くなないエミリアにとつては数歩にも匹敵する。

空気は重く、息を吸うのですら緊張を強いられた。

一連の会話の中で言い訳どころか一言も言葉を発することが出来なかつたエミリアは必死で逞しい後姿を追いながら、マグナスの言った”話し合い”は完全な失敗に終わつたのだと悟つた。

「私は明日、ここを発たなくてはならない。色々準備を進める為に」

唐突にそう切り出し立ち止つたマグナスの背中にエミリアはあと少

しでぶつかるところだつた。後ろに体を引いてなんとかそれは避けたが、マグナスの言葉の意味を咀嚼した途端耳を疑つた。

明日、発つですって？

確かめるように心中で繰り返したエミリアは自分の耳がおかしかった所為で聞き間違えたのではないと分かると、ますます混乱した。一体伯爵は私をここに残してどうしろというのだろう。確かに婚前前の男女が一緒に住むことなどありえないのだし、実家がないエミリアにとつて勤めているチエザースハウスが実家のような場所だと思つていいだろう。

しかしそれは、エミリアが同じような身分の男性と結婚した場合だ。まさか先ほどのメリッサの態度をもう忘れてしまつたのだろうか。冷たい態度を取られたまま一ヶ月を過ごすだなんてとてもじゃないが耐えられない。メリッサは決してエミリアを許したりはしないだろ。

仲が良かつた使用人たちの顔も次々と浮かんでは消えていく。彼女たちはメリッサほどではないが、きっとエミリアに対しても前のように気さくに話しかけてはくれないだろう。

余所余所しい視線、この屋敷の中でどこにも自分の居場所がない自分

考えるだけで体が震えてくる。

そんな毎日を過ごすのなら、家畜たちと同じ場所で眠れと言われた方がよっぽどましだつた。少なくとも彼らはエミリアに冷やかな視線を向けたりはしないのだから。

「式はこの館か私の領地で行う。そうだな、君は招待したい友人がいるだろ? からここがいいだろ? 花嫁を新郎に引き渡す役は私の方で探しておくとして、花嫁衣装は……」

「伯爵様」

未来の花嫁の方を振り返りもせず、自分の都合だけを押しつけてくるマグナスの言葉を途中で遮り、エミリアは静かに頭を下げた。

心身ともに疲れ切っていた。たった半日の間に自分の残りの人生はまるで地獄へと変わり果てた。

マグナスの息子の母親になる、それだけの為にエミリアは全てを失つた。愛してもい、愛されてもい、男に神の御前で結婚の誓いなど立たれるはずもない。

涙すら出でこないのは未だに現実を受け入れられないのか、それとももはや希望すらも絶たれたと諦めたからなのか。いずれにしてもこれ以上マグナスと顔を合わせていろることはエミリアには出来なかつた。

「今日はもう休ませて頂いてもよろしこうか?式に關しては全て伯爵が言つ通りにいたします」

これがあなたの望んでいる答えなのでしょうか?式に關してはういう意味を込めて言った。

マグナスの表情は俯いていた所為で見えなかつたが、拳に力が入つたのは分かつた。怒らせてしまつたかもしれないがそんなことは気にならない。

どう行つてもこれ以上悪い方向へ進むことなどないのだから。

「よろしい。また何かあればこちらにくるとしよう。ではゆつくりと休みなさい」エミリア

皮肉をたっぷりと含んだキスをエミリアの口へ柔らかな頬に落とすと、マグナスは紳士の礼を取つた。それに続きエミリアもドレスの裾を持ち応える。

お互い背中を向け合ひ別々の方を向いた時、マグナスは苛立たしげに歯軋りし、エミリアは一筋の涙を流したのだった。

\*

「ちょっと、そこのあなた」

流行のドレスを着た女性に引き留められ、エミリアはその場で立ち止り頭を下げた。今回のパーティに招待された客全ての顔など覚えてはいないが、ぞんざいに自分を呼んだところからしてきっと名のある貴族なのだと分かる。

グランヴェル卿が家庭教師に求婚したと言つ噂は誰を通してかは知らないが、既に屋敷中に広まっていた。

気位の高い女主人やましてや伯爵になど真相を聞く者はいない。そうなると必然的に人々の怒りや好奇の矛先はエミリアに向かつ。エミリアが疲れ切った精神を休める為に部屋へ向かう間に、来客からは鋭く睨まれメイドたちからはなにか言いたげな視線を何度も受けられた。

一つ一つに反応する気力も残つてはいなかつたが、貴族の呼びとめを無視するわけにもいかない。なるべく彼女たちが知り得ない通路を通ってきたがそれも限界だつたようだ。

「あなたがこの家の家庭教師？」

「…左様でござります」

自分が呼びとめられる理由はそれしかないのだが、次に浴びせられるであろう言葉を思つとどうしても体が硬くなってしまう。

「 もう。 どんな手を使ったのかは存じませんけど、 素晴らしい手腕をお持ちなのでしょうね。 是非ともご教示願いたいわ 」

分かつてはいたが他人に言われると言葉は威力を増すものだ。 ハミリアに出来ることはただ黙つてこの場をやり過へし、 令嬢たちの嫌味が終わるのを待つだけ。

どうやつたつて一介の家庭教師が伯爵を誘惑したのだと皆思つのだ。 自分が当事者ではなかつたらハミリアでもそう思つていただろう。 メリッサが招待した客に美しさだけではなく、 教養も兼ね備えた令嬢が殆どいなくて良かつたと心底感謝した。

知識のある人間はそれだけ語彙も豊富だ。 今のように何度も同じ言葉を言われ続ければ少しずつ慣れてくるが、 頭のいい令嬢に言われた一言はこれの何万倍もの威力を持つてハミリアの心臓を刺した。 涙が出ぬように頭の中で必死にかけ算を数えたが、 それでも一瞬だけ耳に入つた言葉は令嬢の声のトーンまでも鮮明に思いだすことが出来るほど。 あの痛みは一度と味わいたくはない。

ハミリアが小さく震えていることに満足したらしい令嬢は、 さつとドレスを翻らせ靴音を響かせながら廊下の奥へと消えていった。 漸く深く息を吸うことが許され、 ハミリアは肺いっぱいに新鮮な空気を取り入れた。 季節は変わるとこに、 どこか湿つた空気は渴いた喉をゆっくりと潤していく。

鼻の奥が微かに痛んで、 やつと自分が泣くのを堪えているのだと知つた。 子供の頃はよく大声で泣いては両親を困らせ、 おもいつきり甘えた。 母親の腕の中と、 父親の髪を撫でる手が何よりも優しいのだと分かつてから。

だけどその両親はもういない。 誰もハミリアが泣くのを傍にいて慰めてくれる人はいないのだ。

泣くのはまだ早いわ。 そう自分に言い聞かせハミリアは部屋へと足を進めた。

部屋に帰つたらまづ鍵を閉めて、熱いお茶を飲もう。それから楽しことを沢山考えるのだ。伯爵との結婚は悪いことばかりではないかもしねれない。

きっと伯爵はロンドンや領地の事で頭がいっぱいで私のことなど気に掛けないに違いない。伯爵の息子とうんと仲良くなつて私自身の手で立派に育てよう。幸い子供は大好きだし、男の子を相手にするのは初めての経験だ。きっと毎日が発見と驚きの連続だらう。

ふとレティシアの事を思い、ミリアの心は今までにないほど抉れた。

自分の尊敬する兄が私のような身分を持たない女と結婚することを、彼女は一体どう思つだらう。私のことを恨むだらうか。

昨夜2人で作った花束をレティシアは嬉しそうに眺めていた。それがこんなことになるなどなんて誰が想像できたと言つのだらう。レティシアの恨みの籠つた悲しい瞳が頭の中に浮かんでは消え、その度にミリアの心は激しく痛んでいった。

マグナスが宣言した”一か月後の式”は、思ったよりも早くやつてきた。気付けば結婚式は明後日に迫っている。

初めの一週間こそは満足に睡眠もとれないほどであったが、日を重ねるだけエミリアの心にも僅かながら余裕が生まれていた。

状況はエミリアが覚悟していたほど悪くはなかつたのが一番の理由だろう。

メイドたちはエミリアが考えていたよりずっと寛大で、一言二言冗談交じりに嫌味を言われた以外はいつも通りに接してくれている。仲の良かつたリーザはマグナスが領地に帰った翌日、エミリアの顔を見るなり大声で歓声を上げ抱きついてきた。

彼女は「あなたなら何かやつてくれると思っていたのよ！素敵だわ！」とまるで自分のことのように喜んで、エミリアの為にハンカチを何枚か縫つてくれたし、メイド頭のアンナは一昨日の夜さりげなくレースで編んだ結婚式用の手袋を渡してくれた。

なによりエミリアを安心させたのはこの家の主人2人のことだ。メリッサは相変わらずエミリアに腹を立てているが、それでも前ほどではなく、つい先日朝食と一緒に取らないかと言われた時は泣きそよな程嬉しかつた。

レティシアが大人たちのように貴族の世界にまだ疎かつたのは幸いした。彼女は尊敬する兄と大好きな家庭教師の結婚に大喜びで、花嫁のブーケを作る役目は自分に任せてくれと言つて大人たちを困らせた。結局兄の一言でそれは叶わなかつたが、エミリアはこつそり一本だけならブーケの中に紛れさせることが出来るとレティシアに耳打ちしたことで彼女の機嫌を損ねることはなかつた。

明日の結婚式が終わり次第、エミリアはラザフォード領へと旅立つていく。

少ない荷物をトランクに詰めていたエミリアは、おおよそ結婚を控えた女性には似つかわしくない溜め息をついた。

ベッドの傍には明日着る予定の花嫁衣装が、白く輝きながらそこについた。古ぼけた時代遅れのドレスしか持つていないと知っていたメリッサが特別に用意させたのだ。

仮にもラザフォード伯爵夫人になるといつ娘に粗末な格好をさせるわけにはいかなかつたのだろう。

メリッサがエミリアの為に呼んでくれた洒落た服に身を包んだ仕立屋は、エミリアの体をあちこち寸法しては時々意見を聞いたり何か考えるような仕草をしていた。

とは言つてもエミリアにはドレスにあれこれ注文をつけられるほど のセンスも無かつた。ドレスを作ること自体久しぶりであるし、貴族が追いかけている流行にはとても疎かつたのだ。

結局、デザインの殆どが仕立屋の意見で成り立つたのだが、慎ましやかでそして美しかつた。仕立屋もラザフォード伯爵夫人のウェディングドレスを作つたとなれば更に自分の知名度が上がる事を見越してか、出来上がつたドレスは神前で誓いを立てるにはぴったりの出来栄えであつた。

結婚式にきた人々は誰もエミリアが身寄りのない孤児だとは思わないだろう。

だけど一体それに何の意味があるというの?ふいにそう思い、ぴたりと忙しなく動いていた両手が止まる。

傍から見たら幸せに満ちた未来を描けていただろう。しかしエミリアの心の中は結婚式が近づくにつれ、深く重くなつていつた。

先ず偽りの愛を神の前で誓うことに罪悪感を覚えた。神の教えを重んじていた両親に育てられたエミリアにとって、最も神聖だと言われている結婚に嘘をつくことは鉄の塊を飲みこむように苦しいことであつた。

貞淑を誓い、従順であること出来る。しかし生涯の愛を誓つほどにはマグナスを知らない。エミリアが知つてのことと言えばたつ

た一つ。伯爵は噂通りに彫刻のように美しく、氷のように冷たい心を持つた人物ということだけだ。

### 「ミス・アンダーソン」

控え目なノック音の後、執事のポールがドアの隙間から顔を出した。ポールの白髪混じりのグレーの髪は緩やかに後ろに撫でつけられており、いつそうポールの人柄の良さを際立たせているようだった。彼は一礼してエミリアの部屋に入ると、目を細めて感慨深げに部屋中を見渡した。何か言いたげな表情でエミリアを見た。ポールだったがそれは一瞬の事で、次の瞬間には直ぐにいつもの執事の顔に戻っていた。

「旦那様がお見えです」

その言葉にエミリアの心臓は一気に早鐘を打つ。

伯爵と顔を合わせるのはあの日以来実に一ヶ月ぶりのことだ。つまり準備があるからと婚約したその日に領地に帰つてから、マグナスがエミリアを訪問したのは初めてのことなのだ。

こんな些細なところにも愛情がない結婚だといふことを知らしめているようでエミリアはとても悲しかった。

「そう…」

知らず知らずのうちに声も緊張を孕んで硬くなつていく。

「分かりました。伯爵様はどうぞ」

「応接間にいらっしゃいます」

「すぐに参りますと伝えてください」

ポールが部屋から出て行った後、エミリアは鏡に映る自分に溜め息をつきたくなつた。結婚間近なのだからと言われ、もう随分レティシアの勉強を教えてはいない。彼女には来週新しい家庭教師がつけられるらしい。

仕方がないことだとは言え、自分の居場所が一つ消えていくことがちなく感じる。いつもの習慣できつちりと髪を結つてはいるが、それもなんとなく板につかなくなつてきていた。

数秒鏡を見つめたエミリアは短く息を吐くと結つていた髪を解いた。腰まで伸びた金色の髪はきつく編み込んでいた所為で緩くウェーブを描いていた。

半分だけ結い、あの半分は背中に流す。

「大丈夫よ、エミリア。きっと大丈夫」

いつものように鏡の中の自分に言い聞かせ、エミリアは覚悟を決めたようにゆっくりと瞼を上げた。

ドレスがみすぼらしいのはいつものこと。今更どうすることも出来ないし、これがエミリア・アンダーソンなのだ。

応接間には香りの高い紅茶が温かそうな湯気を出していた。つい先ほど執事のポールがこの紅茶と一緒にエミリアが来ることを伝えていた。

マグナスは紅茶に口をつけようとはせず、天井まで伸びている窓の傍に立っていた。

あれからひと月が経つたが、毎日日が回るほどの忙しさであった。帰つてすぐに結婚の告知をし、新たに迎え入れる妻の為に彼女付きのメイドを何人か雇つた。マグナスが結婚すると言うと屋敷中の使用人たちの一瞬絶句したが、伊達に優秀な者ばかりを集めた訳ではない。

すぐに気持ちを切り替えた彼らはそれから一週間も忙しなく働く羽目になつたのだった。

しかしマグナスの仕事はそれで終わりではなかつた。執事のネルソンは控え目に、だが的確なアドバイスとしてマグナスにあの部屋を改装してはどうかと提案した。

あの部屋とは言うまでも無く、代々奥方のみが使われる事を許される部屋　つまり、伯爵夫人の部屋だ。

つい数年前までは亡き妻、サリアナが使つていたのだが、彼女が亡くなつてからは手入れこそきちんと行き届いてはいるものの人が住む温かさはない。それにサリアナの華美な趣味はエミリアのイメージにはどうも合いそうにもなかつた。

しかし改築の許可を出したまでは良かつたものの、使用人たちはあれこれ煩わし程にマグナスを質問責めにした。

奥様は白と生成色のどちらがお好きでしょう？奥様の新しいドレスは何着お揃えになりますか？奥様の髪の色は？瞳の色は？幼い頃からマグナスを知っている乳母は特に遠慮がなかつたが、マグナスはなんとかその場をやり過ごすことが精一杯であつた。何しろ彼は何一つエミリアの事を知らないのだ。

いや、経験から言えば女というものは美しいものに惹かれる。サリアがそうであつたように、また社交界で出会う女性がそうである

ように。

高価な宝石とドレスの新調に必要な分の金を出せば、天性のセンスで彼女たちはそれらを身につける。

だが マグナスはエミリアのことをゆっくりと思い出した。襟の詰まつた地味な色のドレス。一つの宝石もつけてはいけないが、真珠のように白い肌。きつく結われていたが、金色の髪は美しいと称赞するに値する。

彼女にはダイアモンドよりも、もつと控え目な宝石が似合うだろう。そう思ったマグナスはもう何年も踏み入れていなかつたサリアナの部屋へと足を進めていた。

母が亡くなつた後、母の形見の宝石が詰まつた箱はサリアナが管理していたはずだ。彼女は大きな粒の宝石しか見に付けてなかつたが、確かあの宝石箱には真珠のネックレスとイヤリングがあつた。

おぼろげながら、幼い時に何度か母がそれらをつけているのが記憶に残つてゐる。それをつけるのは特別な日で、決まって母は機嫌が良かつた。

彼が歩いた日、初めて言葉を喋つた日、一人で字を書けたとき。母にとつてそれらすべてが特別だつたのだ。

無意味な回想だ。マグナスは目当ての宝石を取り出すと別の箱に入れ、すぐにポケットにしまつた。彼にとつて過去は思い出ではなく、くだらない人生の一瞬にしか過ぎないのだ。

その直後、執事が扉をノックした為マグナスは気持ちを切り替えることが出来た。ナルソンは静かに客の来訪を告げ、マグナスはそのまま旧知の友人とロンドンへ旅立ち結婚式を一週間前に控えるまでカードゲームと一夜の恋に没頭した。

例えどれ一つとして彼を満足させてくれるものはないと知つていても。

そうして一週間ぶりに領地へ帰つてきたマグナスはすぐにエミリア

と結婚する為にベッドフォードシヤーへと出発した。

出発のほんの数時間前には久しぶりに息子との対面を果たした。金色の髪こそサリアナそっくりなダニエルだが、それ以外のパーティは間違いなくグラントホールの血を引いている。

光を失つたような瞳はまるで自分自身の子供の頃を見ているようであまり気持ちのいいものではない。父を前にも笑顔一つ零さず立っているだけの幼い子供に、マグナスは同じように無表情で「あまり面倒なことは起こすな」と言つただけで父と息子の短い時間は終わった。

ダニエルは一言も喋つてはいなかつた。

マグナスは珍しくからりと晴れた空を見上げ、大きく息を吐いた。エミリアを妻に迎えたことで、少しでもダニエルが落ち着けばいいが。

「 伯爵様？」

不意に声を掛けられ、マグナスは急いで声のした方に視線を走らせた。

見ればエミリアが訝しげな表情でこちらを見ているではないか。ノックもせずに入ってきたのだろうかと不快に思つたが、エミリアの次の言葉でそれは間違いだつたのだと気づいた。

「あの、何度もノックはしたのですがお返事がなかつたものですので…申し訳ございません」  
「いや。どうやらほんやつしていいたようだ」

マグナスの返答に緊張を抜いたエミリアの髪は肩をさらさらと流れ金の糸のようだった。柔らかく光を反射しており、微かに花の香

りがしたような気がする。

その髪に指を絡めて衝動に駆られ、マグナスは慌てて視線を逸らした。

「明日の結婚式のことだが、内輪だけで行つことにした」

マグナスにそう切り出され、ヒミリアは驚いて顔を上げた。この国でも有名な伯爵だ。きっと参列者も多いのだろうと憂鬱に思つていただけ、内輪だけならばまだ耐えられるかもしれない。

明らかにほつとした表情の彼女の目の前に、マグナスは持ってきていた箱を差し出した。

「母の物だ。明日の結婚式に付けるところ。きっと

きっと君に似合つだわ。その言葉は無意識に呑み込んでいた。

「まあ…とても綺麗

初めて見る本物の真珠の美しさに、ヒミリアは溜め息をついた。一生手にすることはないと思っていた宝石の一つだ。

繊細な装飾が施された箱に収まつたネックレスとイヤリングは、淡く光を放ちながら明日の結婚式を心待ちにしてこよう見える。ヒミリアの心は激しく揺れていた。

はたしてこんな中途半端な気持ちで、結婚などしてもいいのかと。覚悟は決めた筈なのに、それもマグナスを見た一瞬で崩れかかっている。

「君が私の息子ことひいて良き母になることを願つている」

だがそんな心の揺らぎも、マグナスの一言でぴたりと止まった。

良き母 やはり伯爵は私のことなどちつとも愛していないんだわ。  
そしてこれからも愛するはずはないと確信している。

それは幸せな結婚を夢見ていた年若いエミリアにとって、あまりに残酷な現実だった。いつか少しでも心を通わせることが出来たのなら、と淡い期待は見事に打ち砕かれたのだ。

「…精一杯努力します。伯爵様」

笑えるような気分ではなかつたが、出来る限り笑顔に見えるようにしてエミリアは応接間を後にした。

静かにドアが閉まるのを見ていたマグナスは、不快感を滲ませながら眉を顰めた。あんな下手くそな造り笑いを見たのは生まれて初めてだ。子供でももう少しまともに出来るだろつ。

マグナスはエミリアの泣きそうな笑顔を思い出した。

それはとても不快で、出来れば一度と見たくはないような悲しい笑顔だった。

教会内の肅々とした雰囲気は高い天井いっぱいに響くパイプオルガンの音で破られた。

雰囲気に圧され知らず知らずのうちに息を詰めていたエミリアは、深く息を吸おうとしたがあまり上手くいかなかつた。

遂にこの日が来てしまつたのだ。

祭壇へと続く深紅の絨毯の先には数段の階段があり、マグナスがエミリアの方をじっと見つめている。両側の席にはマグナスが招待した客と、メリッサやレティシア、それに馴染みの使用人たちの顔があつた。

緊張でブーケを持つ手に力がこもつてしまつたが、招待客は全員祭壇の方を向いていたので誰にもそのことを知られる心配はなかつた。彼らの目にはエミリアは世界で一番幸せな花嫁に映つてゐることだろう。家庭教師をしていた孤児が一夜にして名門の伯爵夫人になる。こんなことは長い英國の歴史を振り返つてもそうそうない。張本人であるエミリアでさえ、こうして花嫁衣装に身を包んだ今でも小説の中へ飛び込んだような気がしてならなかつた。

内輪だけの式だからよかつたものの、マグナスの友人たちを呼んでいたらエミリアに向けられる視線はもつと冷たかつたはずだ。人々が降つて湧いたような口マンスを持って離すのは一時のことで、その後は嫉妬と侮蔑に塗り替えられていくと決まつてゐる。

一步、また一步とマグナスの元へ進める足は鉛のように重たい。花嫁を新郎に引き渡す役目を買って出てくれたミスター・コリングズは、ひげをたくわえた口元を始終嬉しそうに緩ませていた。自分には娘がいなかつたから今回のことはとても嬉しいと笑つていた彼に、エミリアは今は亡き父を思つた。恰幅のいいミスター・コリングズとは違つて父は細身ではあつたが、同じように朗らかに笑う

人だった。

そうして彼の手を取つた時は幸せを感じることが出来たが、いざ教会に入つてみるとその幸せは一瞬で吹き飛んでいった。

マグナスはすっと背を伸ばしてエミリアを待つていた。だがそれは愛しい人の結婚を今か今かと待ちわびている姿ではない。

一刻も早く結婚式を終わらせて、馬車を飛ばしラザフォードへ帰る強い意志を持つた姿だ。

オルガン奏者の演奏は完璧で、エミリアが祭壇に到着したと同時に緩やかに流れていった音楽は僅かな余韻を残してゆっくりと止まった。マグナスは花嫁が自分の目の前に着くと同時に目で前を向くよう指示ただけで、エミリアの手すら取ろうとはしなかった。

悲しくなっている場合ではない。今日は幸せな花嫁を演じきるのよ。薄いベールで仕切られた視界は思つた以上に沢山のことを隠してくれた。

エミリアの顔に過る様々な感情 緊張や悲しみ、それから絶望はベール一枚でないも同然となる。

「汝、マグナス・グランヴェルはエミリア・アンダーソンを妻とし  
……」

牧師のゆつたりとした口調は心地よかつたが、エミリアの緊張はますます高まるばかりだった。隣で夫となる伯爵が誓いの言葉を述べれば、次はエミリアの番だ。

誓います。ただ一言それだけを言えばいい。

だけどそのたつた数文字の単語の羅列に、エミリアはどうしてもなく怯えていた。

「誓います」

マグナスの低く、響く声が誓いの言葉を口にする。

牧師が軽く頷きエミリアの方に慈愛に満ちた顔を向けた。

「汝、エミリア・アンダーソンはマグナス・グラントウェルを夫とし

……」

「誓います」

間を開けずに言ってしまった所為か、牧師の表情が少し歪んだ。エミリアは気まずさにおもわず俯き、自分の失敗について深く反省した。

「この誓いをもって2人を夫婦とします」

氣を取り直すように先ほどよりも幾分張った声で牧師は言い、それに続いてマグナスの手が軽くエミリアの手を持ち手袋を脱がせた。彼の手には、ダイアモンドが輝く指輪があり、これが嵌められて誓いの口付けをすれば2人は神の元に定められた夫婦となる。マグナスが2つの指で指輪を持ち、エミリアの薬指に近づくのを彼女はぽんやりと見つめていた。

嵌めた指輪はとても冷たく、ダイアモンドはずつしりと重かった。やがてマグナスが視界を覆っていたベールをゆっくりと上げ、エミリアは今日初めて夫となる人物をじっくりと見ることができた。いつもよりも丁寧に撫でつけられた黒髪はひと房だけ額に落ちている。グレーの瞳は同じようにじっと、エミリアを見つめていた。

マグナスは妻となる人物の薄茶色の瞳が僅かに揺れるのを見逃さなかつた。涙こそ零れていなかつたものの、少しでも気を緩めれば途端に彼女は泣きだしてしましまうだろうという確信があつた。

これが彼女にとっても幸せな結婚ではないことは十二分に分かつている。だが今更どうしろというのだろうか。

彼が贈つた真珠のネックレスとイヤリングは思つた以上にエミリア

に似合っていたし、純白のドレスはほつそりとした体を包んでいて、正直に言つと眩しいほどであった。

しかし当の花嫁は、本来なら幸せいっぽいの顔をしていてもおかしくない花嫁は、きつく口を結んで何かに耐えるかのように俯いている。

少しぐらいまともな演技は出来ないのか。マグナスは心中で毒づいた。少なくとも彼自身は完璧に花婿を演じているつもりであった。教会に入つてから一度もマグナスの顔を見ないことも大きな不満であつた。いつそのこと華奢な体を引き寄せて大声で自分を見ると叫んでやりたい衝動を押さえながら、嫌味なほどゆつたりとした口調の牧師の後に続く。

自分の番が終わり花嫁も同じよつに誓いの言葉を繰り返し、用意していた指輪を彼女の指に指輪を嵌め、誓いの口付けをする。一度経験したことはしっかりと頭の中に刻みつけられていた。

また同じことを繰り返せばいい。しかしまグナスは前妻との結婚式ではしなかつた行動に出てしまった。

エミリアの、自分より一回りも小さな手を軽く包んだのだ。自分自身の行動に驚きながらも彼は花嫁に触れる程度のキスをした。

死が2人を別つまで。

エミリアは目を閉じて先ほどの誓いの言葉を思い出した。死が訪れるその瞬間まで、私は辛い結婚生活に耐えなくてはいけないのだわ。

一瞬だけ触れた体温はすぐに冷たくなつていた。

\*

「リリから私の邸までは2日はかかるだろ？」

揺れる馬車の中で隣に座った伯爵は幾分か声を張り上げてそう言つた。

結婚式が終わるや否や今日は泊つて明日の朝出発すればいいと云つメリッサの言葉を振り切り、マグナスとヒリコアは4馬立ての立派な馬車へ乗りこんだ。

仲が良かつた使用人やレティシアへの別れの挨拶もそこそこに出てきたエミリアは、後ろの馬車に少ない荷物を詰め込んでマグナスの隣に座り、失礼だとは思いながらも周りに目を走らせていた。

生まれて初めてこんな立派な馬車に乗つたのだが、何時間も座つている所為かお尻は少しづつ痛くなつてくるし、無言の道中は決して快適とは言い難かった。

マグナスはこういった旅には慣れているのか、それともただ単にエミリアと何も話すことがないのか、馬車に乗つてから口を開いたのは今一度だけであった。

「2日も？」

ヒリコアの問いにマグナスは頷く。

「ああ。もう少し走つたら街に着く。そつしたらそこで宿を取るつ

軽く馬車が揺れた。エミリアは天井から垂れさがっている吊革にしつかりと手首を絡ませ、マグナスに頷いた。

馬車の技術が数世紀前と比べて格段に良くなつたことと、英國の道路が世界一舗装されていることからそれ程の揺れは感じなかつたが、なにぶん馬車で移動することが殆どなかつたエミリアは少しの振動にもいちいち敏感にならざるを得なかつた。

ベッドフォードシャーを出たのは夕方近かつた為、外は既に暗く目を凝らしても窓の向こうは果てのない闇であった。月すらも見えない所為かエミリアは不安げに体を震わせる。

結婚式の間は何とか持つた天気だつたが、あと数時間もすれば重く張り巡らされた雲からは雨が無数に落ちてくるだろう。御者もそれが分かっているのか、主人たちに快適な旅をさせるよりは出来る限りスピードを出して宿に着く方を優先したらしい。

エミリアは不安だつた。これから先、一体何が起こるのか全く予想がつかない。

今まで旅と言つたらベッドフォードシャーの屋敷までの短いものであつたし、どこかに泊つて別の土地へ行くといつことがなかつた。宿というものの定義もよく分かつてはいなかつた。

大きさはどれくらいあるのだろう。旅人たちと同じ部屋で眠るのかしら。それとも別々の部屋になつているの？ 食べ物はどんなものができるのだろう。エミリアの疑問は尽きなかつた。

そしてメリッサが出発前に言つた不可解な言葉の意味 確か怖がらずには、全て旦那様に任せなさいと言つていた もエミリアを落ち着かない気持ちにさせたことの一つであつた。

実際のところ、エミリアが夫婦というものについて持つてゐる知識は驚くほど少なかつた。本来教えられるべき母も既におらず、メリッサのくれた言葉だけが彼女がすべきことを示してゐた。

全てを任せればいい。学校に行つているとき、同じクラスの少しま

せた女の子たちがときどきそういう話に花を咲かせていたのは知っていた。エミリアは恥ずかしさが先立つて話には交ざらなかつたが、ネットという子がそんなことを言つていたような氣もする。結局のところ妻は夫の所有物同然なのだから従つていれば間違はないだろ？。

窓ガラスに指を這わせると外気との気温差でそこはしつとりと濡れていって、指の跡には僅かな水滴が流れる。恐る恐る隣へと視線を向ければ、伯爵は先ほどのエミリアと同じように窓の外に広がる暗闇を見ていた。

「なにか私の顔に付いているのか？」

ふいにそう言われ、エミリアは慌てて言葉を探した。伯爵の瞳は未だ自分には向けられていないのに、どうして私が見ていると分かつたのだろう。

「いえ、その、『お息のことを少し伺いたい』と思いまして」

咄嗟に出た言葉ではあつたが、マグナスとの結婚が決まってからエミリアがずっと聞いてみたかったことだ。伯爵の一人息子のことは誰も教えてはくれなかつた。

メイドたちの噂に上るのはいつも伯爵のことばかりだつたし、誰かに聞くことも憚れた。

マグナスが結婚することを決めたのはその息子に母親を持たせたいからだ。自分がその役目を担うのなら、伯爵本人から聞きたいとも思つた。

「息子のこと？」

「ええ。なんでも構いません。教えてください」

Hミリアの方を向いたマグナスは不機嫌そうであったが、じぶしふ  
という感じで口を開いた。

「名はダニエルといい、今年で3つになる。髪の色は君と同じ金髪  
で、瞳は……グレーに近いブルーだ」

瞳のところで一瞬言葉に詰まつた彼であったが、伯爵は息子のこと  
をそう表現した。しかしエミリアが聞きたいのはそんなことでなか  
つた。

外見などは一目見たらすぐに分かる。大切なことは彼が何に興味を  
持つて、何が好きで、どんなことに喜びを感じるのかだ。

マグナスとの結婚はきっと冷めたものになるだろうとエミリアは知  
っていた。愛のない結婚の結末はいつだって寂しくて悲しいものだ。  
しかしえミリアの結婚生活にはダニエルという特別な存在がある。  
子供は大好きだし、男の子と女の子の子の違いこそあれどレティシアと  
過ごしてきた中で子供への接し方はある程度心得ているつもりだっ  
た。

出来るだけ早くダニエルと仲良くし、親子の絆を深めたい。最初は  
ダニエルもエミリアを母として受け入れることに抵抗があるだろう。  
子供というのは環境の変化にとても過敏だからだ。  
だからこそ彼のことをよく知つておきたかった。

しかし、Hミリアの期待とは裏腹に伯爵はそれっきり口を閉じてし  
ました。

「あの、伯爵様？」

「私は君の夫になつた。マグナスと呼びなさい」

「はい。ではマグナス…ダニエルのことについてもつと知りたいの  
です。彼はどんなものが好きなのでしょう」

こちらを向いたマグナスの表情は何とも言えない奇妙なものだった。

マグナスはまじまじとHミリアを見ると吐き捨てるよつて「今私が言つたことが全部だ」と答えた。

「え？」

「だから全部だと言つた。ダニエルが何を好きかなど私の知るところではない。屋敷に着いたら乳母にでも聞くといい」

再びマグナスが窓の外に視線を向け、本格的に会話は終了となつた。自分の息子のことも満足に知らない父親がいることにHミリアは愕然とした。彼は…息子のことを愛していないの？

広い屋敷の中で使用人たちに囲まれ、ぽつんと一人で立ち寂くすダニエルの姿が目に浮かぶようだ。まだ3つなのに、心を許す人物もいなければどんなに心細いであろう。

Hミリアは椅子の背もたれに背中をつけて溜め息をついた。

外は雨がぱりつき始めていた。

08 (前書き)

R15程度の描写がござります。

本格的に雨が降り始めてしまったので、伯爵一行は街に入るとすぐに宿を探した。街は日が暮れたのにも拘わらず旅人や仕事を終えた職人たちで溢れかえっていた為、宿が取れるか不安はあったが幸いなことに今夜の寝床はすぐに見つかった。

慌てて宿から飛び出してきた主人に一番上等な部屋を2つ用意するようになると、マグナスは、エミリアが雨に濡れないように外套で体を覆ってくれていた。お陰でエミリアは髪が少し湿つたぐらいで済んだのだった。

宿は決して新しくはないが、清潔に保たれており、入ってすぐのところにある暖炉のほのかなあたたかさが冷えて切っていた体にはありがたかった。

マグナスがどう思っているかは知らないが、少なくともエミリアは黒ずんだ太い柱や黄ばんだレースのカーテンについてはまったく気にならなかつたし、2階へと続く階段が歩く度に不気味な音を立て軋むのはとてもわくわくした。

「こんな田舎に伯爵様のような立派な方がお見えになるなんて、ほんとにまあ、思ってもみませんでした」

宿屋のおかみさんはそう言って豪快に笑つた。赤毛にそばかすの散った顔はエミリアの女学校時代の友人を思い出させる。彼女もまた、こんな笑い方をする子だった。

テーブルの上には簡素ながらきちんとしたディナーが並んでおり、グラスにはワインが注がれていた。よく煮込まれた子羊のシチューのいい香りが、素直に空腹を促す。

「大したおもてなしは出来ませんけれど、じゅつくじビーフ。あ、

伯爵様、もつとワインをお持ちいたしましたか？

おかみさんの問いにマグナスは軽く右手を振っただけであった。呼ぶまで下がれ、という意味だ。

伯爵の態度にエミリアは眉をひそめたが、おかみさんはちつとも気にしていないう様子でもう一度「じゅっくり」と言って部屋から出て行つた。

途端に室内は静まり返る。時折風に煽られた雨が窓を叩く音だけが、その静寂を破つていた。

おかみさんがいなくなつたことでエミリアは急に落ち着かなくなつてきた。室内は蠟燭の灯りだけが唯一の頼りだが、その炎に照らされたマグナスの顔すらまともに見ることが出来ない。

伯爵はもくもくと食事を続けているし、自分から何か話しかけるのも無作法な気もしてきた。仕方なく口を噤んでこることに決め、エミリアはそつとスープを口に運んだ。

雨足は更に強まつていぐ。一人ではないとは言え、じつじて音のない部屋にいると子供の頃のように怖くなつてくれる。

いつの間にかスプーンを持つ手が止まり、エミリアはじつと窓の外を見た。闇夜に混じつてぼんやりと他の宿の灯りがちらついていた。

「もう食事はいいのか？」

不意に声を掛けられて、おもわず持つていたナイフと食器がぶつかつてしまつた。それほど大きな音ではなかつたものの、エミリアは慌ててナイフとフォークを降ろした。

さつきまであんなにお腹が空いていたと言つた、これ以上は食べる気がしなくなつていた。

エミリアは曖昧に頷きながら田の前のグラスを取つた。初めて飲んだワインは一瞬だけ体に熱を持たせ、ゆっくりと喉を下つていつた。

「美味しい」

「ワインを飲むのは初めてか？」

「ええ、実は」

もう一度グラスに口をつけないと、わきまえよりも口当たりがなめらかなような気がした。

マグナスはじつとエミリアを観察していた。それなりの食事で腹を満たし、赤ワインで喉を潤し、旅のスタートにしては過酷な一日が終わろうとしている。

馬で長旅をする自分とは違つて、殆ど家から出なかつたエミリアには堪えただろう。明日はもう少しゆっくりと道中を行こうとマグナスは心に決めた。

初めて飲むと言つワインを口にしたエミリアの頬はうすらと紅色に染まつていだ。少女の清らかさを残しつつ、今にも花開きそうな蕾を思い出しマグナスはぐつと奥歯を噛んだ。

室内の薄明りに浮かぶよつた白い肌、雨に濡れて髪が張り付いた頃、不安げに窓の外を見る瞳、それら全てがとても とても恵々しかつた。女性に対しては人並み以上の経験と理性を持つていると自負している自分が、一〇も年下の少女に僅かでも欲望を感じていてることが腹立たしかつた。

焦ることはない。マグナスもワインに口をつけながら心の中で呴いた。

マグナスはこの胸の奥を焦がすような欲求が一時的なものだと思つていた。結婚を完全なものにしようと焦る心が急かしているだけで、一度ベッドを共にしてしまえばたちまち情欲の炎は消えるはずだ。焦ることはないのだ。経験のない彼女には夫として優しく導いてやらなくてはならない。せめて初夜ぐらいは。

「エミリア」

まだ半分も残つたワインをそれ以上飲む氣にもなれず、マグナスはグラスをそつと置いた。

中央で赤々と燃える蠅燭の炎は、マグナスの吐息で僅かに揺れる。

「今日は疲れただろう。先に化粧室を使って着替えてきなさい」

初めてとも言えるマグナスからの効いの言葉に、エミリアの胸はかつと熱くなつた。出会つてから今まで、こんなに穏やかな声で話すマグナスは見たことがなかつたからだ。

しかし…先にとは一体どういうことだろうか？マグナスも後からこの部屋の化粧室を使って着替えるのだろうか。確か部屋は2つ用意してあり、伯爵の部屋はとなりの筈だ。

だがなんとなく、確かめるのも変な気がしてエミリアは静かに立ち上がつた。きっと言葉のあやだろつ。

恥ずかしげに頷いて化粧室へと消えていく妻を見送つて、マグナスはとても満足していた。自分の目は正しかつたのだと今更ながらに思わずにはいられなかつた。

マグナスの知る限り、エミリアのように初々しい反応を示した女性は初めてであつた。尤も、彼が相手にする女性は大抵人妻か未亡人だつたのだが。

貴族社会に生きていれば自然と性についての知識は豊富になる。ご婦人がたは男たちのいないところで堂々とそういう話をすることがあるし、中には幼い子供がいても平氣で家に愛人を連れ込む親もいるだらう。

マグナスの両親もそういう人種だつた。マグナスは何度両親の若い浮氣相手を目についたか分からぬ。

そんな中で暮していれば、演技ではない初心な反応を見るることは稀だ。彼女は演技の才能がないと知つてゐるから、あれは間違ひなく

自然な反応だと確信できた。

エミリアがこの先もその初心さを失わなければいい。浮気などされでは後々面倒なことになりかねない。

そうやつて破滅の道を歩んで行つた貴族を、マグナスは何人も知つてゐる。何度も目にしてきた。彼らと同じ道を歩む気は更々なかつた。

「伯爵様？」

化粧室のドアが開いて、エミリアが出てきた。シンプルな白いナイトドレスはよく見るとレースの刺繡が施されており、胸元のリボンを引いた時のこと想像し、マグナスは口の中が渴いた。

このまま着替えるのもなんだかもかしく感じてくる。いや、それはあまりにも不作法ではないのか。

マグナスは戸惑つたように自分を見上げる妻を見た。髪を結つていない彼女は薄暗い明りも手伝つて、いつそう華奢で儂げに見えた。彼女はこれから起ることを何一つ知らないのだと思うと、このままでベッドに誘うのはあまりに酷な気がした。だが、彼女はもう私の妻だ。妻は夫の所有物となる。

マグナスに見つめられていことに気付いたエミリアは所在なさげに身じろぎした。グレーの瞳に服の中まで見透かされているような気がして、とても恥ずかしかったのだ。

視線を逸らしても彼が自分をじっくりと観察していることは痛いほどに分かつた。

「エミリア」

伯爵の声はひどく掠れていたが、低音は少し離れたエミリアのところにも届いた。彼が自分を呼んでいるのだと気付いたエミリアは、ゆっくりと伯爵の元へ足を進める。

化粧室を出てマグナスがさつきと寸分も変わらず同じ位置にいることに驚いたが、すぐ傍まで来たエミリアの腰をおもむろに引き寄せたときには小さく悲鳴を上げてしまった。

「は、伯爵様！？」

「マグナスだ」

椅子に座つたままだと黙つて、マグナスの視線は立つたままのエミリアとそう変わらない。グレーの瞳は冷たい印象しか受けなかつたが、ゆらゆらと揺れる蠅燭の炎が映り、まるで氷の中で燃える炎のようだった。

マグナスの手がエミリアの髪の中に入り、指先が耳の形をなぞる。冷えた指にエミリアの肩が軽く跳ねた。

「嫌か？」

そう聞かれた時にはマグナスの指は唇に触れていた。吐息が肌に触れるほど近い位置にいることに気が付くと、エミリアは固く目を閉じる。

マグナスは答えを待たなかつた。次の瞬間にはゆっくじと唇が重なり、先ほど飲んだまろやかなワインの味がエミリアから考えることを奪つていつた。

誓いの口付けとは全く違う。これが夫婦のキスなんだろうか。僅かに唇が離れた時、ぽんやりとする思考の片隅でそんなことを思つた。軽く額にキスをされ、エミリアは恥ずかしさに顔を赤らめた。

マグナスはそんな妻を軽々と抱き上げるとベッドへと運んで行つた。安物の狭いそれは2人分の体重で軋む音がした。

真っ白なシーツの上に金の髪が散らばり、ナイトドレスはエミリアの呼吸に合わせて胸元のリボンが上下した。先ほどの口付けで彼女の息は乱れていて、それがどうしようもなくマグナスの理性を搔き

乱した。

もう一度濡れた唇にキスをし、胸元のリボンを解こうとマグナスは手を伸ばした。

「マ、マグナス？」

繰り返されるキスに軽い眩暈を覚えていたエミリアはリボンを解こうとするマグナスを見て、漸く事態が掴めてきた。信じたくないが彼は私の服を脱がそうとしている。

エミリアの上ずつた声にもマグナスは止まらなかつた。勢いよくリボンを解き、白い首筋に噛みつくようにキスをした。

「やつ…止めてください…」

初めての感覚にエミリアは恐怖を感じていた。気付いた時には押しつぶされそうなほど近くにあつたマグナスの逞しい胸板を両手で押し返していた。

「なんだ」

不機嫌そうに問うマグナスはそれでもまだ、エミリアから体を離さうとはしなかつた。彼は自分の下敷きになつてゐる小柄な妻が、今どんな気持ちでいるかも分かっていない。どうして止めたんだと言わんばかりだ。

「私たちは夫婦になつた。君が私を拒む理由などないはずだ」

マグナスの言葉は至極当然のことだつた。しかし、不安に駆られたエミリアにはとても冷静に受け止められるようなものではなかつた。

知識としては珍しいものの、メリッサとアネットが言つてしたこと  
がこのことなのだということは分かつた。

怖がらずに寛てを旦那様に任せればいいですって?何をどう任せ  
せろというのだろう。マグナスの瞳には初めての妻を労わる様子も、  
優しさの欠片もないというのに。

そもそもどうだらう。マグナスは、ラザフォード伯爵は私と結婚して  
も愛や恋を求めるつもりはないと言つた。そんな人にどうして全て  
を任せることができよう。

ただ人形のようじつとして、その時が過ぎるのを待つことはエミ  
リアには出来そうにもなかつた。

「嫌です」

小さく、しかしあつきつとエミリアは拒絕の言葉を口にした。

「嫌だと?なぜだ」

「それは…」

「はつ、いいか、マダム。私たちは結婚した。これは夫婦として當  
たり前のことだというのはお分かりいただけないだらうか

マグナスの声には嘲りが含まれていた。彼はまさか自分の妻に行方  
を拒否されるとは思つていなかつたのだろう。

怒りなのか、悲しみなのか果たしてその両方なのか、エミリアの目  
には次々と涙が溢れていた。愛のない結婚なのは分かつているが、  
愛のない行為はしたくなかった。

マグナスは暫く鳴き続けるエミリアを呆然と見ていた。半分肌蹠た  
胸元は隠そつとはせず、エミリアは両手で顔を覆つっていた。まるで  
全身で彼を拒否しているかのように。

漸く冷静になつた頭で、改めて自分がしたことを目の当たりにした  
マグナスはひどく後悔した。だが同時になぜ拒否されなくてはいけ

ないのかという怒りも覚え、そんな自身を激しく罵った。

鳴き続ける妻の髪を一撫でし、マグナスはベッドから離れた。そうしないともう一度彼女を組み敷いてしまいそうだった。今度は理性が本能を押し留めるかどうかも分からぬ。

例えこのまま彼女を自分のものにしてしまっても咎める者は誰もないだろう。寧ろ夫を拒んだ妻の方が奇妙な目で見られる。だがなぜだかは、マグナスにも分からなかつたが、それはしつくなかった。半ば無理矢理な結婚ではあつたが、彼女の気持ちを無視してまで体を手に入れたいとは思わなかつた。

マグナスは椅子に掛けてあつた自分の上着を取ると、なにも言わず静かに部屋から出て行つた。  
後にはエミリアのすすり泣く声だけが頬りなさげに響くだけであつた。

「あれが私の屋敷だ」

マグナスの言葉と共に今まで白樺の並木道が急に途切れ、屋敷が姿を現した。一年前も同じことを思つたが、やはり大きな屋敷だつた。屋敷の前には道を挟んで湖があり、悠々とそびえるグランヴェル邸が湖面に映り風とともに揺れていた。

数えきれないほどの窓、庭師の手入れが行きとどいた庭、一年前はじっくりと見る余裕もなかつたのだが改めてラザフォード伯爵の財力には驚かずには居られなかつた。

あの宿の一件から、マグナスの口数は極端に減つっていた。元々多弁な方ではないが、無表情に押し黙つてゐる伯爵と馬車で旅を続けるのはとても気まずかつた。

勢いに任せて夫婦の契りを拒否してしまつたエミリアは一通り泣き終わつた後ひどく後悔した。本来ならあつてはならないことだ。

一夜明けて朝食を共にした時にはいつ離婚を言い渡されるか冷や冷やしていたが、驚いたことにマグナスは夜のことについては何も触れなかつた。

伯爵はそれ程氣にしていないのだろうかと思つたエミリアだつたが、すぐにそれは間違いだと氣付く。前よりもずっと、紳士的ではあつたが余所余所しい態度を取り続け、2人きりになると必ず無口になつてしまつのだ。

食事の時も自分の分を食べ終えるとすぐにマグナスは宛てられた部屋へと戻つていぐ。エミリアもそんなマグナスに話しかける勇氣は持てず、結果としてひたすら窓の外を見ている旅になつてしまつた。本当なら聞きたいことはたくさんあつたのに。エミリアは泣きたくなるのを必死に堪えるように下唇を強く噛んだ。

貴族の暮らしについては、知識としてある程度しか持っていない。果たしてエミリアは社交界に出なくてはいけないのか、それとも邸でずっとダニエルと過ごしていればいいのか分からない。エミリアとしては後者の方がありがたかつたが。

「素敵なお屋敷ですね」

マグナスは領き、「お褒めに『り光榮だ。マダム』と答えた。しかし、やはりその顔は無表情のままであった。  
もう一度屋敷に視線を向けたエミリアはマグナスに気付かれないよう小さく溜め息を吐いた。

実際のところ、確かにグランヴェル邸は立派だったがエミリアの理想とする”家”ではなかった。そこにあるのは冷たい石造りの箱としてそこに在るだけのようにも思えた。

例えはエミリアの実家のように、外へ出ていても必ず帰つてきたいとは思えない。ただ漠然とした寂しさが、屋敷から温もりを失くしていった。

馬車が屋敷の前で止まる、まるで見計らっていたかのように屋敷から何人もの使用人たちが出てきた。一列に並んだ彼らは主人と奥方が馬車から出るまで人形のように動かないのには驚いた。

「彼の名前はネルソン。この邸の執事だ」

マグナスに紹介された男は礼儀正しくお辞儀をした。その後ろの家政婦たちも同じように彼に続く。

「お待ちしておりました、奥様。長旅でお疲れでございましょう。こちらにお茶を用意しております」

奥様。ネルソンの言葉にエミリアはおもわず身を固くした。

まだ伯爵夫人と呼ばれるようなことは何一つしていない。エミリアには教養こそあれど、伯爵家をバックアップするような家名もマグナスを受け入れる準備も出来ていないのに。

エミリアは目の前にそびえ立つグラントウェル邸を見上げた。今日から我が家になる屋敷を。

そう、足を竦ませている場合ではない。今日からエミリアが女主人としてこの家の采配を取らなくてはいけないのだから。

マグナスは廻に用があると言つたので、エミリアは先に屋敷の中にに入ることとなつた。

ネルソンの後に続き、屋敷に入ったエミリアはその広さと豪華さに息を飲まずには居られなかつた。

玄関から真っ直ぐ続く階段への廊下は歩く度にコツコツと音が鳴り、2人分の足音を天井へと響かせる。その天井には大きな絵が描かれており、いつか本で見た有名な画家の天使と神の絵にそっくりであった。

廊下の端にはずらりと彫刻や陶器が並び、細長い窓から零れる光が優しくそれらを照らしていた。

エミリアは少々気後れしながら、それらを見ていた。彼女の目に入る物全てが近寄りがたかつた。

「いらっしゃります」

ネルソンに案内されたのは深紅の壁紙が印象的な部屋だつた。金縁の額の大きな絵が飾られており、その下の暖炉からは赤々とした炎が燃えていた。

部屋は適度に温かく、エミリアは来ていた上着を脱いでネルソンに渡した。ぐるりと部屋を見渡すと、こまごまと色々なものが飾られていることが分かつた。

あの大きな絵の近くには2、3枚小さな絵があつたし、大理石の暖炉の上には真鍮製の時計が正確な時を刻んでいた。

壁と同じ色のソファの背もたれはビロードの生地を使っており、室内をより一層洗練されたものにしている。濃い茶色のテーブルも、照明に照らされて鈍い光を放っていた。

周りを見渡せば見渡すほど、自分が全く別の世界に来てしまっているようにしか思えなかつた。エミリアは出された紅茶にもろくに手をつけることが出来なかつた。

暫くしてネルソンが一人の女性を連れて部屋へ入ってきた。メイド頭だったアンナよりも幾分年上のよう見える彼女は、にこにこと愛想よく笑いながらエミリアに深く礼をした。

「こちらで長年勤めております、ミセス・タリスでござります」ネルソンが代わりに女性の紹介をした。

「はじめまして、奥様。旦那様より屋敷をご案内するように仰せつかっております」

柔らかい声だつた。ミセス・タリスの言葉を聞いてエミリアはグラントヴェル邸に来て初めて、肩の力を抜くことが出来た。

伯爵家の人は使用人に至るまで何もかもが完璧すぎる。チエザース・ハウスにいた時のような陽気な気配はなく、皆一様に口を結んで仕事に勤しんでいた。

それが一流の使用人なのだと言われればそれまでだが、その重苦しい空気には慣れそうはない。エミリアが元家庭教師だということは、使用人みんなが知っているだろう。皆が皆、エミリアがラザフオード伯爵夫人になつたことを喜んでくれているとは限らない。だがミセス・タリスの微笑みは母親のような温かさを持つていて、そんなエミリアの不安を吹き飛ばしてくれるようだつた。

Hミニアもおもわず彼女に微笑み返した。

「ありがとう、ミセス・タリス」

「まあ、こんな素敵な奥様にお仕え出来て私も嬉しうりであります」

満面の笑みでそう言つたミセス・タリスを見て、この女性なら屋敷での不安を和らげてくれるだろうとHミニアは確信した。彼女ならきっと、エミリアの力になってくれる。

会つたばかりの家政婦だが、Hミニアは既に心からの信頼を寄せていた。

「こちらが西の間でござりますして、シノワズリ中国趣味調の部屋になつております。メリッサ様がお作りになつたものですが、密室として使用することも稀でござります」

初めに案内された部屋はとても奇妙な感じがした。テーブルや椅子など基本的な家具は英國式なのだが、そこに描かれているのは全くの別世界であった。

その長い服に、後ろだけを残した髪、油絵とはまた違つた画法は確かにメリッサが集めていた茶器で見たことがある。落ち着いた色が多いこの邸では珍しい色の組み合わせに、Hミニアはくすくすと笑つた。

「あちらが彫刻の間、その反対側は絵画の間でございます。奥は黄色の間、茶色の間と続きます。茶色の間には歴代の伯爵家の肖像画が飾つてあります」

「随分沢山あつて…全ての部屋を覚えるのに何年もかかりそうだわ」

エミリアの言葉にミセス・タリスは大きく頷いて同調した。

彫刻の間、絵画の間は細長く広い部屋が希少価値の高い芸術品で埋まっていた。歴代の伯爵が時間をかけて集めたものなのだろう、その美しさにはエミリアも暫く言葉を失った。

伯爵家には趣味を超えた芸術品が数多くある。どれもこれも保存状態は極めて良く、作られた当時のような美しさを保っていた。

マグナスは芸術に精通している方なのかしら。どちらかと言つたら乗馬などの方が得意そうだが。しかし、貴族の嗜みとしてある程度は学んでいるのだろうと、エミリアは納得した。

黄色の間は、その名の通り視界が黄色で染まってしまうような部屋だった。壁から椅子の背もたれにいたるまで黄色で、天井は辛うじて薄い緑と白が使われていた。

しかしそく見るとそれぞれに纖細な模様が描かれており、その他の家具は落ち着いた白で統一されていた。

歴代の伯爵家の肖像画が並ぶという茶色の間は、残念ながら好きになれそうにはなかった。金の額に縁取られた肖像画は皆一様にじつとこちらを見ており、その威圧感といったら、もう息が詰まってしまいそうだった。

その為、エミリアはさつと目を走らせた程度ですぐに部屋を後にしてしまったのだった。

ミセス・タリスに連れられて緩くカーブした階段を上ると、すらりといいくつもの部屋が連なっていた。マグナスの部屋と、書斎の場所を軽く説明したミセス・タリスは、ある部屋の前で止まるヒミリアにドアを開けるように言った。

訝しげに思いながらもドアを開けたエミリアは、日に飛び込んできた光景におもわず息を飲んだ。

その部屋は白と薄いグリーンで統一された落ち着いた部屋だった。今まで見てきた部屋は豪華だったが温かみが感じられなかつたのだが、この部屋だけは違つていた。

大きな窓にかかるレースのカーテン、壁に掛けられた金縁の鏡、清潔そうなベッド。エミリアは一目でこの部屋が好きになつた。

「お気に召しましたか？」

まるで悪戯が成功した子供のよつな顔をしてミセス・タリスはエミリアに聞いた。

「とても素敵なお部屋だわ」

「奥様のお部屋で」わざとありますよ。レディ・グランヴェル

「私の？」

「ええ。奥様の為に旦那様が部屋を改装なさいました」

エミリアは更に驚いた。

マグナスの部屋のすぐ近くのこの部屋は、歴代のレディ・グランヴェルが使用した部屋に間違いないのだろう。マグナスの母、そして亡くなつた前妻の部屋でもあつた筈だ。

その2人の思い出が詰まつている部屋をエミリアの為に改装してしまつたのだろうか。なんとなく申し訳なさで胸がいっぱいになる。エミリアはもう一度部屋を見渡した。明るい部屋、趣味のいい家具はエミリアの好みにぴつたりだ。

「素敵なお部屋だわ…本当に」

後でマグナスにお礼を言おう。そして、一昨日の無礼について謝ろう。エミリアはそう心に決めた。

\*

まだ自室を見た興奮は冷めなかつたが、まだまだ知らなくてはいけないことは沢山ある。名残惜しげに部屋を後にしたエミリアは、ふと思つたことを口にした。

「あちらのお部屋はどなたの？」

2つ向かい側の部屋を指すと、ミセス・タリスは「ダニエル様のお部屋でござります」と答えた。

「ではその隣は？」

一瞬、ミセス・タリスは言葉に詰まつた。

「あれは――」

「君には関係のない部屋だ」

ミセス・タリスの言葉を覆うように冷たい声が響いた。そこには一度階段を上つてきたばかりのマグナスがいた。

彼は既に着替えたのか、さつきとは違う恰好をしていた。

「それより自分の部屋は気に入つたか？」

「え、ええ…本当に素晴らしいお部屋でした。ありがとうございます」

「よひしい。図書館に行く前に庭を案内してもらひなさい。きっと君も気にこるだろ？」

それだけ言つとマグナスはさつと書斎へと入つていった。

暫く呆然としていたミセス・タリスとエミリアだったが、ドアが閉まる音で現実へと引き戻された。慌てて庭を案内しようとするミセス・タリスの後に続いて、肝心なことをエミリアは失念していた。

あの部屋が一体誰のものなのか、そしてどうして伯爵はエミリアにそれを隠そうとするのか。

だが伯爵家の庭の素晴らしい田を奪われていたエミリアにはそんなことを考えている余裕はなかつた。きっと何か良くない思い出でもあるのだろうと、軽く考えていた。

その部屋の秘密と、マグナスがその胸に抱えている秘密が繋がつていることを知らずに

マグナスは肘掛け椅子に体重を掛けると、天井を仰いだ。先ほどの態度は些か不自然すぎやしなかったかと。

適当にはぐらかせばよかつたのに、逆にエミリアに不信感を持たせたのではなかつたかと思うと気が気ではなかつた。

嘘や秘密の類は隠そようとすればするほど綻びが出るものだ。適度に本音を晒した方が却つて上手く隠れる。

しかしそうなるとマグナス自身、ここ数年目を逸らし続けてきたものと対面せざるを得ない。そうなるには今しばらく時間がかかりそつた。

目を閉じれば簡単に過去へと戻ることが出来る。

マグナスの子供時代は決して楽しいものでも愉快なものでもなかつたが、全てを否定しなくてはならない程悲惨でもなかつた。

ただ、自分は愛されるべき存在ではなかつただけだ。笑うのは苦手だつたし、大人たちの間で育つたマグナスには子供らしい愛嬌はなかつた。

そんな子供を誰が好き好んで愛してくれるといつのだつ。大人になつた今ならいつ言える。私ならお断りだと。

苦々しげに溜め息を吐き、マグナスは溜まつた手紙を一つ一つ開けようとなイフを取つた。然るべき伯爵夫人として、エミリアにはなるべく早く社交界に出てもらおうと思つていた。

幸か不幸か、目の前には貴族からの招待状が山ほどある。その中からそれほど敷居が高いものではないものを選ぶつもりであった。何しろ社交界というはある意味悪の巣窟のようなところだからだ。女は真偽が不明の噂話を好み、優劣をつけるのが大好きだ。自分より美しいドレスを身につけている者、爵位が高い者には絶えず媚を売るが、劣つていると判断した人間には驚くほど冷たい。

長年貴族として生活してきたマグナスは上手く立ちまわることが出来るがエミリアはそうではないだろう。

ふと、彼女が貴婦人たちに囲まれて怯えた表情をするのが目に浮かび、おもわず持っていたナイフに力が入ってしまいマグナスの指を僅かばかり傷つけた。

エミリアは間違いなく社交界で注目の的となっているだろう。自惚れている訳ではないが、マグナスは自分が他人の目からどのように映るかをよく知っていた。その奥方で、それも元家庭教師となれば必然的に人々の口上に上るわけだ。決して、いい噂ではないことだけは確かだが。

余計な波風を立てられて、面倒になるのはなんとしてでも避けたかった。

ずっとマグナスが傍についてやることも叶わない為、慎重に招待状を選ばなくてはいけなかつた。新しいドレスを作る必要もあるだろう、彼女が持つていた野暮つたいものでは駄目だ。優雅で最新のドレスを作らなくては。

マグナスは一通の招待状を手に取つた。招待主は古くからの知り合いで、父の友人でもあつた侯爵だ。

夫婦共に穏やかな性格ではあるが、人を見る目は確かだ。この2人に認められたのなら、社交界で敵は作らないだろうとも言われている。

これはまたとない好機だ。

マグナスは早速ネルソンを呼ぶと、この招待を受けることを告げた。

\*

目の前に広がる光景に、エミリアはただただ言葉を失くしていた。

屋敷から庭に続く階段を数段降りると、開けた場所があり、中央の噴水を中心に色とりどりの花が美しさを競っている。

更に下に降りると綺麗に刈られた小ぶりの木を囲うように何十もの小さな花壇があった。ところどころに彫刻もあり、その周囲にも小ぶりな花が咲いていて、よりいつそう彫刻の精巧さを際立たせていた。伯爵家の庭はとても有名だったが、これほどまでとは思わなかつた。

深く息を吸うと、ひんやりとした空気が肺いっぱいに入りとても気持ちがいい。聞こえるものと言えば森に住む鳥の声、噴水から流れる水の音だけだ。

少し離れた場所には東屋があり、その向こうにはひつそりと木の影に隠れるようにして小さな館があった。

エミリアはチエザースハウスにいた頃、庭に同じようなものがあつたのを思い出した。屋敷とまではいかないものの人が住むには充分な大きさを持っていたため、庭を観賞する為だけに作られたものだと聞いた時にはとても残念に思つた。

屋敷のように豪華ではないが木とレンガを使った素朴で温かみがある館に、エミリアはとても興味をそそられた。隣にいたミセス・タリスもそれに気付いたのかさりげなく館の方へとエミリアを誘導してくれた。

その一画だけは人工的に作られた庭ではなく、まるで森の中にいるかのように自然に草木が生えていた。

館の周りを彩る花々もエミリアがよく知る植物ばかりだ。高さがバラバラの草木に、時々小さな鳥が止まり辺りをきょろきょろと見回す。エミリアたちの足音が聞こえるとすぐに羽をばたかせて逃げてしまつたが、すぐにまた別の鳥が舞い降りては可愛らしくちば

しで餌を探していた。

館に近づけば近づくほど、エミリアはその魅力に惹かれていた。外壁を伝うようにして薦が覆っていたが、それですらその館を飾る一つの風景のようにも思えた。

「中には入れないの？」

エミリアがそう聞くと、ミセス・タリスは残念そうに首を振った。

「申し訳ございません。館の鍵は旦那様がお持ちで、掃除以外の理由で出入りすることはできません」

「やうなの…」

何か隠しているような気もしたがそれ以上を聞くことは憚れた。使用者には主人の秘密を広めたがる者と、なんとしてでも守ろうとするものがいる。経験から言って、ミセス・タリスは後者だ。エミリアも決して噂好きというわけでもなかつたし、他人の秘密を一旦暴こうなどとは思わない。エミリアはそれつきり口を噤んだ。それにしてもやはり素敵な館だ。館の中を見られないのは残念だが、せめて窓から少しでも中を覗ければしないかと近づいたその時だつた。近くの茂みがガサガサと揺れたかと思うと、金色の髪をした子供がちょこんと顔を出したのだ。

「まあ！ダニエル様！」

ミセス・タリスの悲鳴のような声で、この子がマグナスの息子だということが分かつた。

金色の巻き毛に、グレーに近い薄い青の瞳。ふつくらとした子供らしい頬は走っていたのか紅色に染まっていた。だが、ダニエルと目

があつた瞬間、エミリアは言葉を失わずに居られなかつた。

まるで本物のガラス玉のように、その目には何の感情も映つてはいなかつたからだ。こんな目をする子供をエミリアは初めて見た。そして同時にとても悲しくなつた。

レティシアのようにきらきらした輝きも、始めて会うエミリアに対する興味も、戸惑いも。目の前にいるから見ているだけ、彼女はそんな印象を受けた。

「今はお部屋にいる時間でござこましょ。田那様に見つかつたら叱られますよ」

ミセス・タリスの言葉にダニエルは俯いたままで何も言わなかつた。ただ、彼が洋服の裾をぎゅと握りしめたことで何かを耐えている事だけは分かつた。

「ダニエル様、こちらは新しくレディ・グランヴェルになられたエミリア様でござります。ダニエル様の新しいお母様になられました」

ミセス・タリスがエミリアを紹介し、ダニエルに挨拶をと言つと、ダニエルは礼儀正しく膝を折つてエミリアに挨拶をした。

子供とは思えない完璧な挨拶の仕方に、エミリアは胸が痛くなつた。咄嗟に抱きしめようと手を伸ばしたが、ダニエルが身を固くしたので慌てて手を引いた。

突然知らない大人から手を伸ばされれば、誰だつて怯える筈だ。そう思い、エミリアはダニエルと目線を合わせるように屈んだ。ドレスの裾が汚れてしまつとミセス・タリスは慌てたがエミリアは気にななかつた。

ダニエルの瞳を覗きこむと、父親よりも色素の薄い目にしつかりとエミリアが映つた。

「ダニエル」

エミリアがダニエルの名を呼ばうとした時、茂みから何かが飛び出してきた。どうやら子犬のコリーで、元気に吠えては一心不乱に小さな尻尾を振り、嬉しそうにダニエルの周りをぐるぐると回っている。

人見知りはしない犬で、見知らぬエミリアにも近寄つてドレスに黒い足跡を残した。

「ダニエル様……」

ダニエルの肩が僅かに跳ねる。しつかりと子犬を腕に抱き、不安そうな目でミセス・タリスを見た。

ミセス・タリスは眉尻を下げてダニエルの腕の中から抜けだそうともがいでいる子犬の頭を撫でた。

「子犬は牧師様にお譲りすると約束したではありますんか」

ダニエルは子犬を抱えたまま首を振った。「嫌だ」小さいが、しつかりとした声でそう言つ。

「いいで飼つてはいけないの?」

事の成り行きを見守つていたエミリアだつたが、しつかりと子犬を抱いているダニエルを可哀想に思いミセス・タリスに問う。

「元々は屋敷で飼つていたものだつたのですが、旦那様のお召しものを汚してしまつて」

「まあ」

「旦那様は撃ち殺してしまえと仰つたのですが、あまりにも不憫だ

つたので、こつそり牧師様に預かつてもらおうと思つていたのです「

何も知らない子犬だけが、ダニエルの腕の中でくうんと鳴き、尻尾を振つていた。

仕える家の為にならない動物は時として殺されてしまうことをエミリアは知つてはいたが、実際にそういう場面に出くわしたことはなかつた。子供はそうやって分別を覚え、逞しく育つていくのだとメリッサは言つていたがどうしてもその考えに贊同は出来なかつた。ダニエルはとても子犬を可愛がつてゐるように見えるし、そもそも何も知らない子犬には何の罪も無いのだ。ただほんの少し服が汚れただぐらいで殺してしまえだなんて、あんまりだ。

エミリアは子犬の頭を撫でた。子犬は嬉しそうにエミリアの掌を舐める。

「この子犬、私が貰つても構わないかしら」

弾かれたようにダニエルとミセス・タリスがエミリアを見た。

\*

恐ろしく長いテーブルの上に次々と豪華な食事が並べられていく。

ナイフやフォークは顔が映るほどぴかぴかに磨かれ、食器一つをとっても素晴らしいものであった。

黙々と昼食の給仕をする使用人たちに、一々「ありがとう」と言つのに疲れたエミリアは大人しく食事をすることに専念した。どうやら使用人に感謝の言葉は不要らしい。エミリアが笑顔でそう告げる度に驚いたような奇妙な顔をされて初めて気づいた。

チエーザースハウスでは当たり前だったことが、ここでは逆に不躾になるらしい。斜め前に座ったマグナスの視線を受けて、エミリアは恥ずかしくて死んでしまいそうだった。

「屋敷の中は全て見たのか？」

久しぶりにマグナスの声を聞いたような気がして、エミリアの心臓は軽く跳ねた。マグナスの声は低く、耳から心臓まで響く。

「ええ。とても広くて迷つてしまいそうです」

「そつならなにようにこれから毎日、屋敷をあるく練習をした方がいいな」

マグナスの冗談にもエミリアはちゃんと笑えた気がしなかつた。向かい側にはダニエルが座っている。彼もまた一言も喋らず食事を続けていた。

父息子の対面は驚くほど呆気なかつた。マグナスは冷めた目でダニエルを一瞥しただけで、他には何も言わなかつた。

エミリアとダニエルが一緒に食堂に入ったことにさえも興味を示さず、無言で席に着いた後はネルソンに一言二言伝言を告げただけであつた。

こんな冷たい親子の再会があつていいわけがない。エミリアは心中で憤慨した。しかし、ここで余計なことを口走つてマグナスの機嫌を損ねてしまう訳にはいかない。彼女には大事な使命があるので

から。

エミリアは静かに食器を置くと、マグナスの方をちらりと見た。別段機嫌がよさそうにも見えないが、おそらくこれが彼のいつも通りの顔なのだろう。

「あの…はぐ、いえ、マグナス」

おずおずと切り出した言葉はひどく不格好に聞こえた。声も掠れて、小さかつた為マグナスには聞こえなかつたかも知れない。

「なにかな？ 奥様」

奥様、という響きにエミリアの背中がぞくりとした。マグナスの瞳は何故か嬉しそうに輝いている。

「お願いがあるのですが」

「お願い？ 何か欲しいものがあるのか」

「ええ」

言い辛そうに切り出したエミリアを見て、マグナスの眉は僅かに上がった。

欲しいもの！ 苦々しげに心の中で繰り返す。結局エミリアもマグナスの知る婦人たちと何一つ変わらない。結婚した途端何かを強請る。だがダニエルの母となつてくれるのなら、それくらいの代償は必要だとも思っていた。現にエミリアとダニエルが一緒に食堂に現れた時には表情には出せなかつたものの、とても驚いたのだ。

マグナスは出来るだけ優しい顔を作つてエミリアを見た。彼女の目は左右に忙しく泳ぎ、とても緊張しているようだ。

「新しいドレスか？それとも宝石？何でも言いなさい  
「何でもいいのですか？」

「ああ」

エミリアの顔が一気に嬉しそうに綻ぶ。「本当ですね？」とマグナスに念を押すことも忘れなかつた。  
まさかどんでもなく高価なもの(require)を要求してくるのではあるまいな、  
とマグナスが訝しんだのも束の間でエミリアは弾んだ声でこう言った。

「犬が欲しいんです」

これには流石のマグナスも絶句せずには居られなかつた。

「犬？」

「ええ。もう名前も決めてあるんです」

「エミリア、一体 」

状況についていけないまま、マグナスの声は元気な鳴き声によつて  
搔き消された。

焦つたような表情の使用人に追いかけられ入つてきたのは、うつす  
らと見覚えのあるコリーだつた。そう、マグナスの新品のズボンを  
汚した忌々しい子犬だ。

「これはダニエルの犬だつた。処分するよつて言つてあつた筈だが  
「ええ。ですから、私がもらいました」

マグナスの厳しい声にもエミリアは動じない。それどころか駆け寄  
つてきた子犬を抱き上げると飄々とマグナスに楯突いた。

「ですが私、犬を飼うのが初めてなので…ダニエルに色々任せたいと思ってるんです」

「何ということだ！私は許さないぞ」

「伯爵様」

マグナスは怒りに任せて声を荒げた。近くに座っていたダニエルは怯えたように体を強張らせたが、構つている余裕はない。エミリアはしつかりとマグナスを見ていた。先ほどまでのどこかおどおどした様子はなく、凛と背筋を伸ばしてマグナスの怒りを正面から受け止めていた。

「先ほど伯爵様は仰いました。何でも欲しいものを言つていいと約束を違えるのですか？」

今度はマグナスが言葉を失う番だつた。そして軽々しく何でも言えと言つた数分前の己を全力で殴つてやりたい気持ちになつた。

ふと隣を見るといつも俯いてまともに父親を見ようともしない息子が、心配そうに自分を見ていることに気付いた。その目には期待と怯えが見え隠れしている。

その目には見覚えがあつた 幼いころの自分だ。マグナスはたつた一度だけ父親にこういう目を向けたことがあつた。そのときもやはり、愛犬を撃ち殺されそうになり幼い彼は必死に父親に懇うた。

「どうか、殺さないでほしいと。

その願いは遂に聞き届けられなかつたが。

胸に苦いものが込み上げてきたマグナスはさつとダニエルから視線を逸らした。

「好きにするがいい。ただし

「ええ、しつかり躰けることをお約束いたします」

エミコアのこれ以上ないほどの笑顔に、マグナスは心の中で再び毒づいた。

こんなことなら、新しい屋敷を強請られた方がよっぽじました。

すやすやと安らかな寝息を立てるダニエルの淡い金色の柔らかい髪を撫でながら、エミリアは長かつた一日を終えることに安堵した。レックスと名づけられた子犬はエミリアの足元で体を丸めて眠つている。

マグナスに子犬を飼うことを許されたダニエルは大きな喜びを示すことはなかつたが、元気に飛び跳ねる子犬を追う目は幾分きらきらと輝いているようにも思えた。まだ子供らしいところにはほど遠いが、少なくとも感情を表に出すことは出来た。一寸にしてはなかなかの出来ではないかとエミリアは一人ごちた。

まだエミリアのことを母と呼ぶ必要はない。ただほんの少しでもいいから心を開いて欲しい。そう思い、ダニエルが眠るまで傍にいることを決めた。初めは緊張気味にエミリアを見上げていたダニエルだつたが、あやすようにゆっくりと胸を叩いてくるうちに疲れていたのかぐっすりと眠ってしまった。

ほのかな明かりに照らされた室内はレティシアのものよりもほんの少し大きく、そして息苦しかつた。

部屋の所為だけではないのかもしれない。エミリアは重い溜め息をついた。まったく貴族というものは何をするにでもドレスを変えなくてはいけないのだ。

ただ単に夕飯をとるだけの為にフォーマルなドレスに着替えなくてはいけないと教えられた時は呆れて言葉が紡げなかつた。この分ではダニエルや子犬と走り回る専用のドレスを<sup>あつら</sup>説えなくてはならないようだ。

家庭教師でいる間はドレスは一日一枚で済んだ。それも今着ているものよりもずっと動きやすいものだ。それに今流行だというドレスはエミリアが持つっていた襟が詰まつていてものとはまるで違い、胸

元が大きく開いている。食事中に限らず、正直なところ息を吸う度に気が気ではなかった。

もっとも、その部屋にはダニエルとマグナスの他には従者が数名いるだけで、夫であるマグナスは殆どエミリアの方を見ようとはしなかつたが。

綺麗だと褒めて欲しかったわけでもないが、あそこまで無関心を装われると誰の為に着飾っているのか分からなくなる。誰の為にこんな派手なドレスを着ているのか。

エミリアはもう一度ダニエルの髪を撫で、音を立てないようにそっと立ち上がった。レックスは気配にこそ敏感にぴくぴくと耳を動かしたもの、目を開ける様子はなかつた。

「一体どうに行っていたのだ」

宛がわれた自分の部屋に戻ったエミリアは目を疑つた。そこは確かに昼間、ミセス・タリスにエミリアの部屋として紹介された場所に間違いない。調度品も、白い壁紙も記憶しているのと全く同じだ。ただ一つ昼間と違うものがあるとすれば、部屋の中央でマグナスが仁王立ちしていることだ。その顔は不快感を隠そうともしていなかつた。

「マグナス？ こんな時間にどうしたのですか？」

「質問をしているのは私なのだがね、マダム」

うとうとうといつたような口調でマグナスは言ったが、エミリアはそれどころではなかつた。どうしてマグナスがこの部屋にいるのだろうか。

いや、結論から言つてしまえば夫が妻の部屋にいることに何の疑問も湧かないだろつ。しかし一人は形だけの夫婦であり、初夜を拒んでしまった以上そういう雰囲気になることはまずないと思つていた。

「その…ダニエルの部屋におつました」

「ダニエル？今までずっととか？」

「ええ。彼が眠るまでは傍にいたよつと思つて」

マグナスの片眉が上がつた。彼が何かを不快に思つときの癖だとエミリアは肩を竦めた。

「…あまり子供を甘やかすことには感心しない。ダニエルには自室があるのだ。部屋がある以上一人で寝るのが道理だろつ」

甘やかす？エミリアはマグナスの言つてこいることが理解できなかつた。

眠るまで傍にいてやることのビヨンが甘えになるのだろう。寧ろダニエルは甘えることを知らないといふのに。あのガラス玉のような感情のない瞳の裏には果てのない孤独があるので。まだ幼い子供には家族が必要だ。使用者ではなく、心を預けられる家族が。

それを父親であるマグナスは知ろうとはしない。

「お言葉ですが、伯爵様。私はダニエルの母になる為に伯爵様と結婚いたしました。彼に寂しい思いをさせる為ではございません」

「寂しいだと？ダニエルがそう言つたのか」

「いいえ。ですがダニエルはもつと誰かに甘えることを学ぶべきです」

エミリアの口調はどこまでも凜としていて搖ぎ無かつた。マグナス

は暗い室内の中で僅かな明りに浮かぶ彼女を暫く言葉も出さずに見つめていた。

まだ幼いからといってマグナスを甘やかしてくれる人間など、この邸にはいなかつた。長年勤めているネルソンやミセス・タリスですら使用人としての一線を越えてはこなかつた。

次代の当主として厳しく躰けられてきたマグナスにとって一人で寝ることは当たり前であり、それが特別なことだと思ったことは一度もないし、当然ダニエルにもそうするべきだと思つていた。

エミリアの言う通り、マグナスはダニエルの母となつてもうべく彼女と結婚した。しかし、マグナス自身母親といつ定義をよく知らない。

記憶に残る母親像と言えば社交界シーズンには連日連夜パーティに出掛け、音楽会やオペラの観賞会とにかく忙しかつたとしか言いようがない。彼女の愛するものと言えば金とラザフォード伯爵夫人という肩書、それから自身の美貌だつた。

息子など 幼いマグナスなど 彼女の興味を引く対象ではなかつた。勿論、ある一つの例外はあつたが。

誰かに頼ることは甘えだと思っていたマグナスにとって、甘えることを知るべきだと主張するエミリアの考えは新鮮であつた。だが一方で強く反発する自分もいる。

甘えなど、高貴なる伯爵に必要なものか。甘えは己を弱くするものだ。

しかし無駄な論議をしている暇はない。マグナスは片手を上げて空気中に漂つていた緊張感を絶つた。

「結構。ダニエルに関しては君がしたいようにするがいい

エミリアは知らず知らずのうちに強張っていた肩の緊張を解いた。マグナスがエミリアの考え方理解してくれたとは言い難いが、少なくともダニエルに付き添うことを見守られたわけではない。

「ありがとうございます、マグナス」「喜ぶのはまだ早いと思つが」

マグナスの含みのある言葉にエミリアは再び息を詰めなければならなかつた。彼は懐から何かを取り出すと、部屋のほぼ中央にある小ぶりのテーブルの上にそれを置いた。

「君に伯爵夫人としての最初の課題だ。ラグバード公爵夫妻からデイナーのご招待を頂いている。時間はまだあるがドレスの採寸などは明日にでも始めなければならないだろう」

今度こそエミリアの心臓は止まつた筈だ。いつそのことその方が大いに楽だつたに違いない。

ラグバード公爵と言えば英國でもトップクラスの貴族だ。その名を知らないものなどこの国にはいないのではないだろうか。

エミリアがラザフォード伯爵夫人となつてまだ一週間も経つていな。この屋敷にも慣れていないと言うのに、そんな大規模なパーティで失態を犯さずといられるかまったくもつて自信がない。マグナスに視線を向けると彼は意気揚々とした顔でエミリアを見ていた。まるで彼女がこうして困ることを楽しんでいるかのように。悔しさで喉の奥が熱くなる。伯爵の思い通りの反応をしたらいけない。絶対に困つた顔などしてやるものか。

エミリアは一旦深く呼吸をして自分を落ちつけると、背筋をぴんと伸ばしてマグナスと向き合つた。

灰色の瞳と薄茶色の瞳が互いをそれぞれに映す。

「分かりました。伯爵様に迷惑をおかけしないよう精一杯努力いたします」「…頼もしい奥方で大いに助かる。今日は遅い。もう休みなさい」

エミリアの毅然とした態度に一瞬言葉を失つたマグナスだったが、すぐに眉を顰めると苦々しげにそう吐いた。そしてエミリアへの夜の挨拶もそこそこに荒々しく部屋から出ると、近くにいた使用人にシェリー酒を持つてくるように怒鳴り自室へのドアを開いた。

代々の伯爵家当主が使ってきた部屋は歴史がある分、肺に通る空気にすら重みを感じる。この重みこそが自分の証明だ。

先ほどのエミリアの瞳を思い出し、マグナスは苛立たしげに黒髪をかきあげた。あの真っ直ぐな瞳を見ると腹立たしくて仕方がない。彼女が憐く涙でも流していれば、これ程までに苛立つこともなかつただろう。

一体なんだというのだ！ そう大声で叫びたい衝動にも駆られた。

マグナスが欲しかったのはあんな風に夫に楯突くような妻ではなかつた筈だ。従順で甘い言葉を求めない、ダニエルの母となるに相応しい女性だ。決して、決して意思を持った強い瞳で自分を見るような女性ではない。

マグナスの知る限り それも相当な数だと自負している マグナスの出会う女性たちは少なくとも皆、表向きは従順だった。

それは彼の後に大きな権力と財産があることを知っているからだ。社交界でも有名な彼を夫とすることにも大きな意味を持つていただろう。

常にマグナスの顔色を窺い、賛辞の言葉を並べ機嫌を損ねないよう努力する。未来のラザフォード伯爵夫人の座はそれほどまでに魅力的だったのだ。

エミリアもいつそそういう女性だつたらよかつたのだ。野心に溢れ、子供のことなど関心を持たない婦人だったのならマグナスは彼女と結婚したりしなかったのに。

なのにエミリアはマグナスの持つもの一つとして魅力を感じてはいなかった。マグナスを真っ直ぐ見据え、反論することに何の

躊躇いも覚えない。マグナスに愛想を振りまくこともせず、プロポーズすら最初は断つた。

一体なんだというのだ。腹立たしいと思つ半面で、彼女の意思の宿つた瞳に映ることの心地よさは！

それは胸を搔き鳴りたいほどの熱だった。

そのまま同じ部屋にいたら間違いなく熱の解放を求めていたに違いない。それが余計にマグナスの自尊心を傷つけた。たった一人の女に感情を左右されるなど、あつてはならぬことだ。

マグナスが行き場のない怒りを募らせている間にノックの音がし、

使用人がおずおずとシャリー酒を持ってきた。

それをひつたくるようにして取ると、マグナスはすぐにグラスにそれを注ぎ一気に飲み干した。焼けるような熱が喉を伝つて心臓の鼓動を速めて行く。

だが、マグナスは分かつていた。何もかもを忘れないときには、酒は何も忘れさせてはくれないのだと。

翌朝日を覚ましたエミリアは、寝心地のいいベッドと美しい模様が描かれている天井の説明をつけるのに一寸ぐるりと部屋を見渡さなくてはいけなかつた。

数回瞬きをした後、ぼんやりとした思考が次第に冴えてきて全ての記憶が脳裏によぎつた。僅かに足を動かすと、滑らかなシーツが肌を心地よく擦つた。

ここに来て最初の朝だ。外は重苦しい雲が数時間後の雨を予測させている。

ベッド脇の化粧台にはすでに洗顔用のお湯と水が用意されていた。エミリアはそれで顔を拭くと、ベルを鳴らして小間使いのドリーを呼んだ。

ドリーはエミリアよりも4つ年上の元気のいい女性で、手早く支度を整えたり髪を結つたりしている間も楽しそうに鼻歌を歌つたりエミリアに意見を聞いたりした。エミリアはドリーの質問に一つ一つ丁寧に答えながら、時々調子が外れる鼻歌に笑いそうになるのを必死で堪えた。

身支度が済み、階段を下りて朝食用の部屋へと入った。テーブルにはすでにダニエルがついていたが、マグナスの姿は見えなかつた。控えていたネルソンに尋ねてみると、マグナスは今朝早くに近くの領地にある友人宅へ出掛けたと告げられた。

「滞在は1、2週間程度だそうです。入用がございましたら私にお申し付け下さい」  
「そう…ありがとうございます」

エミリアは胃が下がつていいくような息苦しさを感じた。新婚早々に1週間以上も妻を置き去りにする夫がいるだなんて！それも正式に

こここの女主人となつて1日も経つていかないといふのに。

それはいかにマグナスがエミリアのことを気にかけていいかを示しているようだつた。知らず知らずのうちにエミリアの口から重い溜め息が零れる。

昨夜はマグナスの思い通りになるのが嫌であんな強気な態度を取つてはいたが、内心不安で仕方ないのだ。貴族同士の繫がりもなく、友人もいない彼女にとつて夫だけが唯一の頼りであったのに。

マグナスはあつさりとエミリアの頬りの綱を切つてしまつたのだ。ディナーパーティまでそれほど時間がないのはよく分かつてゐる。だからこそ恥をかかないよう入念に準備が必要だ。

新しいドレスの裁縫、ダンスの練習、貴族たちの関係、社交界を取り仕切る夫人たちのことも知らなくてはいけないだろう。考えるだけで頭が痛くなつてきそうだ。

ダニエルが不安そうにこちらを見ているのに気が付き、エミリアは慌てて笑顔を浮かべる。不安になつても仕方がない。こうしていろいろにもどんどん時間は過ぎて行くのだ。

せめてマグナスがいない1週間、ネルソンやミセス・タリスの力を借りて自分なりに出来る限りを頑張ろう。

そしてマグナスのあの冷たい瞳を驚愕に染めてみせるのだ。決して恥をかかせることだけはあつてはならない。

次々と目の前に並べられる美味しそうな朝食を目の前に、エミリアはそう誓つたのだった。

湿つた空氣を肺いっぱいに入れながら、マグナスは落ちつかなげに窓の外を見た。見慣れた景色が遠ざかり、辺り一面が深い緑に染まる同時に重苦しい溜め息が零れる。

昨夜の苛立ちから抜けきれず、朝食もそこに衝動的に友人宅へと向かっているが、よくよく考えてみればなんと愚かなことか。まるでエミリアから逃げているようではないか。逃げるなど騎士道精神に反している。

なにも急に友人を訪ねるようなまねをしなくて、朝食に降りてきましたエミリアに冷やかな挨拶をすればそれで済んだ筈だ。

マグナスは再び溜め息をついた。感情を押し隠すのは人一倍得意だと思っていたのに。その自負はエミリアの前ではまったくと言つていいほど役には立たない。

しかし今更屋敷に戻るなど以ての外だ。久しぶりに友人を訪ねてみるのもたまにはいいだろう。

大学時代からの悪友はきっとマグナスをこの不可解な感情から解き放ってくれるに違いない。狩にカード遊び、夜通し飲む上等な酒でいつもの自分に戻れるのだ。

マグナスは信じていた。昨夜から続く胸を焦がす苛立ちは、ほんの一時のものであると。そして、それは簡単に消せるのだと。

\*

「いらっしゃります。ラザフォード卿」

執事に案内され、マグナスは応接間へ足を踏み入れた。グランヴェル家よりも些か華美な家具はしかし、城のようなこの屋敷に絶妙な優雅さを与えていた。趣味よく配置された家具に大きな明るい窓。壁の上には数代前の王直々に贈られたという肖像画が掛けられ、こ

の部屋に入る全ての人物に睨みを利かせている。埋め込み式の暖炉の中央にはこの屋敷の主人自慢の獅子が精巧に彫られていた。

歴史が隅々から感じられる部屋を一通り見渡すと、マグナスは近くにあつた背の広い椅子に腰を落ち着けた。赤地に金の織りが入っているその椅子は座り心地もとてもよかつた。

「君から訪ねてくるだなんて驚きだな」

やがて陽気な声と共に執事に伴われた友人が姿を現した。

マグナスよりも数年遅れて侯爵位を受け継いだこの男は、薄い金髪の巻き毛が特徴の好青年であった。学生時代から人当たりがよく、明るい性格だったため、いつも周りには友人が溢れていた。

マグナスとは一見正反対に見えて強かなところもあり、今日までなにかと縁が続いている。マグナスの亡き妻も実は青年の遠縁にあったのだ。

「突然すまないな、リチャード」

「いや。久しぶりに会えて嬉しいぞ」

世の婦人方を騒がせる爽やかな笑みを浮かべ、リチャードはマグナスの向かいの椅子に座った。その目はまるで子供のように輝いており、マグナスの胸にさつと嫌な予感が走った。

「それで？親愛なる我が友人、ラザフォード卿の奥方にお目に見えは叶わないのかな」

悪戯っぽく聞いたリチャードに、マグナスはやはりと眉を顰めた。出来れば今は彼女の話をしたくないのが本音だった。

何しろ昨日の今日だ。ヒミリアの真っ直ぐな瞳は未だマグナスの神経を焦がし続けているし、同時に怒りの感情も消えてはいない。第

一、マグナスがエミリアについて友人を初め他人に語れるものなど驚くほど少ないのだ。

一言でいえば、ひどく強情な娘だ。自分が弱い立場であろうとも決してそれを認めようとしないのだから。

マグナスは何とかリチャードの気を別のところに逸らせないかとも考えたが、それは難しいこともまた長年の友人関係から知っていた。リチャードの興味を削ぐのはなかなか骨が折れる。

彼は間違いなく今回のマグナスの結婚に興味を持っている。  
何しろサリアナがダニエルを産んでもすぐに亡くなつてからもマグナスは一度と結婚はしないと常々言つていたからだ。その言葉通り、遊びこそそれどマグナスは結婚する気配など微塵も出してはいなかつた。

それがたつた数ヶ月会わなかつた間にマグナスは新しい妻と家庭を築こうとしている。それも元々は妹の家庭教師だと言つではないか。そんな噂を無視しろという方がどうかしている。

「君のところにも来ているだろ？ ラグバード公爵からのティナーの招待状だ。そこに妻を連れて行こうかと思つていてる」

マグナスは観念したように溜め息をつくと、そう切り出した。下手に話をばぐらかすよりも素直に話し、さつさと話題を変える方が利口だと考えた。

「ああ。確かきていたはずだ。へえ、じゃあそれまでお預けってことか。楽しみに待つてみたいところだが、もつ少し彼女に対するヒントが欲しいな

「なんだと？ 他人の妻を詮索するなどどうかしている

「確かに。けど考えてみてくれ。僕はまだ独身だし、当分結婚するつもりもない。まだまだ色んな花を楽しみたいんでね。だが侯爵家の嫡男としていづれは妻を娶らなくてはいけない。絶対不落の氷の

伯爵とまで言われた君を落としたのがどんな女性か今後の為に参考にしても罰は当たらないだろ？」

滅茶苦茶な理屈を並べられ、マグナスは微かに頭痛を覚えた。これは一から十までマグナスが話すまでは決して諦めてはくれなそうだ。まったくこの友人は普段温和なだけに、こういうときはなんとしてでも食い下がる。それは称賛に値すべきかそれとも彼の短所として捉えるべきか。

「いいだろう。だが君が欲している答えかどうかは保証できない。私はダニエルの為に彼女と結婚したのだからな」

その瞬間、僅かにリチャードの眉が寄った。その理由をマグナスはよく分かっている。マグナスの秘密を彼以外に知る唯一の人物がリチャードだからだ。

秘密は己の弱さを露呈することとなるが、同時に強い心の支えを得る機会にもなる。その秘密を持った時、マグナスは生涯誰にも話すまいと誓つた。だが長年の友人はマグナスの些細な異変すら見逃してはくれなかつた。

正直に話し終えた時、マグナスはリチャードに聞いた。社交界中に話すかと。スキヤンダルになるには充分な要素であつたし、マグナスをよく思わない人々なら喜んで貴族たちに吹聴して回つただろうが、リチャードは首を振つた。

彼は今日に至るまでその約束を破つたことはなかつたし、そしてこれからも破ることはないだろ？とマグナスは確信している。

暫く沈黙を置いた後、リチャードは静かに「そうか」とまるで独り言のように呟いた。視線はマグナスではなく、重厚な絵が描かれている天井へと向けられていた。

部屋の重厚さに負けないほどに、今や一人を取り巻く空気は変わっていた。

「君の奥方は… その、あのことを知っているのか？」

マグナスは笑つた。そしてそれはリチャードへの答えでもあつた。エミリアにマグナスの秘密を話すつもりはない。勿論エミリアに限つたことではなく、マグナスは妻となつた女性に初めから何も打ち明けようとは思つていなかつた。

恋愛をして夫婦になる男女など一握りだ。多くは結婚してから恋愛を楽しむ。だがマグナスの場合そのどちらでもなかつた。愛ほどマグナスが信用していないものはない。目に見えぬものに根拠などないし、形を変えぬ気持などどこにもないからだ。信用していないものに、どうして自分の秘密を託せよづか。

愛などなくとも夫婦として形は保てる。夫として最低限の事はするつもりだ。エミリアには何不自由のない生活を与えることを保証する。好きなだけドレスを仕立てればいい、社交界の華となるべく宝石に身を包み夜ごと音楽会や舞踏会に繰り出したつて構わない。マグナスが彼女に望むのはただ一つ、寄宿学校へ入れるまでダニエルが跡取りとして不足なく育つことだけだ。

リチャードはなおも戸惑つているようだつた。だがそれ以上続けなかつたのは、彼なりの気遣いだつたのだろう。リチャードは努めて明るく、ダニエルの事を聞いてきた。

「ダニエルにも暫く会つてないな。元氣か？」

「どうだらうな。私が留守の間、病気をしたとは聞いていない」

「呆れたな。そんなんじゃダニエルも寂しがつてゐんじゃないか？」

リチャードの言葉にふと、忘れていたと思つていたエミリアの言葉が脳裏に甦る。そしてその声は、思い出す彼女の瞳は、絶え間なくマグナスの胸を熱くさせた。

そんな感情を振り切るかのように、マグナスは自嘲気味に笑つた。

「妻にも同じことを言われた。ダニエルは誰かに甘えることを学ぶべきだと。私には理解できないがな」

僅かにリチャードの口角が上がったのをマグナスは見逃さなかつた。先ほどよりもいつそう笑みを深くして、彼は意味ありげに手を組んだり唇を指で触れたりした。

何か企んでいる時のリチャードの癖だ。

「なんだ？」

「いや。随分素晴らしい奥方じゃないか。ますます興味を持つたな。どんなに魅力的な女性なのか、ディナーパーティーが待ちきれない」

マグナスは不可解そうに片眉を上げた。素晴らしいがどうかななど、エミリアに会つたことも無いリチャードがどうして分かるというのだろう。

確かに彼女は今までマグナスが出会つたどの女性像にも当て嵌まらない。背はマグナスの目線よりもずっと下であるし、一度だけ腕を回した腰はこちらが心配になるほど細かつた。かと思えばマグナスに対しても毅然とした態度を取り続けるし、いつも簡単にマグナスの神経を逆撫でする。

確かに腹立たしいが、それは他の女性たちに感じたものとはまったく別の苛立ちであるようにも思えた。それが何なののかは説明がつかないが。

リチャードの言葉はマグナスの胸の奥に小さな棘を刺す。自分の妻が他の男に興味を持たれるのは何故か不愉快だつた。

彼女には何も言わず屋敷を出てきたことを今更ながらに後悔し始めている自分にマグナスは驚いた。

いや、屋敷にはネルソンもミセス・タリスもいるではないか。彼ら

には私の留守中しつかりとエミリアを助けるよう」と言つておいた。

私がいなくても彼らはしつかりとやつてくれるだろう。

今頃エミリアはディナーパーティに向けて新しいドレスの採寸をしている最中であろう。マグナスは流行の生地の薄いドレスを着た妻を思い描いた。モスリンの生地が柔らかく包み、あの真珠のような肌がうつすらと透けてみせる。

急に体が熱くなり、喉の奥が渴いた。そんな妻の姿を他人の目に晒すなど、考えてもみなかつた。

遂に堪え切れないといったように、それまで黙つてマグナスを見ていたリチャードは肩を震わせ笑いだした。

「何が可笑しい

「マグナス、一体自分がどんな顔をしているか気付いているか？鏡

でも見せたやりたいよ」

「なんだと？」

「一つ僕から忠告だ。君は必ず今日僕に言つた言葉を後悔する

リチャードの自信たっぷりな言葉も今のマグナスには嫌味にしか聞こえなかつた。後悔など、自分の屋敷を出てきた瞬間から何度もしているからだ。

エミリアは疲れきっていた。肉体的にも、精神的にも。

中流階級に生まれた者なら一度は貴族の生活に憧れるだろう。彼らは仕事をすることを恥じと考へ、浪費こそ美德と考える。社交シンズになれば連日バー・ティに追われ、常に流行のドレスに高価な宝石を身につける。

勿論結婚相手も家柄や財産を基準に選ばれ、その後の生活もほぼ保証されることになる。つまりのところ借金まみれになつたり、スキヤンダルを起こしたりしなければ一生遊んで暮らせるのだ。

そんな堕落した生活などと強がる一方で、華やかな貴族の女性に憧憬を持つのは当たり前のことだろう。エミリアだって幼い頃はきちんと輝くドレスを着る女性になりたいと思っていたものだ。

だがそんなもの所詮夢物語だということを、エミリアはここ数日で身を以て知った。

貴族の一員であるといふことは決して楽なことばかりではないのだ。まず、3日間続けてフランス人の仕立屋が伯爵家に訪れ、夜会用のドレスを4着と昼間用のドレスを3着作ると言つていた。もうすでにたくさん持つているというのに。

しかもその後に来た裁縫師が得意げに持つてきたドレスの中には肌が透けて見えるものもあり、エミリアは顔から火が出るほど恥ずかしい思いをした。出来るならばシユミニーズドレスは着たくないが、これが流行なのだと断言されてしまつては受け取らずにはいられない。

これを着た時マグナスがどんな顔をするのか少しだけ見てみたい気持ちもあつたが、恐らく片眉一つ動かしはしないだろう。

何しろ結婚してから見た、マグナスの表情と言えばあの不機嫌そうに歪んだものだけだったからだ。

一日の半分がドレスの採寸で終わつたかと思えば、次はダンスのレッスンが始まる。いずれ必要になるだろうと付けられたのだが、エミリアは数日で一気に基本を覚えなくてはならなかつた。

ダンス教師の言つとおりに足を運びながらエミリアはほんの2か月の平和な日々を思い出した。平凡で単調な毎日がとても恋しかつた。昼間はレティシアの家庭教師をして気の合うメイドたちとのささやかなお喋りを楽しみ、夜はレティシアが寝付くまで傍にいて明日のことと思いながらベッドに入る。

今は一日中屋敷で働く人たちに傳かれ、気ままなお喋りすらすることも無くなつていた。思えば初日の夜以来、ダニエルともゆつくり過ごしていない。一日中疲れを引きずつている所為で、食事の時間すらダニエルの方をまともに見ていないんじやないだろうか。

これじゃいけない。そう思つたエミリアはダンスのレッスンを早めに切り上げてもらい、急いでダニエルの部屋に向かつた。

彼には乳母のナタリーが付いているが、お世辞にも懷いていとは言い難い。ナタリーは自分のすることに口出しあは無用とばかりにエミリアを睨むし、元家庭教師が伯爵夫人になつたことが気に食わないようにいつもエミリアに対してつんとしている。

もしダニエルと遊ぶことに嫌な顔をされても放つておけばいい。私はこここの女主人なのだ。そう自分に言い聞かせ、歩く速度を速める。2階へと続く専用階段を上ると奥にあるダニエルの部屋の前に、なぜか数人の使用者があるおろとしているのが目に入った。そこにはミセス・タリスやネルソンの姿もあり、心配そうに部屋の中を覗いている。

部屋に近づくと中からダニエルの泣き叫ぶ声と、ナタリーが何か言う声が聞こえた。異様な雰囲気に自然と足も速くなつっていく。

「どうかしたの？」

おもわずエミリアが声をかけると、振り返ったミセス・タリスが困つたように眉を下げる。

「奥様…それが」

彼女の言葉は何かが割れる音で遮られた。慌てて中を見ると部屋はそこらじゅうに物が散乱していて、この前入った時とはまるで違う様をしていた。

ダニエルがカーペットの上に座つて泣きながら物を投げつけるのをナタリーが必死で宥めている。だが彼女の声が届いていないのかダニエルはいつそう大きく喚いた。

「一体どうしたといつのー」

エミリアが急いで2人の間に割つて入つても状況はあまり変わらなかつた。額に汗を滲ませたナタリーはほつれた髪を直しながらエミリアにきつい視線を向けた。

「奥様には関係ございません。いつのことですから私にお任せ下さい！」

これがいつものことだと片づけられるのだろうか。ダニエルはちつともナタリーの言うことを聞こうとはしないし、それを宥めようとナタリーが大声を出す為に更に状況は酷くなっていく。

すぐにミセス・タリスの方を向き、エミリアは聞いた。

「こういうことは今までに何度もあったの？」

「え？ええ、いつもは大変大人しいのですけれど、ときどき突然」

「どういう時が多い？」

「そうですね…旦那様が留守の時や使用人たちが忙しい時が多いよ

うな気がします」

エミリアはその言葉にはつとした。

ダニエルは寂しいと言葉にする術を知らないのだ。まだこんなに小さな子供なのに誰もその寂しさに気付いていなかつた。彼は言葉にする代わりに物を投げ、癪癩を起して自分という存在を認識して欲しかつたのではないか。

寂しい思いをさせるなどマグナスに言つておきながら、いつの間にか自分のことに精一杯になつていたことに気付きエミリアは自分の不甲斐なさに涙が出てきた。私だつて何も分かつてはいなかつたのだ。

忙しさにかまけてダニエルの気持ちを知りつとしなかつたのは私の方だ。

腕を伸ばしてダニエルを抱き上げる。涙の跡の残る柔らかい頬を撫で、エミリアは力一杯彼を抱きしめた。

「じめんなさい。寂しかつたのでしょ？…むづ泣かないで」

途端にぴたりと泣き止んだダニエルは、じつとエミリアを見つめる。ブルーに近いグレーの瞳いっぱいにエミリアの顔が映つた。その場にいた誰もがおもわず息を飲んだ。今まで誰が宥めても疲れてしまつまでダニエルが泣きやむことはなかつたのだ。ナタリーでさえじつとエミリアの動向を窺つっていた。

「ネルソン」

「はい、奥様」

「今日これからと明日の予定は全て取り消します。明後日からは出来る限り時間を詰めて、午後を空けるよつとしておいて欲しいの」

「愚まりました」

内心驚いているだろ？」、ネルソンはそれをおぐびこむ圧さずいにいつものよつに礼儀正しく返事をした。戸口に立つていたミセス・タリスは温かい笑みを浮かべながらエミリアを見ており、それだけで彼女がエミリアのしたことを快く思ってくれているのだと分かる。ナタリーは呆然と2人を見上げていたが、やがて何も言わずに部屋から立ち去ってしまった。

今までダニエルの面倒を見てきたのはナタリーだ。彼女の働きはこれからも期待したいし、出来れば仲良くなりたい。後でゆっくりと話し合う必要がありそつとエミリアは思った。

ダニエルはすっかりエミリアに体重を預けて大人しくしていた。新品のドレスは幾らか汚れてしまつたが、エミリアはちつとも気にならない。きっとこの屋敷の優秀な洗濯婦たちが、仕立てた時と同じようにしてくれるだろ？

エミリアは決めていた。もう何があつてもダニエルに寂しい思いはさせないと。

「じゃあダニエル、何をして遊びましょうか。レックスと庭を走り回る？それとも湖の近くまでお散歩しましちゃうか？」

ダニエルはこつこつと笑つて言った。

「ひみつのトリー。」

\*

それから5日後の午後にマグナスは帰ってきた。予定していた2週間よりは3日も早かつたが、それでもマグナスには充分長い時間リチャードの屋敷に滞在していたような気がしていた。

久々にリチャードとカード遊びに耽つたり、遅くまで酒を飲んだり領地にある森へ狩へ出かけたりとそれなりに楽しむことが出来たがマグナスの注意は殆ど別のこところにあつたと言つても過言ではなかつた。

リチャードの屋敷にいる金髪のメイドを見る度におもわず振り返つてしまつたり、珍しくチエスで読みを誤つてしまつたりと散々だつた。

その度にリチャードが意味ありげな笑みを寄こすのにもうんざりだつたし、さすがに自分が平常ではないと悟つたマグナスは今朝早く挨拶もそぞろに屋敷を後にした。

窓の外の景色が見慣れたものになるに連れ、マグナスは今までに感じたことのないような安堵を覚えた。その理由がなんのかは深く考えないことにした。

ポーチの前では突然帰つてきた主人に使用人たちが慌てて列をなしていった。ネルソンとミセス・タリスだけはいつも通りであったが。馬車から下り、馬車がキャラリッジ・ポーチへ向かつてくるを見送つた後マグナスはネルソンに尋ねた。

「なにか不都合はなかつたか?」

マグナスが屋敷を空ける度に聞いてきた言葉だ。いつもはその問い

に難しげな顔をしてネルソンは答えていたが、今回も違つた。

「いいえ。ございませんでした」

「なかつた？ダニエルは癪瘡を起さなかつたのか」

いつそ晴々しいような表情でそう言われ、マグナスはおもわず聞き返していた。今までマグナスが屋敷を空けている間、ダニエルが問題を起こさなかつたことなど一度もなかつたからだ。それがこのたつた1週間かそこらで変わるわけがない。長年ダニエルの面倒を見てきた乳母ですら手に余つてはいるといつた。

「いえ。旦那様が出かけになられてから4日後に。ですが直ぐ奥様がその場を收めました」

マグナスは耳を疑つた。あれ程手を焼いていたのに、一体彼女はどんなことをしたというのだ。

「…奥方はどこにいる」

「ダニエル様とご一緒に庭におられます」

足は自然と庭の方へ動いていた。

エミリアとダニエルは噴水の近くで疲れた身体を休めていた。レックスが傍に来てもつと遊びたいというように元気よく吠える。だがダニエルの興味は既に別のものへと向けられていた。ダニエルが手に持つてているのは金色のロケットリングであった。

例の庭にある館の茂みの中からレックスが咥えてきたもので、細かな彫刻がとても美しいリングだ。蓋を開けると天使の彫刻が彫られ

てあり、蓋の裏側にも何か文字が刻まれていた。

残念なことに文字は後から消そうとしたのかとこじらじら削られており、よく読み取れなかつたが、きっと誰かが愛する人に贈つたものなのだろうとエミリアは胸をときめかせた。

それ程古いものではないようだし、もしかしたらマグナスが誰かにそう思つた時、エミリアの胸の奥が小さく痛んだ。本人ですら氣の所為かと思うほどの微かな痛みではあつたが、エミリアはおもわず自分の左胸を押さえていた。

マグナスの口から前妻のことを聞いたことはなかつたし、その必要も感じてはいなかつた。だがマグナスの姿を受け継いだとしても、ダニエルを見れば亡くなつた奥方がどれほど美しいか想像に容易い。きっとマグナスの隣に立つても見劣りせず、堂々としていられる人だつたのだろう。

エミリアは無意識にダニエルの金色の髪を撫でた。ふとマグナスの髪色は黒でもつと硬質のようだつたことを思い出し、ダニエルの髪色は亡き奥様から受け継いだのだと分かつた。自分と同じ色だ。これから先、どんなにエミリアが伯爵夫人としての教養を身に付けてここりで叶うことのない人。マグナスはエミリアの金髪を見る度に亡き奥様を思い出しているかもしだれない。もしあのロケットリングを贈つたのがマグナスならば、彼はとても奥様を愛していたのかもしだれない。

それは何故かとても とても悲しいことだつた。

「エミリア」

噴水の傍でダニエルの頭を撫でてゐるエミリアを見つけたとき、マグナスの心臓は不自然に跳ねた。1週間ぶりにあつた妻は、最後に見た時よりも洗練され美しくなつてゐるような気がした。

金色の髪は陽の光を受けてきらきらと輝き、何かを考えているように伏せられた睫毛が瞳を飾つていた。

一瞬言葉を失い、どう声をかけていいのか分からなくなつた。こんなに狼狽えたことは初めてで一度喉を鳴らすことで平静を取り戻そくうと必死になつた。

その結果、口から零れたのは彼女の名前であった。エミリアは弾かれたように顔を上げ、目一杯瞳を大きく開き、マグナスを映した。隣にいたダニエルもそれに倣い、マグナスの方を振り返る。

「マグナス？ いつお帰りに…」

「ついさっきだ」

「お迎えもせずに申し訳ございません。お疲れでしょう？」

「いや」

驚いたことに、馬車の中で感じていた疲労はすっかり消えていた。代わりに数日忘れていた熱が再びマグナスの胸に甦る。

エミリアの気遣わしげな視線はマグナスを落ちつかなくさせ、おもわず目を逸らす。彼女の細い指先はダニエルの髪を梳き、優しく撫でていた。

「お帰りなさいませ」

僅かな沈黙の後、エミリアが発した言葉は更にマグナスの心臓を熱くさせるのに充分な威力を持つていた。その言葉を言われたのは初めてのような気がした。何故だかとても温かい。

躊躇いながらもエミリアへ手を伸ばそうとした時、ダニエルが持つている指輪に目を奪われた。

途端にあれ程熱を放っていた心臓が、凍りついたように冷たくなつていていく。

「それを…」

「え？」

「一体それをどこで見つけた！」

先ほどとは打って変わつて声を荒げたマグナスにエミリアもダニエルも怯えたように肩を竦ませた。鋭い視線はしつかりとダニエルの持つている指輪に注がれ、恐ろしいまでに見つめている。

「まあいい。それは私のものだ。今すぐ返してもらおう

マグナスの言葉にダニエルが首を振る。彼が一目でこのリングを気に入つたのはエミリアにも分かつたが、今回ばかりはマグナスに頼もづといふ気持ちすら起こらなかつた。

あまりにもマグナスの発する気が冷たかっただからだ。エミリアが宥めるようにダニエルの背中をさすると、一瞬泣きそうな顔をしてダニエルは大人しく指輪を離した。すかさずダニエルを抱き、「いい子ね」と言いながらマグナスに指輪を渡す。これ以上こんな緊張の中にいるのは耐えられそうにもない。

指輪を受け取つたマグナスはそれを乱暴にポケットにしまつと、何も言わず踵を返して行つてしまつた。

その背中からは何も分からぬが、エミリアは過敏なまでのマグナスの行動に何か言いようのない不安を感じていた。

明るく庭を照らしていた太陽を雲が覆い、彼らの影を簡単に消していった。

## 14 (前書き)

ほんのりR氣味な描寫がござります。  
苦手な方はご注意ください。

重苦しい音を立てて風がエミリアとダニエルの間を通つた。一瞬息をするのも苦しいと感じるような強い風だ。

2人の頭上を薄暗い雲がどんどん過ぎていく。空気は湿り、そこら一帯を雨を予感させる匂いでいっぱいにした。

去つていくマグナスの後姿をエミリアはただじつと見つめていた。どんどん小さくなりやがて屋敷の中へと消えていく背中には、言葉では表せないほどの重い「何か」が圧し掛かっているようにも見える。

その何かがエミリアには分からないし、きっとマグナスもエミリアに分かつて欲しいとは思っていないだろう。

ほぼ一週間ぶりに会つた夫は相変わらず何もかもが完璧だった。冷たい雰囲気でさえマグナスを飾る装飾品となる。

久しぶりの再会にも妻に優しい言葉一つくれない夫　いや、優しい言葉が欲しかったのではない。ただ、出ていく前と変わらないマグナスの態度で、エミリアを少しも恋しく思つていなことが分かつて悲しいのだ。

ここ一週間でエミリアの周りは忙しなく変わつていた。教師やミセス・タリスに教わり、完璧とは言えないまでもある程度貴族のマナーは身につけたと思っているし、ドレスも伯爵夫人に恥じないフランス式の流行のドレスを揃えた。

似合つているかどうかは別としても特訓の成果は確かに現れていると言つていいだろう。

ダニエルの乳母であるナタリーとは未だ打ち解けられていないが、他の使用人は段々とエミリアを信用し始めている。あのダニエルの一件が大きなきっかけとなつたのは間違いないだろう。

せっかく見つけた指輪をマグナスに取られてしまつたダニエルは暫く唇を尖らせてエミリアのドレスの裾を掴んでいたが、やがてレッ

クスと一緒にになって綺麗に刈られた芝生の上を走り回り始めた。

あの日から随分ダニエルは変わったと思う。エミリアの前では時々笑ってくれるようになつたし、一生懸命言葉を繋げてくれるのもとても嬉しい。夜寝るときはエミリアの片手をしつかり掴んで離さないし、レッスンが終わるまで部屋の外で待っていてくれた時はおもわず抱きしめてしまった。

今ではダニエルのベッドで寝ることが多くなり、レッスンの間はダニエルの為に部屋の隅に椅子が置かれるようになつた。

そんな息子の変化にマグナスは気付いていないのだろうか？

向こうから手に一輪のマーガレットを持ったダニエルが走ってくる。頬は子供らしく紅潮し、安定しない芝生の上で転ぶのではないかとはらはらしたが予想以上に地面を踏みしめる足取りはしっかりとしていた。

エミリアは腰を屈め、腕を広げてダニエルを待つた。飛び込んでくる体温の温かさや太陽のような香りを抱きしめる。

ダニエルの小さなふつくらとした手がエミリアの髪に触れ、摘んできたばかりのマーガレットを髪に挿した。彼は自分と同じエミリアの髪色を気にしているのか、最近頻りに触つてくる。

エミリアが同じようにダニエルの髪を撫でると嬉しそうに口元が締んでいく。

「そろそろお屋敷に戻りましょ、ダニエル。雨が降りそつだわ」

マグナスは手の中の指輪を見つめた。精巧なデザインは一目で高価だと分かる。

蓋の裏には 今は文字が霞んで読めないが、マグナスは一字一句間違えずに覚えている こう書いてあつた。

>永久の愛の証に<

手の甲が白くなるまできつく拳を握る。

胸を燻つているのは自責の念なのか、後悔なのか。いや私が何をしたというのだ。

マグナスはもう一度指輪を見つめた。甦るのは苦い思い出だけ。しかし例えあの頃に戻れたとしても、マグナスにはどうしようもなかつたことだ。

窓の外にはずつしりとした灰色の雲が太陽を覆い隠していた。束の間の晴天は嵐を呼ぶ。今や先ほどまでの太陽は見る影もなく、風が窓ガラスを揺らし庭の木を薙ぎ倒さんばかりに強く吹いている。懐中時計を取り出すと帰つて来てからまだ1時間と経っていないことが分かつた。

エミリアとダニエルはもう部屋の中に戻ったのだろう。二人がいた場所にはもう何もなかつた。

その時ドアをノックする音が聞こえ、マグナスは急いで指輪を引き出しの中に閉まつた。小さな木の箱の中で指輪が固い音を立てる。とつたにネルソンだと判断したマグナスは相手が誰かも確かめずに入ることを許可してしまつた。

重厚なドアの隙間から金色の髪が見えた時には心の底からそれを後悔したが。

「お邪魔して申し訳ありません  
構わない。入りなさい」

おずおずと一步を踏み出す彼女はもつあの貧相な家庭教師ではなかつた。

首元を覆っていた忌々しいドレスは姿を消し、代わりに着ているのは胸元が開いた流行のドレスだ。ほつそりとした肩に浮き出た鎖骨、胸のすぐ下で絞られた細身のドレスは小柄な彼女によく似合つている。淡く光を放つ髪には白いマーガレットの花が一輪飾られており、マグナスはあの初夜の時と同じような渴きを覚えた。

まだ胸の開いたドレスに慣れていないのか、彼女はマグナスと目が合いそうになるとさつと視線を落とす。僅かに頬が赤くなっているのは羞恥からなのだろうか。

「なにか用でも？」

胸の奥で荒れ狂う感情を抑えつけ冷静にそう聞く。持てあました両手は不自然に机の上に置いてあつた手紙 それもはつきり言つてどうでもいい を整理し始める。

それも、まるで今までそれらに熱心に目を通していたかのように。

「その…ダニールのことでお話がいやこまか  
「ダニールの？」

てつ生きりさつきの指輪について聞かれるものだと身構えてたマグナスは少しだけ恰好を崩した。だがエミリアの目は真剣そのものだ。何かを決意しているかのように結ばれている唇に胸の前で固く組まれた両手。これではまるで私が彼女を取つて食つみたいではないか！内心で妙な苛立ちを覚えながら、マグナスの手は手紙の返事を書く

為に忙しなく便箋の上を動ぐ。スペルを間違えようが、ピリオドに余計な力が入つてしまい大きな染みができるようがどうでもいい。どうせこの返事は相手に送られるものではないのだから。

「ダニエルはどうしているんだ」

「疲れたようで、部屋で休んでおります。今日はレックスとたくさん走り回りましたから」

「走り回つただと？」

エミリアの発言の所為で今度は”r”がひどく不格好になった。だがダニエルが走り回るような子供だとは思いもしなかつたのだが、驚いて当然だらう。

「最近はよく笑うようにもなったんですね。言葉もたくさん覚えました。彼は学ぶことも好きなようです」

正直に言つてマグナスはこれ以上ないほど驚いていた。自分や優秀な使用者たちが3年間頭を悩ませていた問題を、エミリアはたった2週間で打破してしまったのだから。

やはり彼女を妻にして正解だった。多少は希望に添えない部分もあるが、一番の条件である良き母の部分については文句の言いようがない。他のどの女性であつてもエミリアほどの成果を出すことは叶わなかつたであろう。

「素晴らしい。君には感心させられる」

「ありがとうございます。私、ダニエルが大好きです。ですから彼の母になれてとても嬉しく思つてゐんです」

エミリアの笑顔を見たのは、初めてであつた。

それは文字通り、花の綻ぶような笑顔で途端にマグナスの胸を締め

付ける。彼女の初めての笑顔の理由がマグナスが「えたどれでもなく、息子だとは少々面白くないが、悪くはなかつた。

不自然な心臓の高鳴りは、今にも部屋に響きそつだ。自分を落ちつかせる為に軽く咳払いをするも、どことなくぎこちない。

「それで？君の話というのはそれだけか」

「いえ、あの… 実はもう一つお願いがあるんです」

今度は眉を顰めざるを得なかつた。Hミリアのお願いは金も時間もからないうが、マグナスが知るどれよりも厄介だ。

視線を上げじつと彼女がその”お願い”を口にするのを待つた。

「あの… 少しでいいのです。もう少し、ダニエルを見てください」

またも不可解な”お願い”だ！

勿論エミリアが言つているのはダニエルとともに向き合えといつことぐらいは分かる。だがそうしたところで一体何になるのだ。この3年間、マグナスは出来るだけダニエルと関わらないようにして生きていた。それが今更どう向き合えといつのだ。現に息子もマグナスを恐れている。マグナスが父にいい感情を持つていなかつたのと同じようだ。

父は偉大であったが決して尊敬の対象にはならなかつた。  
だがここでそう言つたとしてもエミリアには理解されないだろ？  
マグナスは頷くと嘘を吐いた。

「分かつた。努力しよう！」

「ありがとうございます！きっとダニエルも喜ぶと思います」

それはどうかなとは口に出さなかつた。せっかく終わった話をまた蒸し返す必要もないだろ？

マグナスは再び手紙に視線を落としたが、エミリアが出ていく気配がない。訝しげに思つて再度顔を上げると、彼女はまだ何か言いたそうにこちらを見ていた。

マグナスの視線に気づき、はっとしたエミリアは急いで口を開くが言葉にはならなかつたようで頼りない吐息だけが零れていった。

「まだ、何か？」

仕方なく思いながらもマグナスが先を促す。

「その、マグナスは何か悩みごとがあるのではないですか？」

「何故そう思う？」

「それは……いえ、根拠などはないのですけど」

段々と小さくなつていく声にマグナスの顔に苛立ちが滲む。それにエミリアは気付かなかつた。

「私たちは夫婦、ですけれど…その、最初にマグナスが仰つたように恋愛関係ではありません。ですから私、思ったのです。友人関係だつたら築けるんじゃないかなつかつて。お互いを知つて、悩みごとも打ち明けてば上手くやつていけ」

やつとマグナスの表情に氣付いたエミリアは言葉を失つた。冷たい目に射抜かれ、体が硬直する。

そこで初めてエミリアは悟つたのだ　触れてはいけない線を越えてしまつたのだと。

「だったら今すぐに君を抱いて差し上げようか？」

マグナスの灰色の瞳は今や炎のように燃え上がりエミリアから体温

を奪っていく。声色は優しいのにひどく恐ろしい。体中の神経が逆立ち、おかしいほどに体が震える。

マグナスが椅子から立ち上がり一歩エミリアに近づく靴音が、まるで死刑宣告のようにも聞こえた。一步、そしてまた一步。

「い、嫌……いやです……来ないで」

「私を知りたいのだろう? 男女を深く知るにはこれが一番だと思うがね」

エミリアの言葉を無視し、ゆっくりとだが確實に彼女を追い詰めていく足音。怖くて堪らないのにその目から逸らすことができない。やがて後退していたエミリアの体は遂に壁へと到達してしまった。マグナスがエミリアの顔の両脇に手をつき完全に逃げられなくするまでに、数秒はあつた筈なのに逃げることさえ出来なかつた。まるで地面に根が張つたかのように動かない足。今にも崩れ落ちそうなのにそれも出来ない。

マグナスの指がエミリアの髪を梳ぐ。固く目を瞑り怯えた顔をするエミリアの頬に舌を這わせる。重なつた唇はあの夜よりもずっと冷たい。

あの時は少なくともマグナスはエミリアに熱を感じていた。だが今は違う。彼に宿るのはエミリアを憎いと思ふ気持ちだけ。

「何も考えなくていい。そうすれば痛みなど感じる余裕もないだろう」「

マグナスの言葉が千本の矢になつて胸を貫く。胸が痛い。どうしようもなく悲しい、苦しい。

エミリアの感情はそのまま涙となり絶え間なく頬を流れていった。それと同時に首筋にかかつっていた息が遠ざかっていく。

「……これ以上私に関わらないでくれ」

マグナスが放つたのはたつたそれだけだった。

エミリアが去つていった扉を見つめ、マグナスはひどく自分を責めた。いつもきらきらと輝きを放つ彼女の瞳から零れる涙は、こんなにもマグナスの胸を締め付ける。

自分で彼女を傷つけておきながら、同じ分だけ自分も傷ついている。マグナスの事情などエミリアは何も知らないのだ。だが彼女が言った”友情”という言葉はどうしてもマグナスの怒りを抑えられなかつた。

椅子に体を預け天井を仰いだ。同じ模様が並ぶ高い天井はこうして歴代の当主たちの憂いの溜め息を吸い込んできたのだろうか。

いつもそうだ。後悔するのは全てが終わってしまった後。許しを乞おうにもその対象は勝手にマグナスの前からいなくなる。

彼がそうであつたように。

記憶の中の彼は決してマグナスを責めない。だが、一生マグナスを苦しめ続けるだろう。

「私を許せ レオ」

その日の夕飯の席にも翌朝の朝食の席にもエミリアは現れなかつた。昨日自分がしたことを思えば至極当然のことだが、空っぽの椅子が視界に入る度に深い溜め息をつかずにはいられなかつた。ダニエルもエミリアがいないことを頻りに気にし、食事は殆ど皿の上に残つたままだ。

会話のない朝食がこんなに味氣ないものだとは初めて知つた。今まではそれが当たり前だつたというのに。

この部屋にいる誰も何も言わないうが、傍に控えているミセス・タリスからはもかもお見通しだと言わんばかりの視線を向けられた。マグナスとエミリアの間にあつたのはごく一般的な夫婦に持ちあがる問題ではないのだが。

確かに昨夜のマグナスの行いは決して褒められたものではない。彼女の言葉に怒り、それをぶつけたのはマグナスの未熟さだ。

エミリアはもう、マグナスの望む”ダニエルの母”としての役目を充分過ぎるほど果たしてくれたのではないか。それ以上に何かを望むのはあまりに身勝手なような気がした。頭では分かっているつもりでも、心はそれを許そうとはしないが。

マグナスは溜め息を吐くと、近くにいたネルソンを呼び寄せ何事を告げ静かにダイニングルームを出ていった。エミリアと和解する必要があつたのだ。

エミリアは清潔なシーツの中で身動きした。一晩中目が冴えていた所為で、頭が鈍く痛む。いつもならばもうすでに起きて朝食を取つている時間だ。

瞳を閉じれば瞼にはマグナスの冷えた表情が浮かぶ。あれ程怒りを露わにした夫を初めて見た。掴まれた手首は鈍い痛みだけを残し、

マグナスの言葉は尖った針のように心を刺す。

「これ以上私に関わらないでくれ。」

切実な声はマグナスの明らかな拒絕。エミリアがその心に少しでも触れることすら彼はよしとしないのだ。

そのことが何故か強引に迫られたことよりも悲しかった。一体自分はどうしてしまったのだろう、どうしてマグナスの行動一つにこうして胸を痛めなくてはいけないのだろう。

段々と深みに嵌っていく思考を、ドアをノックする音が現実へ引き戻した。一瞬マグナスかと思つたが、ドアの向こうから聞こえる声はドリーのものであった。

「奥様、入つてもよろしいでしょうか」

エミリアは返事をしなかつたが、ドリーは恐る恐るといったように扉を開ける。ぴたりとカーテンが閉じられたままの部屋は薄暗く、もう陽も上つていて、この中に盛り上がったシーツにドリーは顔を顰めた。

「奥様、奥様、起きてください。気分が悪いようでしたらお医者様をお呼びいたしましょうか？」

医者といつ単語にエミリアは首を振った。医者になど見せたらたちまち健康であることが分かつてしまつ。エミリアはただほんの少し考える時間が欲しかつただけなのだ。

いつもならば考えられないほど緩慢な動きで支度をするエミリアとは反対に、シーツを剥がし洗面器に水を張るドリーの動きはとても機敏だ。一つ一つの動作に無駄がない。時々エミリアの様子を窺いながらも手を止めないのにはとても驚いた。

今日は薄い水色のドレスで、普段着るものよりも若干ゆつたりとしたデザインに出来ていて、髪は邪魔にならないように結われ、首筋

に僅かばかりの後れ毛を散らした。

「顔色が少し悪いようですが、本当にお医者様をお呼びしなくてよろしいのですか？」

「大丈夫よ、少し寝不足なだけだから」

自分に言い聞かせるようにして笑うと、鏡に映る顔もさつきよりかは明るく見える。ドリーは仕上げに肌にいいとされる薔薇の精油を匂いが気にならない程度に薄く塗ってくれた。

彼女の手にかかるは誰もエミリアが元家庭教師だとは思わない。元々職業柄姿勢はよかつたが、この数週間の特訓でそこに洗練さが加わった。

指先一つでも貴婦人でなければなりません。マナーの講師はそう言った。

そうだ、最早私はエミリア・アンダーソンではない。ラザフォード卿夫人としてマグナスを支え、ダニエルに愛情を注ぐのが役目だ。その為には悩みなど抱えている場合ではない。

目を閉じて深呼吸をすると、胸の痛みも少しは取れたような気がする。ドリーに支度の礼を言い、エミリアは朝食を取る為に階下へと降りていった。

ダイニングにはエミリア一人の朝食が並んでいた。この時間だ、マグナスとダニエルはとっくに食事を終えてしまつたのだろう。

本来なら次の仕事に取り掛かれる時間だというのに、エミリアの為にメイドやシェフの時間が押してしまつている。そのことに申し訳なく思いながら席に着いた。

伯爵家に来てからというもの料理人たちの心のこもつた料理はいつもエミリアの心を温かくさせる。野菜に果物も充実しており、食後にデザートもつく豪華さだ。

丁度エミリアがパンに手を伸ばした時、微かにドアが開いたのに気が

がついた。その僅かな隙間から金色の髪が覗き、くじくじとした目が片方だけ部屋の様子を窺っている。

エミリアは咄嗟に何事もなかつたかのように澄まし、メイドが運んできてくれたスープを食べ始めた。

「まあまあ、ダニエル様！」

しかしそんなエミリアの努力も、ミセス・タリスの威勢のいい声で水の泡と化してしまった。ダニエルはひどく不機嫌そうにしているが、ミセス・タリスはお構いなしにダニエルの手を引きエミリアの近くまでやつてきた。

食事中の為ダニエルを抱き上げることは出来なかつたが、それはミセス・タリスも分かつてゐるようで給仕の者にエミリアの近くまで椅子を持つてこさせ、そこにダニエルを座らせた。

好奇心旺盛な瞳はエミリアの一挙一動を見逃すまいと忙しなく動く。しかし人に見られていると食事がしづらいものだ。

エミリアは早々に食後のお茶を諦めざるを得なかつた。

優秀な給仕たちはエミリアが立ち上がるのを見計らい椅子を引いてくれる。

「待たせてごめんなさいね、ダニエル。今田は昨日の続きからでよかつたかしら？」

ダニエルの目が嬉しそうに輝く。

最近エミリアはダニエルと散歩をしながら、色々なものの名前を彼に教えている。ダニエルは本来好奇心旺盛で、頭がいいらしく何か疑問を見つけるとエミリアのドレスを引っ張り教えを乞ひようになつていた。

彼が一つずつ知識増やしていくと思うとエミリアは嬉しくて仕方がないのだ。レックスは大人しく後をついてくるだけで、まるで主人

の勉強の時間の邪魔はしないと言つていいようだつた。それでも少しでも休憩を取ると途端にダニエルにじやれつづるのだが。

「申し訳ございません。旦那様が外で待つていらっしゃいますので奥様はそちらへ」

しかし、そのわざやかな時間はネルソンの一言によつて壊されてしまった。ダニエルはその言葉を聞くが否や顔を顰め、エミリアのドレスを強く握つて後ろへ隠れる。

だが優秀な執事はこの家の主にどうまでも忠実だ。

「ナタリー、いるのだろう? ダニエル様をお部屋へお連れしなさい。恐れ入りますが、奥様。ダニエル様とのお散歩はまたの機会に」

礼儀正しいが、この執事には何故だか逆らえないような気がする。未だドレスを掴んで離さないダニエルの頭を撫で、エミリアは溜め息を吐いた。

昨日の今日でマグナスが何の用があるとこいつのだろう。

ナタリーが早足で近づき今にも泣きそうなダニエルを抱き上げようとするが、一向にダニエルがエミリアから離れる気配はない。ナタリーが躍起になり小声でダニエルを窘めるが、それも上手くはいかなかつた。

だがいつまでもこうしていいるわけにもいかない。エミリアはダニエルを抱くと額にキスを落とし言つた。

「ダニエル、少しの間だけだからいい子で待つていてくれる? それまでナタリーと一緒に昨日の復習をしておいてね。全部覚えられたら、後でシエフにお菓子をつくつてもらいましょうね」

その言葉にダニエルはしぶしぶといったように漸くナタリーの腕の

中に収まつた。拗ねてしまつたのか、エミリアの方は向かなかつたが。

寂しく思いながら、ナタリーに連れられてダイニングルームを出でいく後姿を見つめた。少しずつ心を開き始めているダニエルとの約束は出来れば破りたくなかつた。

こうなればできるだけ早くマグナスとの用事を終わらせるだけだわ。ネルソンの後に続きエミリアは密かに思つた。

外に出るとからりと晴れた空がとても美しかつた。風もそれほど強くはなく、この分なら午後になつて急に天氣が変わる心配はないだろつ。

ポーチには何故か乗馬服に身を包んだマグナスと、美しい黒毛の馬、それから賢そうな大型の犬が大人しく座つていた。  
もしかしてどこかに出掛けのだろうか？見送らせる為にエミリアを呼んだと考えられるが、それにしてもあまりに軽装過ぎる。様々に疑問を抱えたまま近づいて行くと、エミリアに気付いたマグナスが軽く頭を下げた。

「もしかしたら来てくれないとも思つた。私よりダニエルを優先するのではないかとね」

「そうしたかつたのですけれど、あなたの優秀な執事が許してくれませんでしたの」

「ああ、確かにネルソンは感謝したいくらい私に忠実だな」

皮肉たつぷりな言葉にもマグナスは怒つた様子はなく、寧ろ微かな笑みさえ浮かべてエミリアを見つめている。本当はもっと嫌味を言つつもりであつたのにすっかり毒氣を抜かれてしまい、結局それ以上は言葉を紡げなかつた。

「どうやらかへお出掛けですか？」

エミリアの質問にマグナスはまたも驚くような言葉を口にする。

「君さえよければ、私と一緒に庭を見て回らないか。まだ全てを見たわけではないのだろ?」

私さえよければですって?エミリアは一瞬、自分の耳がどうかしてしまったのかと思った。なにしろ今までマグナスがこうしてエミリアの都合を聞いたことなどなかったからだ。

求婚の時も、この家に来てからもその後エミリアが反論こそすればマグナスの要求は一方的なものであり、エミリアが彼に従うであろうという予測のもとに言葉にされていた。

しかし今エミリアの都合を聞くマグナスの表情はいつもの尊大なものではなかつた。例えエミリアが提案を拒否したとしても、マグナスは黙つて受け入れてくれるような気がした。

これは彼なりの一種の贖罪なのだろうか。マグナスも昨日のことを気に病んでいるのだとしたらそれも頷ける。その申し入れを断る理由などエミリアにはなかつた。

「よひじんで」一緒にします。マグナス

グレーの瞳が一瞬だけ光を帯びる。その様子は少しだけダニエルに似ていた。

やはりなんだかんだ言つても結局血の繋がつた親子なのだと実感する。

マグナスはエミリアの近くまで馬を引いた。こんなに近くで馬を見たことがなかつたエミリアは少々怖がりながらも、艶やかな黒毛と優しい目にすぐにその緊張を解いた。

鼻先を撫でてやると気持ちよさそうに嘶くのがとても可愛らしい。

それを見ていた犬もしつぽを振りながら元気よく吠える。

「ブルーだ。足が速く、乗り心地も安定している。大人しい性格だから暴れることも殆どない。そっちのポインターはケリーという。嗅覚に優れ、体力がある。もちろん頭もいい。狩にはもってこいだが、今日は案内役に徹してもらつ」

マグナスの言葉が分かるかのようにブルーは名前を呼ばれるとエミリアの手に鼻先を押しつけ、ケリーはエミリアの回りをぐるぐると回った。

2匹ともマグナスに忠実なのだろう。彼が言うように狩の時には頼もしい相棒となりそうだ。

エミリアが触れても嫌がつたりしないといふできちんとしつけがされているのがよく分かる。交互に2匹を撫でながらそう思った。

馬に乗つたことがないと怖がるエミリアをマグナスは抱き上げ、ブルーの背に乗せた。いつもよりもぐんと視界が高くなつて体が縮むような気がしたが、背中にマグナスの体温を感じるとそれどころではなくなつた。

エミリアを後ろから抱きかかえるようにして器用に手綱を操る。右へ、左へ、彼女が怖がらないように速度も一定のままだ。前を歩くケリーが時折後ろを振り返つては、主人たちがきちんと着いてきているかを確認しているようだった。

「怖くはないか？」

「はい。風がとても気持ちいいです」

マグナスの問いかにもそつ答えるのが精一杯だ。彼の口調は今日ほとことん優しかつた。威圧的ではないマグナスの声は、低く耳に響き心臓の鼓動を速める。

「噴水のところまでは行ったことがあるだろ？。その隣が迷路になつてゐるから、後でダニエルと遊ぶといい。私も子供の頃勉強を抜けだしては迷路に隠れていた」

「まあ、いけない生徒でしたのね」

初めて触れるマグナスの過去にエミリアは笑つた。今までこんな風にマグナスが自分のことについて話してくれることはなかつたため、とても嬉しかつた。

マグナスもそんなエミリアの笑顔を見て、自然と頬が緩むのが分かつた。過去など無意味に等しいと常々思つていたが、誰かに語るものとしては多少なりとも価値があるよつに思えた。

幼いマグナスにとって庭の迷路は唯一の逃げ場所と言つても過言ではなかつた。次代の伯爵として必要なことは物心ついた頃からとことん叩きこまれたし、ある程度年齢がいくとすぐに学校へ入れられたし子供時代を語るには思い出があまりにも少ない。

そんな中で時々勉強を抜けだして訪れる庭は静かで気持ちがよかつた。見たこともない虫や動物に触れ、たまに庭の手入れをしている男にあれこれ質問する時間が冷めた生活を潤していた。

すぐに父親に知れることとなり、きつに罰を与えてからはそれもなくなつてしまつたが。

ダニエルに関しては庭を避難場所としてではなく、遊び場所として覚えていて欲しいと思つた。今見ても庭師の作品は美しく見るものを飽きさせない。まさに”絵のような（ピクチャーレスク）”と称するに相応しい。

「向こうに見えるのがオランジエリー、寒い冬にオレンジを育てる為のものだ。その向かいがキッチンガーデン、応接間に隣接しているのが温室だ」

マグナスの説明通りに視線を走らせて行く。一つの領主館にこれほど多くの建物があると、全体を見渡すのは難しいだろ。

ただただ感嘆の溜め息しか零れない。

そんなエミリアを見てマグナスは悪戯っぽく笑うと言った。

「これくらいで驚いてしまっては困る。我が領地にはやうに素晴らしい場所があるのだから」

「それはどういづ…きやあ！」

エミリアの質問に答えるより早く、マグナスは突然馬を走らせた。後ろに倒れそうになつたエミリアをマグナスの腕が支える。漸く存分に走ることができた所為かブルーノもケリーもその足取りはとても軽い。

風が緩く編んだ髪を遊ばせるように吹く。蹄が地面を蹴る音、ケリ一の吠える声、微かなマグナスの息遣い、それから自分の心臓の音。まるで全てを攫つて行くかのように景色はどんどん流れていつた。

マグナスの腕にしがみつくよつとしてエミリアは出来るだけ息を整えるよう努力した。マグナスと領地に来る際に乗つた馬車はちゃんと窓がついていた為まともに風を受けなかつたし、もつと速度はゆっくりであった。

息を吐き出す前に肺に空気が入つてくる。慣れないエミリアにはどう呼吸をしていいか分からない。ついに苦しくなつてマグナスに言おうかと迷つていると漸く速度が落ち、深呼吸ができるよつになつた。

「すまない、大丈夫か？」

心配げな声に精一杯の笑顔を作つて答えた。本当はまだ空氣がどん

どん入つてくる感覚が抜けなかつたのだが、あと少ししたらそれも治まるだろう。

来る時と同じようにマグナスに抱かれ馬を降りたエミリアは、田の前に広がる光景に言葉を失つた。

そこにあつたのは邸のように人工的に作られたものではない、自然の木や植物だつた。薄い紫、黄色、白などの花や葉の細い植物、年代を感じるどつしりとした木には薦が絡まり、青々とした緑が目にも鮮やかだ。その向こうには川が流れしており、水音が耳に心地いい。早速ケリーが川に近づき水を飲み始めた。

ブルーノの手綱を手近な木に縛り付け、マグナスはエミリアの手を引き少し離れた場所まで連れていつた。真つ白な花をつけた木は堂々とそこに立ち、風に揺られる度に花弁が空中に舞つた。

「コンゴの木だ。もう少しそれば実をつける。私の祖父が祖母の為にここに植えたらしい」

「どうして私をここへ？」

一瞬の躊躇いの後、マグナスはエミリアの両手を取つた。

指先が熱いと感じるのはマグナスの所為ではなく、自分の体温が上昇したためなのだろうか。

「昨夜の許しを乞ひに。エミリア、私を許してくれるか？」

マグナスの瞳は真剣だつた。真つ直ぐにエミリアを見つめ、真摯に問う姿にエミリアの鼓動がまた一つ速まつた。

指先を包む手に少しだけ力を込め、エミリアもまたマグナスを正面から見つめた。グレーの瞳の中にエミリアの顔がはっきりと映る。

「あなたを許します、マグナス。私こそ無神経なことを言つてしまい申し訳ありません」

2人の顔に自然を笑みが浮かぶ。

「私たち、やはりいいお友達になれそうですね」

「ああ、私もそう思う」

エミリアの言葉にマグナスはほんの少しだけ痛みを覚え、マグナスの微笑みにエミリアはときめく心を隠せなかつた。  
だがそれは口にするにはあまりに淡い感情で、自身の中にあるプライドと追いつかない気持ちが彼らから言葉を奪つた。

言つてしまえばそこで何かが終わりのような気がしたのかもしれない。

マグナスとエミリアはお互い不可解な感情を押し殺し、僅かな嘘を笑顔に乗せた。

静かな時間であった。

2人の間にほとんど会話はなかつたが、以前感じたような気まずい沈黙はなかつた。ただ風を感じ、小鳥の轟りを聞き、川のせせらぎに身を任せた。たつたそれだけのことだが、マグナスは今まで感じたことのない安心感を覚えていた。

緑に囲まれ、道らしい道など存在しない場所をエミリアは気にした様子もなく進んでいく。狩猟用の服装に身を包んだマグナスとは違ひ、エミリアはいつもよりは軽装なもの、長い裾のドレスだ。なのに彼女の足は器用に木々の間をすり抜け、マグナスの前を歩いて行く。

ケリーは女主人の隣にぴったりとつき、時折マグナスを急かすように吠えた。その声も森の奥に響きながら吸い込まれていく。邸の庭のように庭師が手塩にかけて造り上げた人工的なものではない自然の緑。配置も配色もまるで統一されていないが、この美しさに惹かれるのは何故であろうか。

元々ここはマグナスが様々な喧騒や煩わしさから逃れる為の唯一の場所と同時に他の誰の侵入も許さない場所でもあつた。サリアナも、リチャードも乳母であつたミセス・タリス、両親ですらマグナスが密かにここに通っている事は知らない。

誰かが知るとことになつた時、それがこの場所と別れを告げる時だとマグナスは固く誓つていた。

だが、エミリアは自らここへ導いた。後から理由付けなど幾らでもできようが、告白してしまえば理由などない。ただそうしたかったから、としか。

彼女と共に歩む同じ空間は、不快とはまるで正反対の感情をマグナスに与えた。それは安らぎと呼ぶに相応しく、未だ嘗て感じたこと

のない不思議な気持ちだ。口に出すのはひどく躊躇われるが、それがエミリアによつてもたらわれるものだと彼も自覚していた。

エミリアの纏う空氣は柔らかい。敢えて言葉にするのなら午後の陽だまりか、凍てつく冬を越えた先の凪いだ春風だ。だが時にはこちらが驚くほど強い瞳をするし、一旦こうと決めたことは真っ直ぐにやり通す頑固さもある。

それが温室の中で蝶よ花よと育てられた他の令嬢とは違うところだ。夜会やオペラよりもダニエルと外で遊ぶことを好み、新しいドレスよりもマグナスにもつと子供のことを考えるとせがむ。エミリアの我が儘は決して己の為に使われることはない。

無意識のうちにマグナスは自分の左胸辺りを強く掴んでいた。彼の力に皺一つなかつたシャツに歪な線が刻まれる。

時折感じるこの胸を焦がすような、締め付けるような痛みは一体何なのだ？

### 「エミリア」

マグナスの呼びかけに、数歩先を歩いていた彼女が振り返る。金色の髪が風に遊ばれ軽やかに揺れ、逆光が彼女のほつそりとした体を薄い光の膜で包む。

眩しさに目がくらんだ。

できることならその体を強く抱きしめてしまいたい。だが、そんな欲望などマグナスとエミリアの契約の前で意味など成すはずがない。そうでなくともマグナスの身勝手な感情でエミリアを何度も傷つけたか知れないのだ。

必死に己を律し、平静を装つて言葉を続けた。

「あまり先を急ぐのは危険だ。長い裾を踏んで転んでしまうだろう

だがマグナスの忠告をエミリアは悪戯っぽい笑みで一蹴した。

「心配には及びません。」これでも運動神経には自信があるのです。故郷の村にいた頃はショットチャーフ男の子に混ざつて遊んでいました

言つてからエミリアは自分の失態に気付いた。

下層の中流階級出身であることと、従兄弟が殆ど男児だつた為に幼いエミリアの遊び相手は殆ど男の子だった。本来なら有り得ない事ではあるが、両親も他の大人が見ていなければという前提で彼らと遊ぶことを許してくれていた。

だがマグナスは生粋の貴族だ。貴族の令嬢は慎ましやかに家で過ごすことを基本としている。きっとはしたないと呆れられたに違いない。

恥ずかしさにおもわず俯くが、次にマグナスが掛けてくれた言葉はエミリアの予想を大きく越えていた。

「ああ、道理で。ネルソンが言つていた。君はダニエルと庭でよく競争をしているそうだな」

驚くべきことに口元に咎めの色はなかった。それどころかどうとかく楽ししそうに彼は言つ。

「その運動神経ならすぐに乗馬もできるようになる。いい馬が見つかったらすぐに君にプレゼントしよう。狩に付いてくる婦人もいるから、何か言われる心配はない」

「それは…とても嬉しいです。今日初めて馬に乗りましたけど、実を言つととても気に入ってしまったんです」

嬉しさか恥ずかしさか、エミリアの頬がほんのりと紅色に染まり、

マグナスは自制の為に更に拳に力を込めなくてはいけなかつた。

どうしてかエミリアは簡単にマグナスの心を搔き乱す。今までに彼の心をこうもあっさりと攫つていつた女性がいただらうか。彼女といふと自分がまるで分からなくなる。

鉄壁の仮面を着け、お互ひのプライベートには一切干渉せず形だけの夫婦であることをエミリアとの結婚を決めた時に誓つた筈だ。その考えはきっと今も変わつてはいない。

マグナスはなるべくこれまでの生活を変えるようなことはほしたくなかったが少しずつ、感情に思考がついていかなくなつてゐる。固く何人も通さぬ壁を作る傍らで、自らその城壁を壊そうともしているのだ。こうしてエミリアをこの場所に連れてきてもなお、マグナスの中で激しくせめぎ合つフライドと過去が最後の一歩を踏み出すことを恐れています。

マグナスがマグナスであり続ける限り、その2つはなくなりはしないのだ。

エミリアから視線を逸らし、静かにマグナスは切り出す。この苦しくも優しい時間もそろそろ終わりだ。

「そもそも屋敷に戻ろう。いつまでも君を独占してはダニエルに恨まれる」

マグナスの言葉にほんの少しの寂しさを覚え、エミリアは戸惑つた。あれ程早く邸に戻り、ダニエルと仲直りをしたいと考えていたのに今はこの穏やかな時間が失われることに落胆している自分がいる。予想に反して、心地よい空間がエミリアの中にある昨夜のマグナスへの恐怖を消し去つていた。

たった数時間ではあつたが、こんなにマグナスと同じ時間を過ごしたのはこれが初めてではないだろうか。いや、結婚後すぐラザフォード領に向かう時は2日間馬車に揺られ、宿も一緒だつた。

だがあの時2人の間に流れる空気はもつと重苦しいものだつた。最低限の会話は丁寧ではあつたが温かみはなく、ただ同じ空間にいるまったくの他人と言う方がぴつたりと当て嵌まつただろう。けれど今日は違う。言葉こそないものの静かで穏やかな空気が始終2人を包んでいたし、初めて見た彼のささやかな笑みはエミリアの頬に熱を持たせた。僅かでもマグナスの過去を窺い知れたことも大きな喜びであった。

昨夜のことからマグナスがエミリアに対して秘密を持つてゐる事は明らかだった。他人が自分の心に触れるのを極端に嫌うのはきっとその為だろう。

しかし今朝感じたような切なさは今はなかつた。例えマグナスがどんな秘密を隠していようとも、この数時間紡いだ時間は決して嘘ではないと思ったからだ。

彼が自分から話してくれたら　　その時は何も言わずに聞こう。生涯それがなかつたとしても、マグナスを責める気持ちなど微塵も湧いてはこなかつた。秘密は誰もが有する。無理に暴く必要などどこにもない。

「ええ、マグナス。戻つたらたっぷりとダニエルを甘やかします」

エミリアは頷き、マグナスが差し出した手に自分のそれを重ねた。彼の力強い指先が、壊れ物を扱うように丁寧にエミリアの指先を撫でる。

まるで2人もこの時間の終わりを心から惜しんでいるかのよう。

\*

帰りの道はひどく早く感じた。行きよりもずっとゆっくりとブルーノを走らせていたのにだ。大半は沈黙が占め、残りの会話も無難なものであった。

ケリーとブルーノが久々の遠出に満足し、落ちついて手綱を取ることができたのが唯一の救いだ。こんな散漫した集中力は狩の時には命取りにもなる。

幸いマグナスの乗馬の腕と名馬と謳われるブルーノのお陰で今のところそう言つた危険はないが、注意を怠つて落馬した貴族を何人も知つている。

己の幸運を神に感謝し、すっかりブルーノの背中が気に入つた様子のエミリアを抱き上げて地面に降ろした。できるだけ華奢な体に力を込めるようにしながら。

勤勉な使用人たちとは馬の蹄の音が聞こえると同時に玄関から出てきたらしく、慌てる様子もなく並んで主人たちを出迎えた。執事やミセス・タリスの姿はなかつたが2人はその事実に気がついていなかつた。

「連れて行つて下さつてありがとうございました。とても楽しかつたです」

「ああ。私もだ」

言つてからマグナスはそれが本心からの言葉だとこいつとこ気付いた。いつも静かなあの場所が特別鮮やかに見えたのはエミリアの所為でもあらう。

「今度はダニエルも誘つて」

エミリアの言葉を遮るように玄関の扉が乱暴に開き、ミセス・タリスが現れた。その表情は険しく、いつも穏やかに冷静にメイドたちを取り仕切つている彼女からは想像もつかなかつた。マナーを欠いたミセス・タリスの行動にマグナスは一瞬眉を顰めたが、すぐに「どうしたのだ」と返すに留まつた。尋常ではない彼女の雰囲気にそれだけ緊急のことなのだろうと踏んだからだ。

「奥様！お疲れのところ申し訳ございません、ダニエル様が」

ミセス・タリスの言葉を最後まで聞くことをしなくて彼女が言わんとしていることを悟つたエミリアはさつと表情を強張らせた。

「分かつたわ。すぐに行きます。マグナスは……  
「私も行こう

先にお休みになつてください」と続けようとした矢先にマグナスがそう言つたのでエミリアは頷いた。ダニエルは彼の息子だ。早足で歩きだした2人の後をミセス・タリスが追いかける。3人分の足音が高い天井いっぱいに木靈し、耳を煩わせた。ダニエルの部屋までがこんなに遠く感じたことなど今までない。エミリアは逸る気持ちを抑えられなかつた。

今ほど長い裾のドレスが邪魔に感じたこともないだろう。

ダニエルの部屋は主階段を上った先の、家族の中では一番奥の部屋になる。そこにはすでにネルソンがあり、開いたドアから子供の泣く声とナタリーのものだろう、女性の高い声が聞こえた。

ネルソンはエミリアの後ろにいるマグナスに気付くと一瞬驚いたよう目に見開いたが、すぐに頭を下げるトドアの端へ寄り主人たちに道を開けた。

エミリアが部屋を覗くと、そこはいつかの再来であるかのような光景であった。床に座つて泣き叫ぶダニエルとそれを必死の形相で宥めようとするナタリー、周りには物が散乱し、割れた花瓶から零れた水がカーペットを汚している。

「これは…どういうことなのだ」

今まで使用者たちから話を聞いたことはあっても実際にダニエルの癪癩を目の当たりにするのはこれが初めてだった。マグナスは目の前の光景がまるで夢のように思えて仕方がなかつた。

いつも大人しく表情を変えない息子が力の限り泣き、感情をぶつけている。おもわずエミリアの方に視線を向けるが、彼女は何も言わず真っ直ぐにダニエルの方へ歩みを進めた。

その迷いのない足取りにマグナスはただ息を詰めて見つめることしかできなかつた。

「ダニエル」

エミリアの声は静かで穏やかだった。先ほどまでナタリーの劈くような声からしてみたら、聞き逃してしまうのではないかと思うほど小さな声。

だがダニエルは彼女の姿を確認すると涙で濡れた瞳で、エミリアを見上げる。縋る様な目は必死で何かを訴えている。

エミリアが腰を折つて両腕にダニエルを抱える頃にはすっかり大人

しくなり、小さくしゃっくりを繰り返しながらエミリアの肩口に顔を埋めた。その小さな背中を撫でるように優しく叩き、エミリアはナタリーを振り返った。

さつきまでの余韻からか大きく肩で呼吸し、髪を乱しているナタリーは女主人とその腕に抱かれているダニエルを強く睨みつける。手櫛でほつれた髪を耳に掛け、すっかり皺になってしまったドレスを直すことも忘れてはいない。

「ナタリー、一体何があつたの？」

「いいえ。奥様には関係のないことです。ただ私とダニエル様の間に意見の相違があつただけです」

「意見の相違とは具体的に何かを聞いているのだ。どう関係ないのか答えなさい。事によつては君がこの邸から出ていかなくてはならない」

しつかりと、しかしどこかエミリアを蔑んだような言い方に成り行きを見ていたマグナスが口を開いた。ナタリーがエミリアに対してこんな態度を取つていたことすら今日初めて知つたことだ。  
低く苛立つた声を聞いたナタリーはそこで初めてマグナスの存在に気付いたようだつた。はつと顔を上げ、気まずそうに背けた顔は羞恥に赤く染まつてゐる。

いつも息子のことなど気に掛けない主人がまさかここにいるとは思つてもみなかつた。きつく唇を噛んで荒れ狂う胸の中を必死で抑え込む。

エミリアが後妻としてグランヴェル邸に来るまでは、ダニエルの面倒は一切ナタリーが見ていた。時々ひどく機嫌を損ね、中々ナタリーに心を開かないことに落ち込んでいたが、それでもダニエルのことを一番分かつてゐるのは親であるマグナスでも女中頭であるミセス・タリスでもなく自分だと胸を張つて言えただろう。

母親のいらない可哀想な子供にナタリーは出来るだけ愛情を注いでき

たつもりだ。もう少し大きくなれば寄宿学校に入れられてしまう。せめてそれまでは乳母として自分が一生懸命育てなければならない。そう思つて毎日必死だった。

それなのに突然、この家の主人である伯爵が結婚したことから状況は一気に変わった。エミリアも貴婦人の例に漏れず継子を目に掛けたりはしないだろうと思っていたのに、それは大きな間違いであつた。彼女は暇さえあればダニエルと会話をし、辛抱強くダニエルの言葉を待つた。癪瘍を起した時も屋敷中の使用人たちを悩ませていたのは何だつたのかと思うほどあつさりとダニエルの心に住みついていた闇を取り払つた。

ナタリーがダニエルと築き上げてきたと思つていた絆は一方的なものでしかなかつたことがとても悲しかつた。エミリアがダニエルを抱き上げ一緒に笑つている姿を見る度に悔しくて仕方なかつた。私だつて一生懸命だつたのだと何度も叫びたかつたか知れない。

その遺る瀬無さからエミリアに冷たい態度を取り続けてきたのが、今日になつて大きな仇となつた。邸のことに関して決定権はすべて当主である伯爵にある。女主人に放つた悪意を、伯爵は許しはしないだろう。

ナタリーは疲れたように肩を落とした。

「…花が」

「花？」

「生けてあつた花が枯れていたので、取り変えようとしただけです。それから突然ダニエル様が泣きだして」

落ちて割れた花瓶を見れば、ナタリーの言つてゐることが嘘ではないと分かつた。だがそれだけでどうしてダニエルがあんな行動を取つたのかエミリアには分からなかつた。

以前癪瘍を起した時には寂しさを言葉に出来ないからという明確な理由があつたが、今回ばかりはダニエルの言い分も聞かなくては分

からない。エミリアはなるべく刺激を『えない』ようにダニエルに話しかけた。

「ダニエル、ナタリーに花を捨てられるのが嫌だつたの？」

微かに頭が動き、ダニエルが頷く。

「それはどうして？」

「……」

「ダニエル」

宥めるよつな声にダニエルはおそるおそるといったように口を開いた。エミリアのドレスに顔をつけている所為か、それともたくさん泣いた為か掠れた声がぽつりと言葉を零す。

「はな、いつしょのだもん」

「一緒に？」

何度も嫌だというよつに首を横に振り、それつきりダニエルは黙ってしまった。なす術がなく途方にくれたエミリアがふと床に視線を向けると、割れた花瓶と半分以上萎れてしまつていてる花が目に留まつた。

先ほどナタリーが言つたのはこのことなのだろう。

割れた花瓶の破片で怪我をしてしまつては危ないから、すぐにメイドに片づけさせようと思つた時エミリアははつとした。枯れかけている花に見覚えがあつたからだ。

あれは確か2・3日前だ。ダニエルと一緒に摘んだ花。大事にしましょうね、ヒダニエルと半分に分けて自分の部屋にも飾つてある。その花は日向よりも日蔭を好むことを知つていたエミリアは花瓶を陽の光が当たらない場所に置いていたが、この部屋を掃除している

使用人が気付かずに窓際に近いテーブルに飾つてしまつた為に早く枯れてしまつたのだろう。

ダニエルが自分との約束を彼なりに一生懸命守るうとしてくれていたことに、エミリアはすっかり胸が熱くなつた。柔らかな髪を梳き、額にキスを落とす。ダニエルが揺つたそつに身動きしても止めるつもりは毛頭なかつた。

「ありがとう、ダニエル。また一緒にお花を摘みに行きましょうね。でもナタリーは何も知らなかつたの、彼女が悪いわけじゃないわ。謝りましょうね」

腕の中でダニエルが頷き、ゆっくりと顔を上げる。赤くなつた頬と目がすっかり氣落ちしていたナタリーを捕える。「ごめんなさい」と小さく呟く唇は彼女には見えたのだろうか。

エミリアもナタリーとマグナスにダニエルの癪の理由についてきちんと説明した。

「私もきちんと話していなかつたのがいけなかつたわ。『ごめんなさい、ナタリー。指が少しきれてるわね、後でちゃんと治療して』

「はい、奥様」

「ダニエルのこと、たくさん教えてね。ダニエルつたら私といふときナタリーの話をするの。あなたのこと好きなのね」

意外な言葉にナタリーは弾かれたように顔を上げた。てっきり自分はダニエルに嫌われているものだとばかり思つていたのだ。視界がゆっくりと曇つていくのは涙の所為だらうか。

ナタリーは何度も頷き、エミリアに心の中で謝つた。彼女はナタリーからダニエルを取り上げようとしているのではない。ただ一緒に頑張ろうと言つてくれる。ナタリーは自分の態度を大いに反省した。

「まったく、君は本当に人の心を掴むのが上手い」

一部始終を見ていたマグナスは苦く笑いながら呟いた。この邸の主人であるといふのに全くと言つていいほど役には立たなかつたが、ダニエルとナタリーには彼の一言よりもエミリアの一言の方が胸に應えたらしい。

エミリアはそうやってこれからもたくさんの人々の心を攫つて行くのだろう。

「褒め言葉として受け取つておきます。や、ダニエル。顔を洗つて支度しましょ。今日はナタリーも一緒に散歩よ」

優しくダニエルを抱き上げるエミリアを見てマグナスは急にあることに気付きた。愕然とした。

彼はまだ一度もダニエルをこの腕に抱いたことがないのだ。生まれてから今までたつたの一度も。

罪悪感に苛まれると同時にダニエルを抱きしめるのがひどく恐ろしかつた。その理由はたつた一つに他ならない。

去つていく彼らを見ながらマグナスはただ、拳を固く握りしめることができなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8069q/>

---

灼熱の氷

2011年10月9日00時47分発行